

穴道複合施設整備事業に伴う発掘調査報告書

森屋敷遺跡

平成27(2015)年1月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

穴道複合施設整備事業に伴う発掘調査報告書

もり や しき い せき
森屋敷遺跡

平成27(2015)年1月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

例　　言

1. 本書は、平成 26 年度に実施した、穴道複合施設整備事業に伴う森屋敷遺跡の発掘調査報告書である。

2. 本書で報告する発掘調査は、松江市から松江市教育委員会が委託を受け、公益財団法人松江市スポーツ振興財団が実施した。

3. 本調査地の名称・所在は以下のとおりである。

(名称) 森屋敷遺跡

(所在地) 島根県松江市穴道町穴道885番地3

4. 現地調査の期間

平成 26 年 4 月 14 日～平成 26 年 7 月 31 日

5. 開発面積及び調査面積

開発面積 1,123.8m²　　調査面積 503m²

6. 調査組織

依頼者 松江市

主体者 松江市教育委員会 教育長 清水 伸夫

事務局 松江市歴史まちづくり部 部長 安田 憲司

〃 文化財統括官(埋蔵文化財調査室長兼務) 錦織 延樹

〃 まちづくり文化財課 課長 永島 真吾

〃 〃 埋蔵文化財調査室 調査係 係長 赤澤 秀則

〃 〃 〃 専門企画員 穴道 元

〃 〃 〃 主任 徳永 隆

調査指導 島根県教育庁 文化財課 主幹 深田 浩

実施者 公益財団法人松江市スポーツ振興財団 理事長 清水 伸夫

〃 埋蔵文化財課 課長 三島 秀幸

〃 〃 調査係 係長 古藤 博昭

〃 〃 〃 主任 落合 昭久(担当者)

〃 〃 〃 調査補助員 園山 薫

7. 調査に携わった発掘作業員

吾郷弘子、小豆澤幸治、石原早苗、石原一二三、勝部 誠、金坂 昇、千原 昌、田中敏雄、

土江伸明、土江政春、新田久子、日野幹朗、深津靖博、藤原知恵子

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構の浄書は以下のものが行った。

金坂 昇、園山 薫、落合昭久

9. 調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々から多大なご指導、ご教示、ご協力をいただい

た。記して感謝の意を表したい。

佐賀県立九州陶磁文化館 名誉顧問 大橋康二

大田市教育委員会 教育部 石見銀山課 西尾克己

10. 本書の執筆は、第1章を松江市埋蔵文化財調査室、第2章を圓山、第3・4章を落合・圓山が行い、編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て落合が行った。

11. 本書における土器区分・分類・編年は以下を参照した。

[弥生土器]

・『出雲・隱岐地域』『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』松本岩雄 木耳社 1992

・『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会 1992

[土師器]

・『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会 1992

・『史跡出雲国府跡－9 総括編一』島根県教育委員会 2013

[須恵器]

・『出雲地域の須恵器の編年と地域色』『島根考古学会誌 第11集』大谷晃二 島根考古学 1994

・『出雲地域における古代須恵器の編年』『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器 様相と領域性－』島根県古代文化センター 2010

・『史跡出雲国府跡－9 総括編一』島根県教育委員会 2013

[陶器・磁器]

・『大宰府条坊跡XV 一陶磁器分類編一』太宰府教育委員会 2000

・『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995

・『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会 2000

12. 本書に掲載する土層は、『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修：財団法人日本色彩研究所 色票監修 に従って表記した。

13. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第III系の値である。またレベル値は海拔標高を示す。

14. 本書における遺構記号は以下の通りである。

SB：掘立柱建物跡 SP：柱穴 SK：土坑 SD：溝 SE：井戸 SX：不明遺構、その他

15. 本書の遺構・遺物番号は、上位層から検出した順に連番で記載した。なお、遺構番号は調査時に設定したものを報告書作成にあたり、種別の番号に振り直した。

16. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は松江市教育委員会にて保管している。

本文目次

例言

第1章 調査に至る経緯 1

第2章 位置と歴史的環境

- 1. 地理的環境 2
- 2. 歴史的環境 2

第3章 森屋敷遺跡の調査

第1節 調査の概要と基本層序

- 1. 調査の概要 6
- 2. 基本層序 9

第2節 遺構と遺物

- 1. 第1面 12
- 2. 第2面 15
- 3. 第3面 48

第4章 総 括

- 1. 字名からみる森屋敷遺跡とその周辺 59
- 2. 森屋敷遺跡における各時代の様相 61
- 3. 越前焼の甕について 64
- 4. 滑石製石鍋の破片について 65
- 5. まとめ 67

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第 1 図 調査地位置図	1
第 2 図 周辺の遺跡分布図	3
第 3 図 調査範囲と開発範囲図	6
第 4 図 試掘調査 出土遺物実測図	7
第 5 図 調査区グリッド配置図	8
第 6 図 調査区土層断面実測図	10・11
第 7 図 第 1 面 平面実測図(近代)	12
第 8 図 第 2 面 平面実測図(古代～近世)	15
第 9 図 SPO1 出土遺物実測図	16
第 10 図 第 2 面 調査区南側 平面実測図(近世)	17
第 11 図 SPO1・SKO1～03・SD03 土層断面実測図	18
第 12 図 SKO1 出土遺物実測図	19
第 13 図 SKO2・03 出土遺物実測図	19
第 14 図 第 2 面 調査区南側 平面実測図(中世)	22
第 15 図 SBO1(SPO3～06) 土層断面実測図	23
第 16 図 SBO1(SPO3～06) 出土遺物実測図	24
第 17 図 SE02 平面・土層断面実測図	25
第 18 図 SE02 出土遺物実測図	26
第 19 図 SP07～22 土層断面実測図	28
第 20 図 SP07～14 出土遺物実測図	30
第 21 図 SP15～21 出土遺物実測図	31
第 22 図 第 2 面 調査区中央 平面実測図(中世)	32
第 23 図 SP23～27・SKO4 土層断面実測図	33
第 24 図 SP23～27 出土遺物実測図	34
第 25 図 第 2 面 調査区北西側 平面実測図(中世)	35
第 26 図 SKO4 出土遺物実測図	36
第 27 図 第 2 面 調査区南側 平面実測図(古代)	39
第 28 図 第 2 面 調査区中央 平面実測図(古代)	40
第 29 図 SP28・29・SK05～08 土層断面実測図	41
第 30 図 SP28・29・SK05～07 出土遺物実測図	42
第 31 図 第 2 面 調査区北西側 平面実測図(古代)	43
第 32 図 SKO8 出土遺物実測図	44
第 33 図 第 2 面 出土遺物実測図	46
第 34 図 遺物包含層(第 1～2 面間層) 出土遺物実測図	47
第 35 図 第 3 面 平面実測図(弥生・古墳時代)	49
第 36 図 SK11・12・13・15・16 土層断面実測図	49
第 37 図 SK09・10 平面・土層断面実測図	50
第 38 図 SK09 出土遺物実測図	51
第 39 図 SK14 平面・土層断面実測図	52
第 40 図 SK14 出土遺物実測図	52
第 41 図 SK17・18 平面・土層断面実測図	53
第 42 図 SK18 出土遺物実測図	54
第 43 図 遺物包含層(第 2～3 面間層) 出土遺物実測図	55
第 44 図 森屋敷遺跡周辺の字名	60
第 45 図 弥生・古墳時代	62
第 46 図 古代	62

第47図 中世	63
第48図 近世	63
写真1 調査区堆積土(西壁)	9
写真2 SEO1 出土 煮飯鍋	13
写真3 SX01 (地下構造物)	14

表目次

表1 近世の柱穴・土坑・溝 計測表	20
表2 中世の柱穴・土坑 計測表	37
表3 古代の柱穴・土坑 計測表	44
表4 弥生・古墳時代の土坑 計測表	54
表5 島根県における石鍋出土遺跡一覧表	66
遺物観察表	

写真図版目次

図版1 調査前全景(南から)	
調査区内北側堆積土(南から)	
図版2 調査区内中央堆積土(東から)	
調査区内西側堆積土(北東から)	
図版3 第1面 完掘(北から)	
第2面 完掘(南から)	
図版4 第2面 完掘(北から)	
第2面 南側【SBO1・SP01～22・SE02・SK01～03・SD03】完掘(東から)	
図版5 SP01 完掘(西から)	
SK01 完掘(東から)	
SK03・SD03 完掘(南から)	
図版6 SBO1 完掘(南から)	
SP02【SBO1】完掘(東から)	
SP03【SBO1】完掘(南から)	
図版7 SP04【SBO1】土層断面(南から)	
SP05【SBO1】完掘(東から)	
SP06【SBO1】完掘(西から)	
図版8 SE02 大形石積出状況(東から)	
SE02 完掘 大形石除去後(東から)	
図版9 SE02 完掘 石積み上部除去後(西から)	
SE02 土層断面(南東から)	
図版10 SP09 完掘(西から)	
SP12 完掘(南から)	
SP17 完掘(北から)	
SP18 完掘(東から)	
SP22 完掘(南から)	

- 図版 11 第2面中央【SP23～27】完掘(東から)
SP24 完掘(東から)
SP25 完掘(南から)
- 図版 12 第2面北側【SK04・08】完掘(東から)
SK04 完掘(北から)
SK04 土層断面(南から)
- 図版 13 第3面完掘(北から)
第3面中央 完掘(東から)
- 図版 14 SP28 完掘(西から)
SP29 完掘(西から)
SK05 完掘(北から)
- 図版 15 SK06 完掘(西から)
SK07 完掘(南から)
SK08 完掘(南西から)
- 図版 16 SK09 プラン検出(西から)
SK09 完掘(東から)
- 図版 17 SK10 完掘(北から)
SK11 完掘(北から)
SK12 完掘(西から)
- 図版 18 SK13 完掘(北から)
SK14 完掘(北から)
SK15 完掘(西から)
- 図版 19 SK16 完掘(西から)
SK17 完掘(西から)
SK18 完掘(東から)
- 図版 20 試掘調査 出土遺物
SP01 出土遺物
SK01 出土遺物
- 図版 21 SK02・03 出土遺物
SP03～06 出土遺物
SE02 出土遺物
- 図版 22 SE02 出土遺物
SP07・08・10～12 出土遺物
- 図版 23 SP13～15・18・20・21・23～27 出土遺物
- 図版 24 SK04 出土遺物
SP28・29・SK05・06 出土遺物
- 図版 25 SK07・08 出土遺物
第2面 出土遺物
- 図版 26 第2面 出土遺物
遺物包含層(第1～2面間層) 出土遺物
- 図版 27 SK09・14・18 出土遺物
- 図版 28 遺物包含層(第2～3面間層) 出土遺物

第1章 調査に至る経緯

松江市穴道町地内において、公民館と市支所の機能を併せた「穴道複合施設」の建設が、松江市教育委員会（生涯学習課）により計画された。

これに伴い、対象地に周知の遺跡は確認されていなかったものの、当地は未調査地であったため、平成25年9月13日に試掘調査（T1～T3調査区）を実施した。その結果、近現代に操業されていた工場等により大部分が撹乱を受けていたが、敷地西側に設定した調査区においては、古代から中世にかけての土器片等を含む遺物包含層が検出され、対象地の一部に遺跡が存在することが確認された。またこれを受け、敷地の東側に建物を配置することで遺跡に影響を及ぼさないように出来ないか検討されることとなり、遺跡の範囲をより詳細に確認するため、同年10月23日に再度試掘調査（T4～T6調査区）を実施し、遺跡の範囲を敷地西側の約1/3に特定した。

この結果を基に、関係者間で協議を重ねたが、施設の目的とその利便性を確保するため、遺跡の一部が施設の基礎により破壊されることは避けられないとの結論に至り、平成26年2月4日に「森屋敷遺跡」として遺跡の発見通知（当該事業計画の発掘通知を兼ねる）が提出された。これを受け、島根県教育委員会と協議し、同年2月13日付けで、遺跡のうち建物基礎にかかる範囲は発掘調査が必要である旨の勧告を受けることとなり、同年4月～7月にかけて、松江市教育委員会により当遺跡の一部について調査が実施されることとなったものである。



第1図 調査地位置図

第2章 位置と歴史的環境

1. 地理的環境（第1図）

森屋敷遺跡は、島根県松江市宍道町宍道に所在する。宍道町は、宍道湖の西南端沿岸部に位置し、東は松江市玉湯町、西は出雲市斐川町、南は雲南省大東町と加茂町に接している。宍道湖の西は出雲平野が広がっているが、平野の東部は斐伊川の土砂堆積によって形成されたもので、中世以前の宍道湖はさらに西へ広がっていた。⁽¹⁾ 宍道湖南岸は丘陵が湖岸近くまで迫り、町内には古代から形成された広大な平野はみられないが、宍道湖に向かって北流する川によって作られた幾筋もの谷平野が認められ、古くから耕地や居住地として利用してきた。近代に入ると湖の干拓によって新たな陸地が形成され、耕地や街区となっている。（「昭和新田」、「昭和」など）。

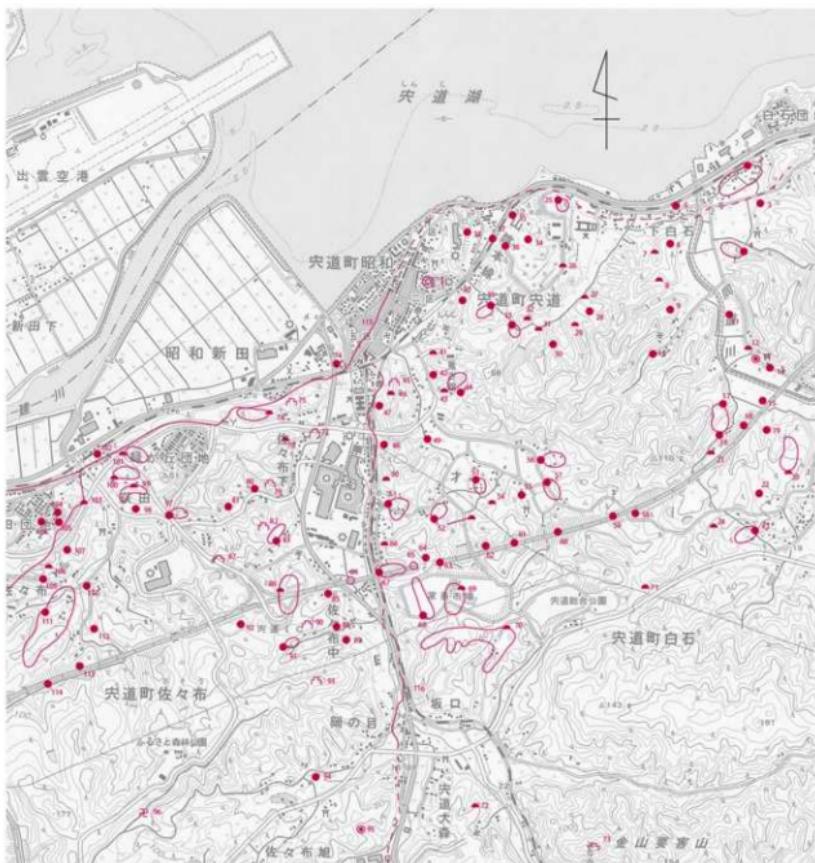
森屋敷遺跡は、宍道湖に注ぐ佐々布川の河口付近に広がる標高3.6 mの低地に立地する。宍道湖岸からは、約300 m南に位置するが、湖岸から150 mほどは戦後の干拓によって陸化した（「昭和」）もので、近代以前は遺跡北方の道路まで湖となっていた。また、森屋敷遺跡の北東には独立した小丘陵が宍道湖に向けて南北に延びており、南北方向には近世の山陰道沿いに街並みが広がっている。なお、南にはJR山陰線を挟んで山間部に連なる低丘陵が続いている。

2. 歴史的環境（第2図）

森屋敷遺跡周辺の縄文時代の遺跡は少ないが、山陰自動車道の調査でみつかった野津原Ⅱ遺跡（58）では落とし穴が確認され、狩猟が行われていたことが分かっている。⁽²⁾ 森屋敷遺跡周辺の縄文時代は、この頃の海進によって広がった古宍道湖の湖岸付近、或いは湖底であったものと思われる。

弥生時代においては、前期の遺跡は確認されていないが、丘陵上の上野Ⅱ遺跡（92）で前期の土器、白石大谷Ⅰ遺跡（16）で中期後半の土器が散見されることから、この時期の集落が存在している可能性が考えられる。後期になると、野津原Ⅱ遺跡（58）、山守免遺跡（59）、上野遺跡・上野Ⅰ遺跡（86）、上野Ⅱ遺跡（92）など、丘陵上に高地性集落が形成されるようになる。このうち、上野Ⅱ遺跡では、鍛冶工房の存在が明らかになっている。また、上野遺跡からは、吉備地方からの搬入品と考えられる特殊壺が出土しており、山陽地方との交流が窺える。⁽³⁾ その他、清水谷遺跡（69 清水谷古墳群）では、この地域では数少ない弥生墳墓がみつかっている。⁽⁴⁾

古墳時代に入ると、遺跡数、遺物量とも格段に増加する。前期には、上野遺跡でみつかった上野Ⅰ号墳や佐々布下古墳群（76）の佐々布下1号墳が築かれている。このうち、大型の円墳である上野Ⅰ号墳は首長墳とみられ、鉄製の仿製鏡、槍や玉類などが出土している。⁽⁵⁾ 中期になると、小さな谷を見おろす低丘陵上に水溜古墳群（70）などが築かれるようになる。また、この頃から古墳の石材としてこの地域が産地の来待石（凝灰岩質砂岩）が石棺などに使われるようになる。後期には、宍道要害山古墳（46）などの横穴式石室をもつ古墳や横穴墓が盛に行し、椎山古墳群（20）でみつかった前方後円墳の椎山1号墳や、前方後方墳と推定される伊賀見古墳群（4）の伊賀見1号墳などが造られている。また、横穴墓は主に河川を臨む中流域及び宍道湖に面した低丘陵に広く分布している。森屋



1 森屋敷遺跡	21 シトギ免遺跡	41 隨音寺横穴墓群	61 香田遺跡	81 大畠ヶ遺跡	101 椿ノ木宿古墳群
2 下白石遺跡	22 上後ヶ市道路	42 八斗久保遺跡	82 塔平遺跡	82 土居郭群跡	102 北ヶ市古墳群
3 平井瀬遺跡	23 鶴田遺跡	43 横町横穴墓群	83 川原川遺跡	83 西屋敷遺跡	103 長瀬古墳群
4 伊賀見古墳群	24 下金根横穴墓群	44 横町遺跡	84 君廻遺跡	84 石地藏遺跡	104 小界古墳群
5 後原遺跡	25 香の木遺跡	45 宍道要寄山城跡	85 女夫岩遺跡	85 竹ノ崎遺跡	105 萩田遺跡
6 奥遺跡	26 佐庭治高真首塚	46 宍道要寄山古墳	86 OM公園横穴墓	86 上野遺跡・上野I遺跡	106 美平遺跡
7 萩古墳	27 カシヤカ古墳	47 横畠遺跡	87 女夫岩西遺跡	87 城山城跡	107 佐々布森遺跡
8 萩遺跡	28 小畠遺跡	48 西代遺跡	88 矢頭遺跡	88 矢谷下遺跡	108 小佐々布古墳群
9 熊江遺跡	29 後谷横穴墓	49 六反田遺跡	89 清水谷古墳群	89 敷手遺跡	109 鹿田遺跡
10 空遺跡	30 元瀬跡遺跡	50 長畠古墳	90 水溜古墳群	90 上野城跡	110 北ノ瀬遺跡
11 長畠遺跡	31 山の神谷横穴墓	51 斎原遺跡	91 女ノ崎横穴墓	91 矢谷上遺跡	111 ソラ田遺跡
12 岸の内古墳	32 岩穴口横穴墓	52 才横穴墓群	92 金山五輪塔山城跡	92 上野II遺跡	112 野添遺跡
13 大石・猪石	33 打越遺跡	53 向原遺跡	93 金山要寄山城跡	93 佐々布要寄山城跡	113 御崎谷遺跡
14 岸の内遺跡	34 深坪遺跡	54 才古墳	94 加茂分遺跡	94 平田遺跡	114 センガ遺跡
15 音形遺跡	35 小宮田遺跡	55 佐賀利遺跡	95 掛屋山城跡	95 大森経塚	115 近世山陰隊
16 白石大谷I遺跡	36 庄遺跡	56 外環内遺跡	96 佐々布下古墳群	96 香門院跡	116 志道尾街道
17 イナエノ遺跡	37 向野原遺跡	57 原津遺跡	97 瀬部城跡	97 岩穴畠遺跡	
18 白石大谷II遺跡	38 下野原遺跡	58 野津原II遺跡	98 観音寺横穴墓	98 鶴崎遺跡	
19 椎山遺跡	39 能登堀遺跡	59 山守免遺跡	99 舞屋城跡	99 鶴崎古墳群	
20 椎山古墳群	40 上野原遺跡	60 墓崎遺跡	100 屋敷古墳群		

第2図 周辺の遺跡分布図 (1:25000)

敷遺跡近辺では、南の丘陵部に穴道要害山古墳（46）、隨音寺横穴墓群（41）、横町横穴墓群（43）などが確認されている。集落については、前期の堤平遺跡（62）、中期の上野Ⅱ遺跡、前期～中期の矢頭遺跡（68）、後期の山守免遺跡などで住居跡が確認されており、集落は主に丘陵の緩斜面で営まれている様子が窺える。その他、森屋敷遺跡周辺では、JR山陰本線を挟んで南東側の谷平野に立地する能登堀遺跡⁽³⁹⁾で後期の溝が確認されている。

古代においては、『出雲國風土記』に穴道の地名伝承や祭祀遺跡の犬石・猪石（13）の記述がみられる。また、奈良時代には佐々布付近に意宇郡穴道駅が置かれ、古代山陰道が穴道湖岸に平行するような形で存在していたことが推察されており、古来より穴道が交通の要として栄えていたことが窺える。集落では、荻田遺跡（106）、堤平遺跡、山守免遺跡、白石大谷Ⅰ遺跡などがあり、荻田遺跡、堤平遺跡では鐵津・輪羽口が出土し、鐵鍛冶が行われていたことが分かっている。また、両遺跡からは、鉄鉢形土器など仏教関連遺物も出土しており、仏教の地方への浸透を示すものとなっている。

中世においては、文献上に「⁽⁴⁰⁾来海庄」、「穴道郷」など、現在につながる地名の登場や、佐々布郷を支配した佐々布氏、穴道郷を支配した成田氏など、在地領主層の成長が窺える記述がみられる。⁽⁴¹⁾なお、南北朝時代なると、穴道郷は成田氏に代わって出雲国守護京極氏の一族である穴道氏が支配したことなどが知られている。森屋敷遺跡周辺では、能登堀遺跡で古代末から中世にかけての遺構・遺物が確認されている。

戦国時代は、穴道湖沿岸は尼子と毛利の戦場となり、穴道氏の本拠地とされる金山要害山城（73）を始め、穴道町には多数の山城が築かれている。また、交通の要衝地には穴道要害山城（45）や佐々布要害山城（93）などの支城が多く配されている。⁽⁴²⁾なお、森屋敷遺跡の南、上野原遺跡（40）から西側に続く丘陵には山城の存在が指摘されている。

江戸時代、松江藩領となってからも陸上交通では山陰道と穴道尾道街道の合流点にあたることから、交通の要衝として位置していた。雲南・山陽方面から陸路運搬されてきた物資は穴道で船に積み替えられ、穴道湖を通じて松江城下や各地に運ばれ水運が発達したようである。また、近世山陰道の街道沿いには「本陣」があって、宿場町が形成されている。⁽⁴³⁾このように松江藩時代の穴道は、物流拠点として発展した様子が窺える。

明治に入ると、交通運輸の拠点となっていた穴道町においても殖産興業政策のもと、明治22（1889）年に佐藤製糸工場が森屋敷遺跡を含む調査地周辺で操業を開始し、新たな地域産業の進展をみることになる。

現在、町内にはJR山陰本線、本次線が通っており、山陰の主幹道である国道9号線・山陰自動車道が東西に、山陰と山陽を結ぶ国道54号線が南北に通っている。穴道町が島根県東部の交通の要衝の一つであることは今も変わりがない。

註

- (1)『穴道町ふるさと文庫9 穴道湖のおいたち 人と海の交わるところ』中村唯史 穴道町教育委員会 1995
- (2)『野津原II（西区）遺跡・女夫岩西遺跡・城山遺跡』島根県教育委員会 2000
- (3)6～5千年前には海平面が現在より2～5m高かったと考えられている。註(1)より。
- (4)『上野遺跡・竹ノ崎遺跡』島根県教育委員会 2001
- (5)『清水谷2号墓』『清水谷遺跡、矢頭遺跡発掘調査報告書』穴道町教育委員会 1985
- (6)註(4)より。
- (7)『能登堀遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2009
- (8)池橋達雄氏は、JR穴道駅の西、穴道要害山北側周辺に穴道郷庁を、森屋敷遺跡から約600m西、現在の松江警察署穴道駐在所付近に穴道駅を推定している。
「穴道町西部の古代山陰道をめぐって」『穴道町歴史叢書2』池橋達雄 穴道町教育委員会 1998
- (9)『出土品からみた萩田遺跡の性格』『穴道町歴史叢書3』西尾克己・稻田信・木下誠 穴道町教育委員会 1998
- (10)『八条院領目録案、安元2（1176）年』『穴道町史[資料編]』穴道町史編纂委員会 1999
- (11)『杵築大社造営所注進状、建長元（1249）年』『穴道町史[資料編]』穴道町史編纂委員会 1999
- (12)『穴道町史 通史編 上巻』穴道町史編纂委員会 1999
- (13)『地名配置から見た佐々布川河口部の居館と山城』『雲松寺山（猪道山）城発掘調査報告』『穴道町歴史叢書8』山根正明 穴道町教育委員会 2003
- (14)『近世往還道 一穴道ある記一』『穴道町歴史叢書2』石富寅芳 穴道町教育委員会 1998
- (15)佐藤製糸工場は昭和初期まで操業し、戦後は跡地に日新林業が建設され、近年まで操業していた。
『穴道町史 通史編 下巻』穴道町史編纂委員会 2001

参考文献

- ・『勝負廻I遺跡・白石大谷II遺跡・シトギ免遺跡・野津原II遺跡・山守免遺跡・石地蔵遺跡』島根県教育委員会 2000
- ・『増補改訂 島根県遺跡地図I（出雲・隠岐編）』島根県教育委員会 2003
- ・『堤平遺跡』島根県教育委員会 2002

第3章 森屋敷遺跡の調査

第1節 調査の概要と基本層序

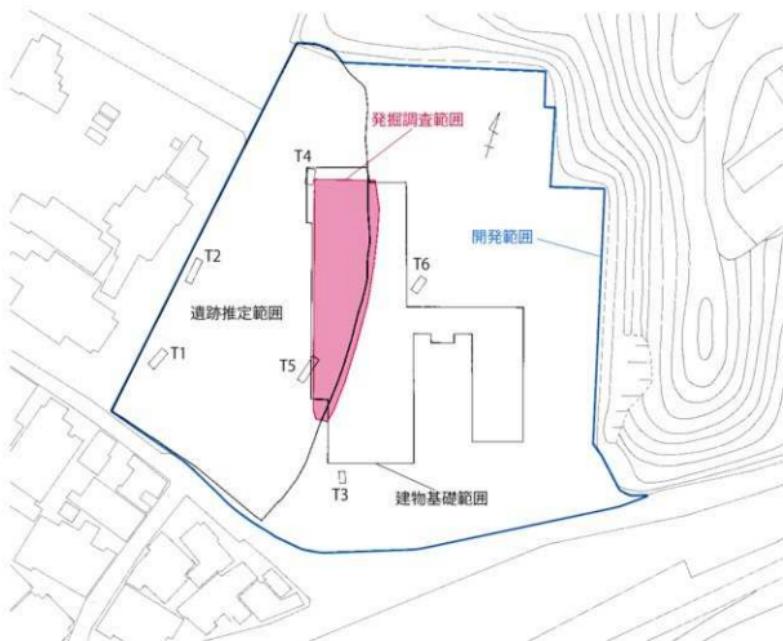
1. 調査の概要

立地（第3図、図版1）

調査地は、宍道湖に向けて南北に延びる小丘陵の南裾に位置する。

立地は、標高3.5～3.8mの平地となっており、南側はJR山陰本線を境に標高25～40mほどの幾つもの丘陵が連なっている。また、北側は宍道湖が300mに迫り、現在は街の住宅等によって妨げられてはいるが、近世以前は宍道湖を見渡すことができる眺望がよい場所であったことが窺える。

調査地の現況は、明治から近年まで工場地として使用されていたことから、平地となってはいるが、旧地形は北東の小丘陵の続きが幾つか調査地に延びていたものと考えられる。なお、隣接する北東の小丘陵の山腹には、近世に建立された氷川神社が所在している。



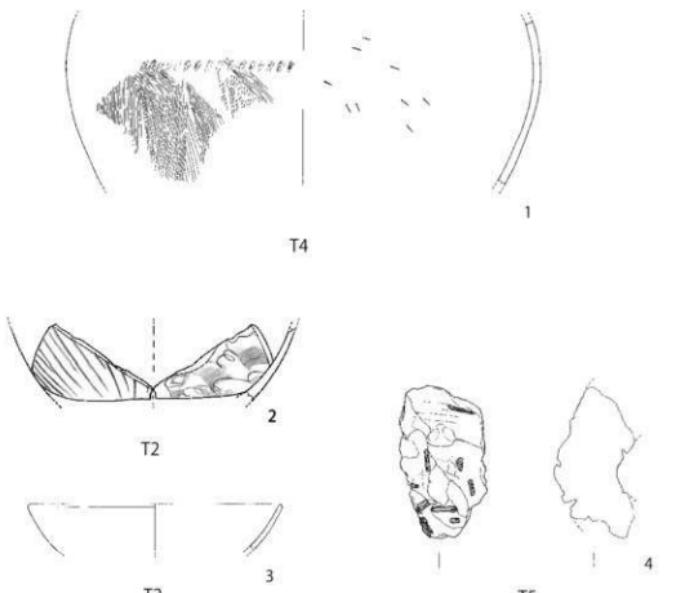
第3図 調査範囲と開発範囲図 (1:1000)

試掘調査（第3図）

本調査は、第1章で述べたとおり、試掘調査の結果に伴い調査範囲が確定されている。この試掘調査では、弥生時代～近世の遺物が出土しており、本遺跡の時代変遷を示す代表的な遺物もみられる。試掘調査の詳細をここで述べることは省略するが、出土した特筆すべき遺物の一部を載せておく。

試掘調査出土遺物（第4図、図版20）

1はT4から出土した弥生土器の裏の胴部である。外面は縦ハケメ調整、内面は横または斜め方向の削り調整で、最大胸部径に刺突列点文が廻っている。弥生時代後期のものである。2・3はT2で出土した磁器である。2は中国青磁の碗の体部で、オリーブ色を呈し、外面には片影風の櫛刀による縦線、内面には櫛描の流れる渦巻き文が施されている。初期の龍泉窯または同安窯系と考えられ、鎌倉時代前半期に相当する。3は中国白磁の碗の口縁部である。やや退色しており、にぶい黄色を呈す。



※4のアミ部分は植物が付着した痕跡

0 1:3 10cm

第4図 試掘調査 出土遺物実測図

時期を特定するのは難しいが、12～13世紀代のものであろう。4は轍の羽口である。⁽¹⁾ 破片のため推定ではあるが、外径12.4cm、内径4.0cmほどのものであったと思われる。断面の外側半分は赤褐色、内側半分は灰黄色を呈し、外面には薙状の植物痕が残る。

発掘調査（第3・5図）

調査は開発面積（1,123.8m²）のうち、前述の試掘調査で遺構の存在が考えられた503m²について行った。

調査の方法は、調査区を国土座標に当てはめ、X= - 65390とY = 67410の交点を基本とし、南へ1・2・3…、東へA・B・Cと10mメッシュでグリッドを設定し、遺構に伴わない（主に遺物包含層）遺物などはグリッド毎に取り上げた。また、掘削については、上層～中層の近代堆積土（近代造成土）や近代擾乱部分の堆積土は重機で除去し、中層～下層の堆積土は人力で各面まで掘削し、精査・遺物採取作業を行った。

その他、遺構はトータルステーションを用い、その図化測量図と遺構を照合しながら平面図等を作成した。



第5図 調査区グリッド配置図 (1:500)

記録写真は、35mmモノクロフィルムカメラ、120mmスライドフィルムカメラとデジタル一眼レフカメラを使用し撮影を行った。

今回の調査では、遺構面を2面（第1面・第2面）と地山面1面（第3面）を検出し、掘立柱建物跡1棟、井戸2基、柱穴97基、土坑30基、溝5条、地下構造物1基の遺構と遺物を包含する遺構面上の堆積土を確認することができた。

遺物については、土器（陶磁器等含む）がコンテナ11箱、瓦がコンテナ1箱、土製品5点、石製品5点、木製品1点、滓3点が出土している。また、出土遺物の多くは、遺構面を覆う堆積土から出土したものであるが、柱穴・土坑などの個別遺構からの出土も一定量みられる。なお、出土土器に関しては実測図化を鋭意試みたが、その多くが小片であったことから本書で掲載出来なかった土器も多くあることを記しておく。

2. 基本層序（第6図、図版1・2、写真1）

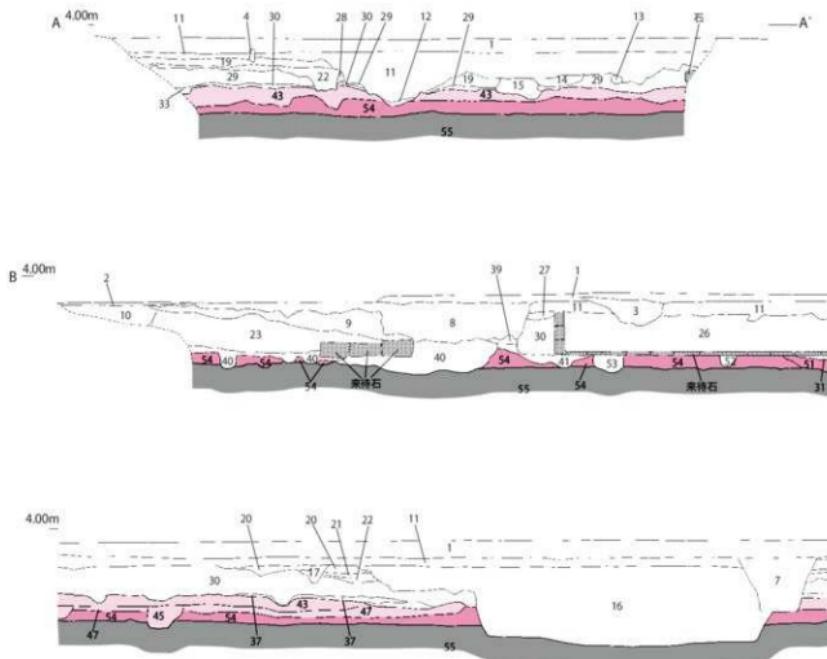
調査区内の現地表面の標高は3.45～3.73mを測り、調査区北側から南側に向かって緩やかに下っている。各遺構面においても現地表面とほぼ同様な地形を成しており、その標高は第1面で2.66～2.82m、第2面で2.31～2.44m、第3面で2.01～2.21mを測る。また、現況地表面から第1面までは93～115cm、第1～2面は10～45cm、第2～3面は10～38cmほどの堆積土が存在している。

堆積土は上層から、①近現代の盛土層（第6図1～42層）、②古墳時代～近世の遺物包含層（第6図43～49層）[第1面基盤層]、③弥生時代～古代の遺物包含層（第6図50～54層）[第2面基盤層]、④無遺物層（第6図55層）[第3面基盤層]となっており、近代の盛土層には近年まで操業していた工場の地下施設の痕跡がみられる場所もある。各層とも搅乱を受けてないところは、ほぼ水平堆積を成し、地山である④無遺物層もほぼ水平の平坦面となっている。また、④無遺物層においては、黄褐色の砂土となっており、穴道湖に由来する堆積土であろうと思われる。

各層の出土遺物は①層から近代・現代の陶磁器の碗・皿、プラスチック、レンガ、瓦など、②層から古墳時代末の須恵器の甕・壺か提瓶、古代の土師器の皿、須恵器の蓋・环・甕、中世の白磁の碗、青磁の碗・水注など、③層から弥生時代中期の壺・甕、古墳時代の土師器の甕、須恵器の环蓋・高环、古代の土師器の环・皿などが出土している。

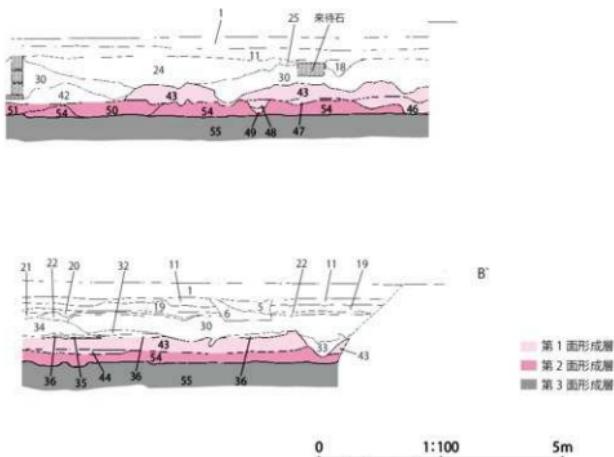


写真1 調査区堆積土（西壁）※近現代の搅乱付近



1. 黄色土 (SY 7/6) : 現代の真砂土
2. 砕石
3. 黒褐色土 (10YR 3/2)、明黄褐色土 (10YR 7/6) の混合土
4. 黄色土 (SY 7/6)、黒色土 (1.5) の混合土
5. 黄色土 (2.5Y 8/6) [山土]
6. 黒色土 (10YR 2/1)
7. 暗灰色土 (N 3)、黄色土 (2.5Y 8/6) の混合土
8. 黑褐色土 (10YR 3/2) : レンガ含む。
9. 黑褐色土 (10YR 3/2)、浅黄色土 (SY 7/4) の混合土
10. 黄褐色土 (2.5Y 5/3)、黒色土 (2.5Y 2/1) の混合土
11. 青黒色土 (SPB 2/1)、オリーブ黒色土 (SY 3/1)、黄褐色土 (10YR 8/8) [山土] の混合土 : コンクリート、レンガ、碎石含む。
12. 灰色土 (SY 4/1)
13. 灰オリーブ色土 (SY 5/1)、暗灰色土 (N 3) の混合土
14. 褐色土 (10YR 4/6) : 炭多く含む。
15. 灰黄褐色土 (10YR 4/2)、黄褐色土 (10YR 8/8) [山土] の混合土
16. 黑色土 (SY 2/1) : 石炭屑多く含む。
17. 明黄褐色土 (10YR 7/6)、暗灰色土 (N 3) の混合土
18. 黑褐色土 (2.5Y 3/1)
19. 浅黄色土 (SY 7/4) : 現代の真砂土
20. オリーブ灰色土 (10YR 6/2)
21. 暗灰色土 (N 3) /
22. 暗灰色土 (N 3) /、褐色土 (7SYR 4/3) の混合土
23. 黑褐色土 (2.5Y 3/2) : レンガ含む。
24. 黑色土 (2.5Y 2/1) : 石炭屑多く含む。
25. 灰白色土 (7SY 7/1)、黄色土 (SY 8/6) [山土] の混合土
26. 黑色土 (10YR 2/1) : 木屑・石含む。
27. 暗灰色土 (10YR 3/4)
28. 暗灰色土 (2.5Y 4/2)
29. 黄色土 (2.5Y 8/6)
30. 黄褐色土 (2.5Y 4/1)、オリーブ黄色土 (SY 6/4) の混合土
31. 灰色土 (10Y 4/1)
32. 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2) : 炭多く含む。
33. 灰オリーブ色土 (SY 5/2) : 近代の溝理土。
34. 明黄褐色土 (2.5Y 7/6)、黄色土 (2.5Y 8/6) [山土] の混合土
35. 黄褐色土 (2.5Y 4/1) : 炭多く含む。
36. 黄褐色土 (2.5Y 5/4)、黄色土 (2.5Y 8/6) [山土] の混合土
37. オリーブ黄色土 (SY 6/4)、黄褐色土 (10YR 7/8) [山土] の混合土

第6図 調査区土層断面実測図



- 38. にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)
- 39. 灰オリーブ色土 (7.5Y 4/2)
- 40. オリーブ褐色土 (10Y 3/2)、黄色土 (5Y 7/8)[山土] の混合土
- 41. オリーブ褐色土 (7.5Y 3/2)、淡黄色土 (5Y 8/4)[山土] の混合土
- 42. 灰オリーブ色土 (7.5Y 4/2)
- 43. オリーブ褐色土 (5Y 3/2) : 売含む
- 44. オリーブ褐色砂質土 (5Y 3/1)
- 45. 暗オリーブ褐色砂質土 (2.5Y 3/3)
- 46. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y 4/2)
- 47. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y 5/2)
- 48. 黒褐色砂質土 (10YR 3/2)
- 49. 黒褐色砂質土 (10YR 3/3)
- 50. 灰オリーブ色砂質土 (5Y 5/2)
- 51. オリーブ褐色砂質土 (10Y 3/2)
- 52. オリーブ黒色砂質土 (10Y 3/1)
- 53. オリーブ黒色土 (7.5Y 3/1)、浅黄色土 (5Y 8/4)[山土] の混合土
- 54. 黑褐色砂質土 (2.5Y 3/2)
- 55. 黄褐色砂土 (2.5Y 5/4) : 無遺物層

第2節 遺構と遺物

今回の調査では、先述のとおり遺構面を2面（第1面・第2面）と地山面1面（第3面）を検出している。

本節では、上位の面から順に各面で検出した遺構を時代ごとに述べていきたい。但し、出土遺物による時期の特定が困難であった遺構については、個別の遺構番号を付けず平面図の図示のみに留めるものとする。

1. 第1面

第1面は、近代に属す面である。本遺跡の変遷及び、穴道町の近代史を語るうえで貴重な遺構と遺物を確認することができたので、ここに報告しておく。

近代

第1面は、現地表面から93～115cmほど掘削したところで検出した遺構面である。直接遺構面となる基盤層の上位層は、炭を含むオリーブ黒色土（5Y 3/2）で、標高は2.66～2.82mを測る。遺構面を掘削する過程では、近年まで操業していた木材工場の地下施設、大規模な土坑などや北東の丘陵の一部を削って造成された山上を確認している。遺構面堆積土中の出土遺物においても近現代の陶磁器の他、プラスチック・レンガ・瓦などが出土しており、近現代に盛られた土であることが分かっている。

遺構は、溝2条（SD01・02）、井戸1基（SE01）、地下構造物（SX01）を検出している。

SD01・SD02（第7図、図版3）

SD01は調査区北端のA2・B2グリッド、SD02は調査区西北のB2グリッドに位置する溝である。

SD01は東西方向、SD02は南北方向に延びる形状を成し、両溝とも調査区外へ続いている。

断面形状は、両溝ともU字形を呈し、SD01は残存長9.8m、幅52～72cm、深さは15～28cm、SD02は残存長3.8m、幅24～40cm、深さ5～10cmを測る。埋土層は、SD01が灰オリーブ色土の単層で、SD02が上層～中層：黄色土の山上、下層：褐灰色土である。また、溝底面はSD01が東側に、SD02が北側に下がっている。

遺物は、SD01埋土層から土師器の小片が2点、SD02の埋土層では布志名の碗片が1点出土している。



第7図 第1面 平面実測図（近代）



写真2 SE01出土 煮籠鍋

SE01（第7図、図版3、写真2）

調査区の中央北寄りのB3・C3グリッドに位置する井戸である。

井戸枠は、円形の来待石枠が2段積まれており、井戸内には近現代の陶器や瓦が散乱していた。井戸枠は、直径90cm、高さ（1段分）60cm、厚さ13cmを測る。

SE01は、後述するSX01に接続していることから、SX01とセットで使用されたものと思われる。

遺物は、井戸内から近現代の陶器、瓦が多量に出土しているが、その中で特筆する煮籠鍋について少し触れておく。

SE01で出土した陶器の中には、縄糸鍋あるいは煮籠鍋とみられる鍋がある。⁽³⁾ 製糸において、蒸気および温水で柔らかくした繩から糸を織り出す際に用いられるものである。本品は、直径27.0cm×高さ10.5cmの丸形で、鶴状の口線を成す。体部内面には、内法3.3×2.8cmの断面隅丸三角形の穴と内径1.5cmの円形の穴がみられ、ここに送水管などが取り付けられるようである。また、見込みには細かな穴が一列、リング状に廻り、送水管を通して円形の穴から入った蒸気あるいは温水が、この細かな穴から噴出する仕組みとなっている。⁽⁴⁾ 一方の断面隅丸三角形の穴の下端は、見込み部と接合しておらず、その下に排水用の穴（内径1.2cm）が穿たれている。なお、見込み部は使用の劣化のためか、一部釉が剥げ落ちたり擦れて窪んでいる状況がみられる。

外面においては無釉で、底面には「佐藤」の墨書が認められる。この墨書から、鍋は明治22年～昭和8年に当地で操業していた「佐藤製糸工場」で使われていたものと考えられる。なお、SE01で出土した鍋と類似するものが、長野県の岡谷蚕糸博物館や須坂市立博物館に所蔵されている。⁽⁵⁾

今回の調査では近現代の堆積土から、上記の鍋と同じように細かな穴の開いた管をもつ陶器の破片が数点出土している。それらも製糸工場で使われたものと考えられる。

SX01（第7図、図版3、写真3）

調査区の中央北寄りのB3・C3グリッドに位置する地下構造物である。

この地下構造物は、長軸（東西）3m、短軸（南北）1.2～1.5mを測る西側がやや狭い長方形形状の枠形の遺構である。枠の側板には来待石が使用され、北東隅は前述のSEO1に連結している。側板は、50cm四方の正方形形状のもので、長軸北側で6枚、長軸南側で4枚、短軸東側で3枚が連結し、短軸西側では、真中の側板が内側に迫り出す形で3枚設置されている。

枠内においては、底面の砂質土上に10～20cm大の石が隙間なく詰められ、その上には側板と同一の来待石の板石が蓋をする形で設置されている。また、この來待石の蓋石の縫目部分には近代の残瓦が縫目を隠すように置かれ、その上は厚さ10cmほどの砂で埋められている状況であった。

SX01は、前述のとおり、來待石で作られた井戸（SEO1）と連結することから、井戸とセットで使用されたことが窺えるうえ、その構造においても水に関係する地下構造物と考え得るが、どのような機能を有したものであったか、その詳細は明らかでない。ただ、近代におけるこの調査地の歴史的変遷を鑑みると、井戸 SEO1 の枠内から出土している煮蕭鍋が示すように明治22年～昭和8年まで操業していた「佐藤製糸工場」の産物である可能性が高いと思われる。

第1面で検出したSDO1・02、SEO1、SX01は、遺構面付近の出土遺物が近代のものを含むことや、SEO1の出土遺物、SX01の構造などから、前述の「佐藤製糸工場」が操業していた時期か、これに近い時期の遺構であったと考えられる。



瓦・蓋石検出状況



蓋石除去後、石検出状況



蓋石・石の断面状況



蓋石・石除去後状況

写真3 SX01(地下構造物)

2. 第2面（第8図、図版3・4）

第1面から15～30cmほど掘削して検出した遺構面である。遺構面となる基盤層は、基本的に黒褐色砂質土（2.5Y 3/2）で、標高は2.3～2.5mを測る。遺構面は、ほぼ平坦であるが南方に向けて緩やかに下っている。

第2面からは、掘立柱建物跡1棟、井戸1基、柱穴97基、土坑20基、溝3条を検出しているが、それぞれ近世、中世、古代の遺構が混在している。以下、これら遺構を新しい時代から述べていくが、時期判別が困難であった柱穴・土坑・溝などの詳細は割愛させていただく。

なお、遺構面近くからは、古墳時代の土師器の土製支脚、古代の土師器の壺・皿、須恵器の蓋・壺・皿・鉢、中世の土師器の鉢、白磁の壺・碗、青磁の盤、近世の陶器の碗などの出土がみられる。

近世

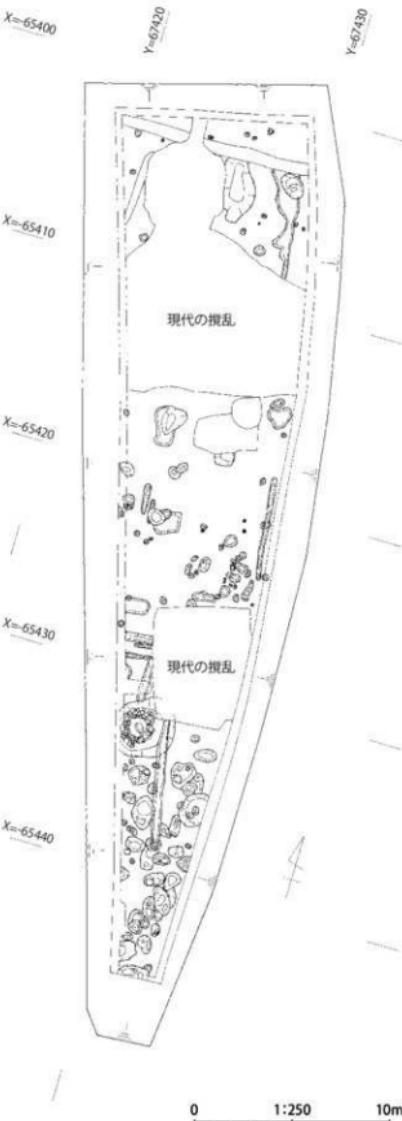
江戸時代と思われる遺構は、柱穴1基（SP01）、土坑3基（SK01～03）、溝1条（SD03）である。いずれも調査区南側で検出しておらず、これより以北では確認していない。

SP01（第10・11図、図版4・5）

調査区の南端、C6グリッドに位置する柱穴である。

南北方向に長い楕円形を呈す、上面径60～117cmの大形のもので、深さは、31～46cmを測る。底面を2つ持つことから、柱穴の掘り直しが行われたものと思われ、このうち北側の深い底面からは、残存長34cm、径15cmの柱がみつかっている。

柱穴内の埋土は、オリーブ黒色砂質土と暗灰黄色砂質土の2層である。



第8図 第2面 平面実測図（古代～近世）

SP01は、建物に付随する柱穴と思われるが、周辺に同時期の対と成り得る柱穴が見当たらないことから、その詳細は分からぬ。

遺物は、埋土層から江戸時代の土師器皿片、陶器の鉢片、土製の炉壁片が出土している。

出土遺物（第9図、図版20）

5は手づくね成形の土師器皿の口縁部から底部付近で、所謂、京都系と称されるものである。6は肥前陶器の鉢の口縁部付近で、口縁端部がやや肥厚する特徴をもつ。17世紀代のものであろう。7は土製の炉壁の一部と考えられるものである。胎土に3～10mm大の砂粒を多く含み、外面はにぶい橙色、内面は黒褐色を呈している。

SK01（第10・11図、図版4・5）

調査区の南側、C5グリッドに位置する大形の土坑である。

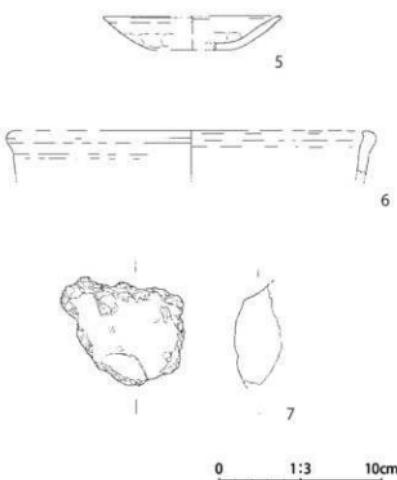
平面形状は、南北方向にやや長い円形を呈し、底面には小形の窪みが2ヶ所みられる。平面規模は、東側が調査区外に掛かっていることから明確ではないが、上面径121cm以上～183cmを測る。また、深さは37～41cmを測る。

土坑内の埋土は、上層が黒褐色土、中層がオリーブ黒色土、下層が黒褐色砂質土で、ほぼ水平に堆積している。

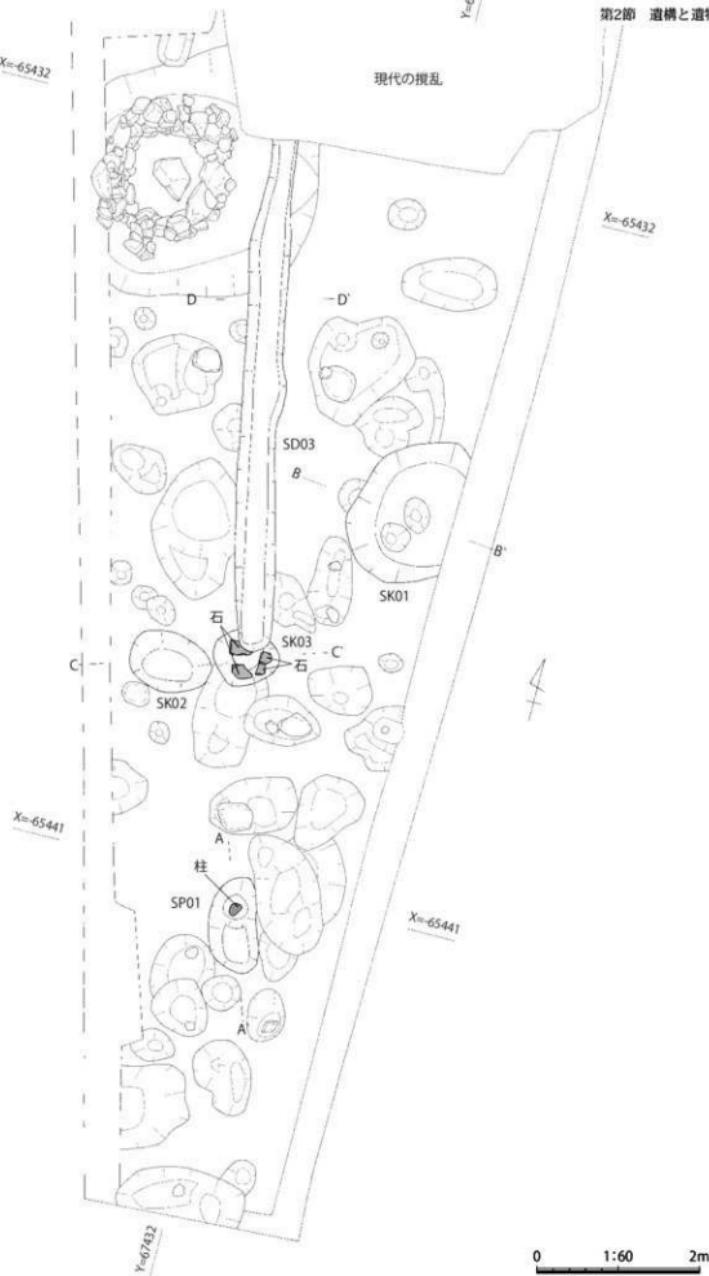
遺物は、埋土層から中世の土師器の壺片・皿片、陶器の甕片、瓦質土器の風炉片、中世もしくは江戸時代の土師器皿片、江戸時代の磁器の合子片・皿片（細片のため未掲載）、瑪瑙製の火打ち石などが出土している。

出土遺物（第12図、図版20）

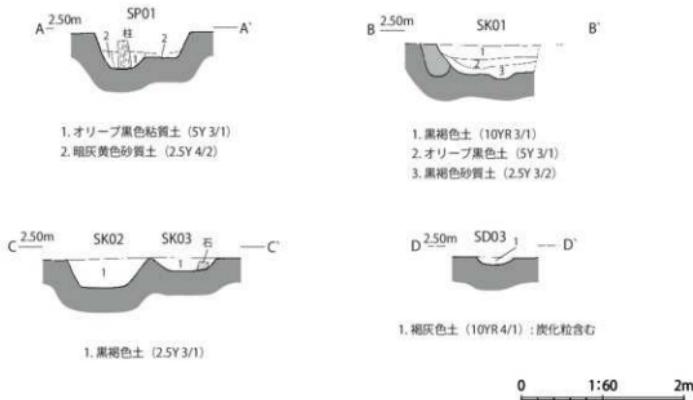
8・9は底部に回転糸切痕がみられる土師器の壺の底部付近である。8の見込みには回転ナデによる凹凸が同心円状に顕著に残っている。9は体部が大きく開くタイプであろうか。8は中世の範疇に入るものの、9は15～16世紀代のものであろう。⁽⁶⁾10・11は底部に回転糸切痕がみられる中世の土師器の皿である。いずれも扁平な形状で、10の口縁端部は先細り、11の口縁端部は丸くおさめられている。12は京都系の土師器皿の口縁部から底部付近である。手づくねで成形されたもので、見込み縁周に回転ナデの強い指痕が残る。16～17世紀代に相当する。13は風が⁵の可能性がある瓦質土器の頸部付近である。外面には突帯が廻り、上部に唐草のスタンプ文が施されている。14～16世紀に相当する。14は備前の甕の口縁部で、外に開く口縁の外面には四線帯が形成されている。乗岡



第9図 SP01出土遺物実測図



第10図 第2面調査区南側 平面実測図（近世）



第11図 SP01・SK01～03・SD03 土層断面実測図

6a期に相当する、16世紀前半のものである。¹⁵ 15は肥前磁器の合子蓋である。押型成形で作られたもので、天井部には青色の花弁の陰刻文様が描かれ、口縁外周には陰刻の雷文が廻っている。17世紀後半頃のものである。16・17は火打石と考えられるものである。瑪瑙製で、角部分に磨滅した使用痕が確認できる。

SK02（第10・11図、図版4）

調査区の南側、B5・C5グリッドに位置する土坑である。

平面形状は、東西方向にやや長い楕円形を呈し、上面径は76～102cm、深さは34～40cmを測る。

土坑内の埋土は、黒褐色土の単層で、土師器皿片と16世紀後半の中国磁器の皿片のほか、18世紀代の肥前陶器の腹片（胴部小片のため未掲載）が出土している。

出土遺物（第13図、図版21）

18は手づくねで成形された京都系の土師器皿の口縁部から体部である。19は中国磁器（青花）の口縁部付近で、皿と思われるものである。口縁の内外面には1条の圈線が廻っている。16世紀後半のものである。

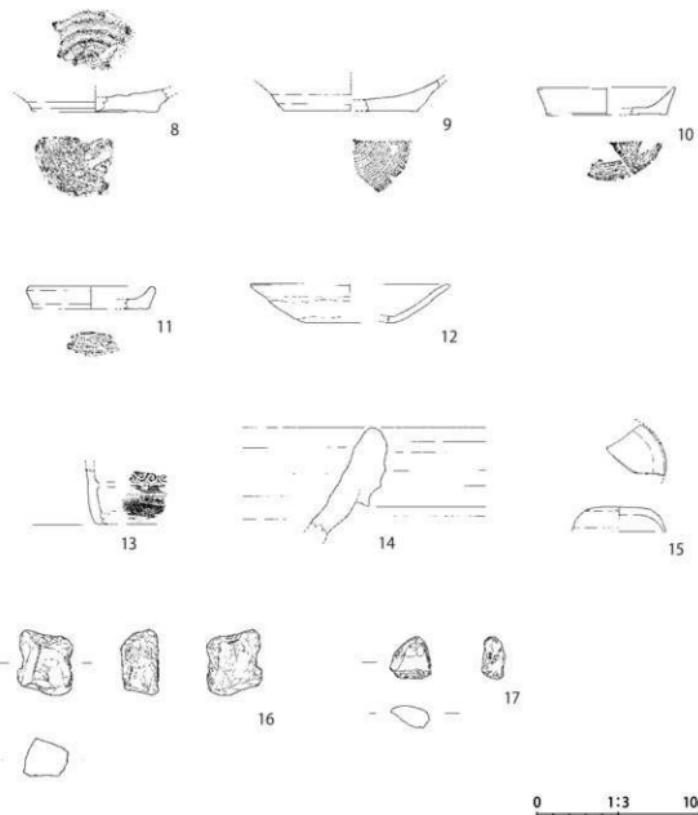
SK03（第10・11図、図版4・5）

調査区の南側、C5グリッドに位置する土坑である。

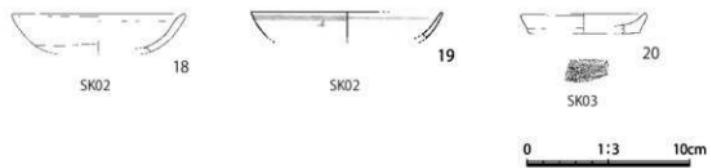
平面形状は、不整形な円形を呈するもので、北側の一部は後述するSD03に切られている。平面規模は、上面径71～82cmで、深さは14～18cmを測る。

土坑内の埋土は、SK02と同じ黒褐色土の単層である。また、底面からは15～18cm大の角石を4個検出している。

なお、SK03は土坑として取り扱ってはいるが、底面に置かれた石が柱の支え石、もしくは礎石下



第12図 SK01出土遺物実測図



第13図 SK02・03出土遺物実測図

の栗石であったことを考慮すると、柱穴であった可能性も考えられる。

遺物は、埋土層から江戸時代の土師器皿片が出土している。

出土遺物（第13図、図版21）

20は底部に回転糸切痕がみられる土師器の皿の口縁部から底部付近である。扁平な形状で、口縁端部は丸くおさめ、底部は比較的厚い作りとなっている。江戸時代に入るものであろう。

SD03（第10・11図、図版4・5）

調査区の南側、C5グリッドに位置する溝である。

南北方向に延びる形状を成し、北側は現代の概乱土坑で消滅している。また、南端はSK03と重なるところで終息している。前述のとおり、SK03とは一部切れ合う形（重複関係）となっており、SD03が新でSK03が古であったことが分かる。

平面規模は、残存長6.34m、幅33～54cmで、深さは10～16cmを測る。

溝の埋土は、褐色灰色土の単層で、この埋土層からの出土遺物はみられなかった。

SD03は、これに付随する柱穴などを確認していないが、建物の雨落ち溝などの可能性も考えておきたい。

表1 近世の柱穴・土坑・溝計測表

遺構名	グリッド	上面長軸	上面短軸	下面長軸	下面短軸	深さ	備考
SP01	O6	117cm	60cm	31cm 33cm	30cm 32cm	36～46cm 31～33cm	柱あり
SK01	C5	183cm	121cm以上	136cm	94cm以上	37～41cm	
SK02	B5, C5	102cm	76cm	63cm	38cm	34～40cm	
SK03	C5	82cm	71cm	38cm	34cm	14～18cm	石あり

遺構名	グリッド	長さ	幅	深さ	備考
SD03	C5	6m34cm	33～54cm	10～16cm	

中世

中世の遺構として検出したものは、掘立柱建物跡 1 棟 (SB01)、井戸 1 基 (SE02)、柱穴 21 基 (SP07 ~ 27 ※ SB01 を構成する柱穴 SP02 ~ 06 は数に入れていない)、土坑 1 基 (SK04) である。このうち、掘立柱建物跡・井戸・柱穴は調査区南半で検出しており、柱穴にいたっては、掘立柱建物跡が存在する南側にほぼ集中している。また、土坑に関しては調査区北側で検出しているが、その周辺には柱穴など、その他の遺構は見あたらない。

なお、柱穴としたものは大形のものが多く、土坑であった可能性も考えられるが、当該期の SB01 の柱穴が同様な形体をすることや、同様なものに柱が残存するものがあることから、柱穴として扱っている。

SB01 (第 14・15 図、図版 6・7)

調査区の南側、B5・C5・C6 グリッドに位置する掘立柱建物跡である。

建物跡は、調査区外の東側に続くもので、本調査では、その西側部分を検出している。

平面構造は、南北 3 間 × 東西 2 間以上で、平面規模は 6.05 m × 3.97 m 以上を測る。南北軸方向は N - 24° - W である。

なお、平面形及び、桁行・梁行に関しては、建物跡の全体像が分からぬことから判断できていない。

東西方向の 1 間分の距離は、SP02 - SP03 間が 1.87 m、SP02 から東は 2.1 m 以上を測り、南北方向の 1 間分の距離は、SP03 - SP04 間が 1.8 m、SP04 - SP05 間が 2.25 m、SP05 - SP06 間が 2.0 m を測る。東西方向、南北方向ともに 1 間分の距離に相異はみられるが、およそ 2 m の間隔で配置されている。

柱穴に関しては、上面径 80 ~ 170cm、深さ 38 ~ 60cm を測り、大形のものが多い。また、すべての柱穴で掘り直しが行われた痕跡がみられ、SP06 にいたっては、3 回掘り直されたことが確認できる。

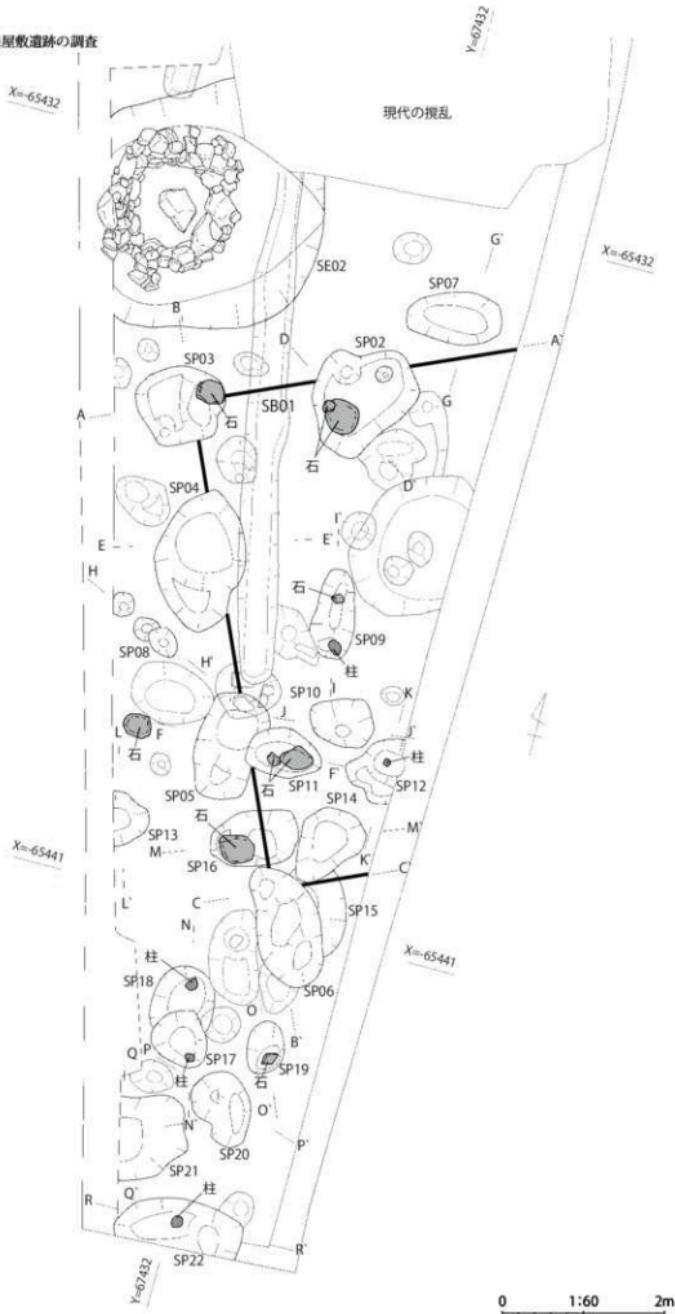
柱穴内の埋土は、多くが黒褐色土であり、なかにはオリーブ黒色土のものある。なお、SP03 の底には柱の下に置かれた石と思われる 30cm 大の平らな石を検出している。その他、SP02 の底においてもこのような平らな石を検出しているが、SB01 の軸方向からは、若干ずれる位置にあることから、他の建物跡の柱を支える石であった可能性も考えられる。

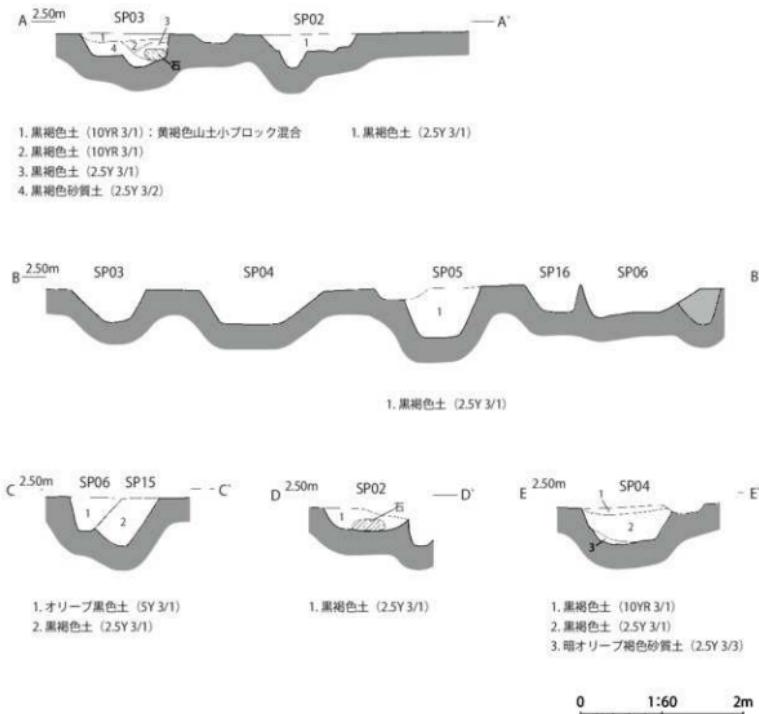
遺物は、SP02 の埋土から土師器小片、SP03 の埋土から中世の土師器の壺片、SP04 の埋土から中世の土師器の壺片、皿片、青磁の碗か皿片、白磁の小壺片、皿片、SP05 の埋土から中世の土師器の壺片、皿片、SP06 の埋土から弥生土器の壺片、古代の壺片、中世の土師器皿が出土している。

出土遺物 (第 16 図、図版 21)

21 は SP03 から出土した土師器の壺の口縁部から体部である。口縁部から体部は直線的に延びる特徴をもつていて、13 世紀代のものであろうか。

22 ~ 26 は SP04 から出土した遺物である。22 は土師器の壺の体部から底部で、底部は磨滅し、糸切痕の有無は確認できない。15 か 16 世紀代のものであろう。23 は土師器の皿である。扁平な形状を呈し、口縁部は先細り、底部には回転糸切痕がみられる。13 世紀代に相当する。24 ~ 26 は中国磁器である。24 は青磁の碗または皿の口縁部付近で、口縁端部はやや外反する。中世の範疇に入



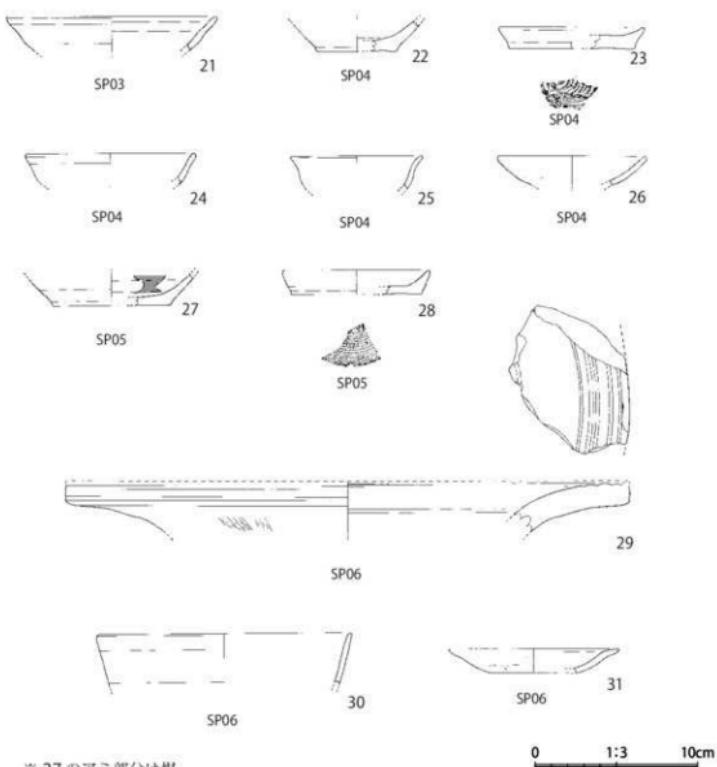


第15図 SB01 (SP03 ~ 06) 土層断面実測図

るものである。25は白磁の小杯の口縁部から体部で、口縁部は外へ緩やかに屈曲している。14世紀後半～15世紀代のものである。26は白磁の皿の口縁部から体部である。15世紀代に相当する。

27・28はSP05から出土した遺物である。27は土師器の壺の底部付近で、底部には回転糸切痕がみられ、内面には煤と思われる黒色物が付着している。13～14世紀代のものであろう。28は底部に回転糸切痕がみられる土師器の皿である。扁平な形状で、体部の立ち上がりは低く、口縁端部は先細っている。13世紀代の範疇に入るものか。

29～31はSP06から出土した遺物である。29は弥生土器の大型広口壺の口縁部で、口縁部は朝顔状に開き、口縁端部に2条、上面に3条の凹線が廻っている。IV-1様式、弥生時代中期後葉に相当する。30は須恵器の壺の口縁部～体部である。体部が直線的に立ち上がるもので、高台付か無高台かは分からぬが、出雲国府第3～4型式、8世紀後半～9世紀初頭に相当する。31は京都系の土師器皿の口縁部から体部である。手づくねで成形されており、器高は低く外反した口縁の上方に面



第16図 SB01 (SP03～06) 出土遺物実測図

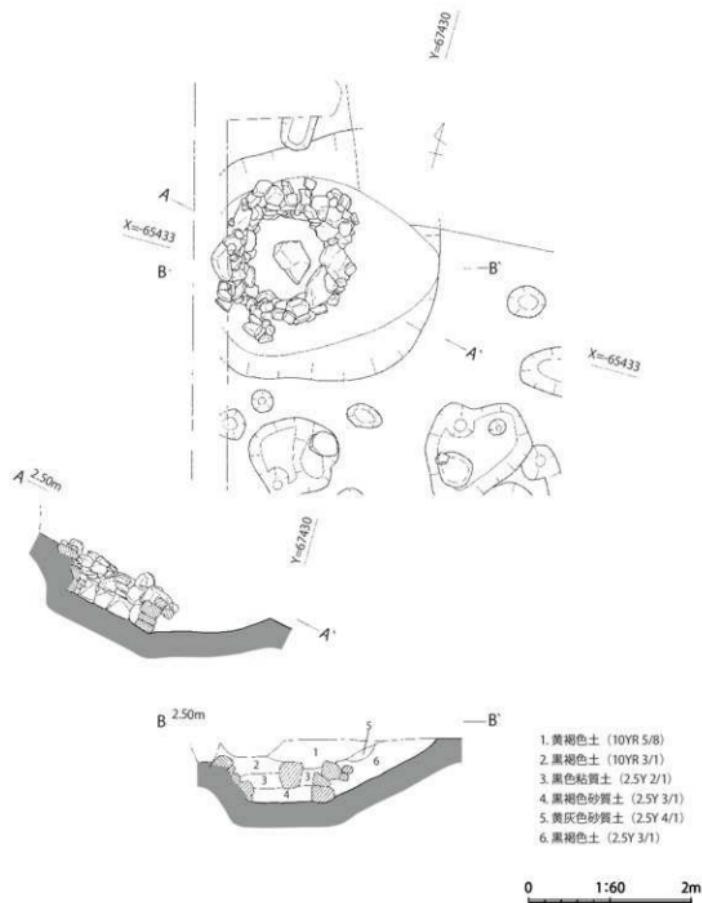
が作られている。16世紀のものであろうか。

SE02 (第14・17図、図版8・9)

調査区の南側、B5・C5 グリッドに位置する井戸である。

SB01の北西側に接するところで検出しており、西側の一部は調査区外に続き、北側の一部は現代の搅乱土坑によって消滅している。井戸の構造は、ほぼ円形に掘られた掘方に、円筒形に石を3～4段積んだものである。積まれた石は、8～15cmの小形のものや、40～55cmの大形のものまで、大小さまざまな石が用いられている。

井戸の平面規模は、石組外径 160～170cm、石組内径 85～100cmで、掘方の上面径は 288～261cm以上を測る。また、残存する石組の高さは 55cmで、検出面である第2面から井戸底までは、77cmを測る。



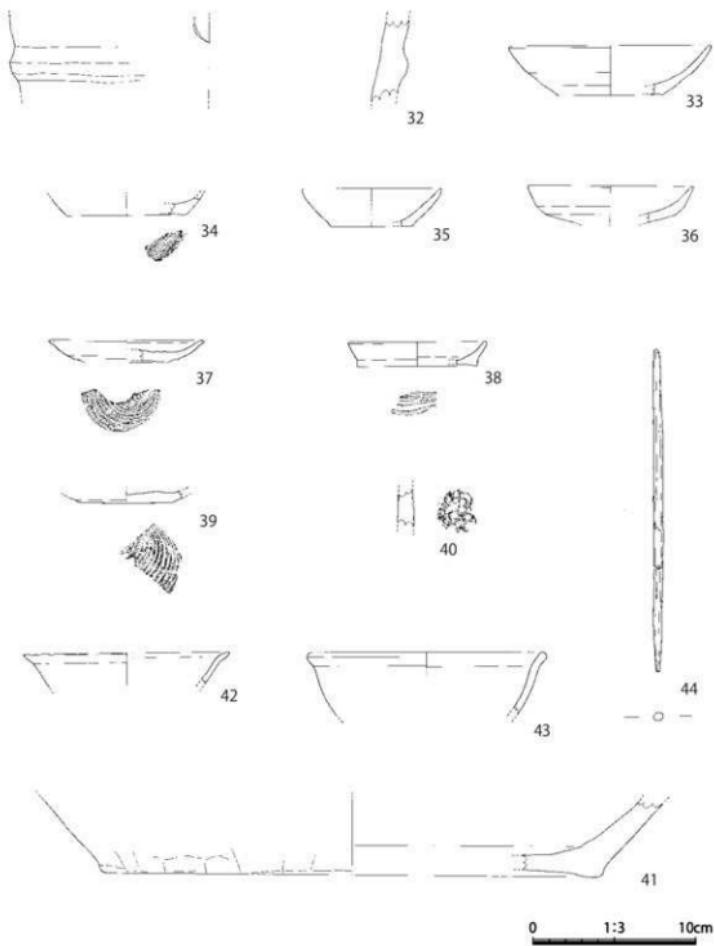
第17図 SE02 平面・土層断面実測図

井戸内の埋土は、上層が②黒褐色土、中層が③黒色粘質土、下層が④黒褐色砂質土である。※①層は、SE02には関わらない土層で、⑤・⑥層は井戸築造時の造成土と考えられる。

なお、④層上からは $30 \times 33 \times 55\text{cm}$ 大の大石が 1 個見つかっている。この大石は、石組枠から自然落としたものとも考えられるが、その位置が井戸の中間にあたることから、井戸の廃絶時に意図的に置かれた（落とされた）祭祀的な特性をもったものとも解釈できる。

SE02は、SBO1に近接する位置にあることから、SBO1の掘立柱建物と併存していた可能性が高いと考えられる。

遺物は、埋土層から中世の土師器の坯片・皿片、須恵器の甕片、備前陶器の甕片、白磁の碗片、青磁の碗片と白木の箸などが出土している。その他、古墳時代の円筒埴輪ともみられる土器片も出土し



第18図 SE02出土遺物実測図

ている。

出土遺物（第18図、図版21・22）

32は古墳時代の土師器の破片である。筒状を成す体部外面に低い台形状の突帯が廻る。器壁は1.5cmで、にぶい橙色を呈す。内外面ともに風化が著しく調整は不明である。突帯より上位に曲面的に抉られたような部分がある。破片のため器種の特定は難しいが、この抉りを透かしとする円筒埴輪の可能性を考えておきたい。33～39は中世の土師器で、33・34は壺、35～38は皿である。また、39は底部のみであるが、体部が大きく開き気味になることから、皿の可能性が高い。このうち、36は体部下半からやや屈曲気味に立ち上がるタイプのものである。37は器高が低く、体部は大きく開くもので、39と共に見込みに指ナデの凹凸が同心円状に残る。38は扁平な形状をした13世紀前後のもので、井戸の掘方内より出土している。33・35・37は13～14世紀代に相当する。40は中世須恵器の甕の胴部である。外面の粗い格子目叩き痕の特徴から、亀山系と推定される。³⁹鎌倉～室町時代のものであろう。41は中世の備前の大型甕の底部である。外面には板状工具による成形痕がみえる。42は中国白磁の碗の口縁部から体部である。口縁部が弱く外反する森田V類、12世紀代のもので、井戸の最下層より出土している。43は中国（龍泉窯系）青磁の碗の口縁部から体部である。口縁部は外側に「く」の字状にやや屈曲する。上田D類、15世紀代に相当する。44は白木の箸である。井戸内からは、この他に折れた数本の箸が出土している。

SP07～22（第14・19図、図版10）

SP07～22は、調査区の南側、B5、C5、C6グリッドに位置する柱穴である。

SB01、SE01の周辺でランダムに検出したもので、上面径30～42cmのSP08を除いた他の柱穴は、上面径47～158cmと大形なものが多い。

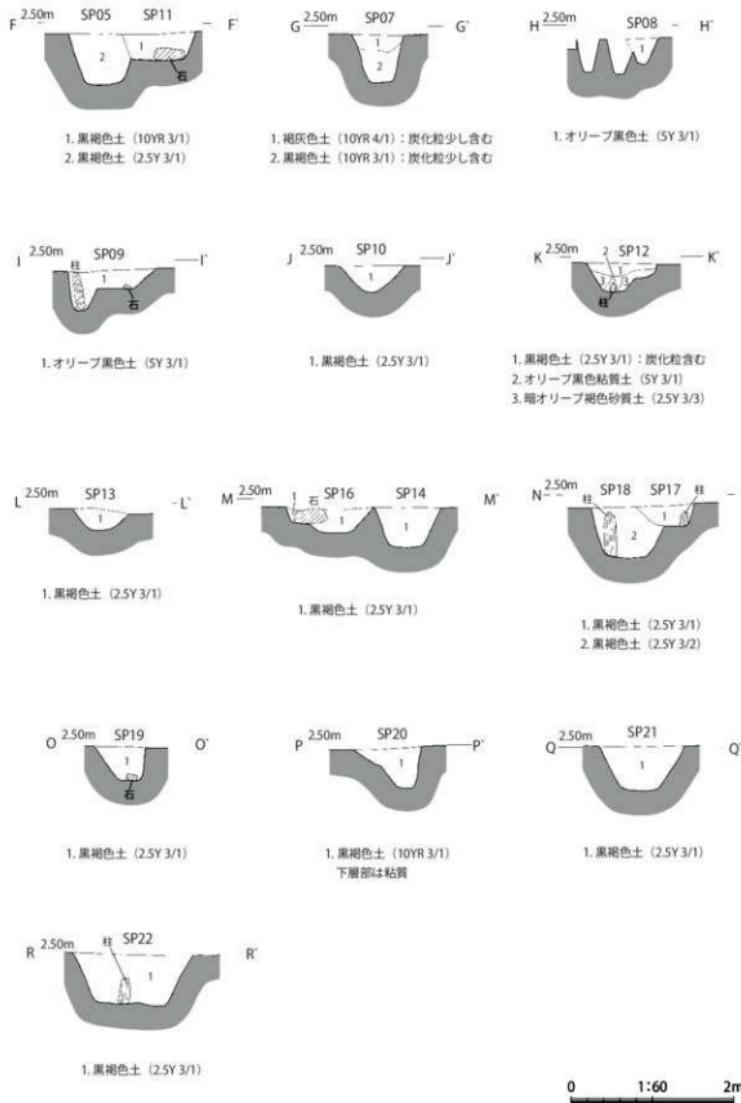
平面形状は、円形・楕円形とさまざまな形を呈し、当該期内で重複関係になる柱穴も幾つかみられる〔SP11新・SP05（SB01）古〕、〔SP06（SB01）新・SP15古〕、〔SP14新・SP15古〕、〔SP17新・SP18古〕。また、SP09・SP12・SP16・SP20・SP22では、2回程度の掘り直しが行われたことが分かっている。

柱穴内の埋土は、黒褐色土系の単層が多いが、SP08・SP09のオリーブ黒色土やSP07の褐灰色土・黒褐色土の2層、SP12の黒褐色土・オリーブ黒色粘質土・暗オリーブ褐色砂質土の3層などもある。

その他、SP09・SP12・SP17・SP18・SP22から残存する柱を、SP09・SP11・SP16・SP19から石を底面で検出している。残存する柱は、SP09：残存長48cm、径13cm、SP12：残存長12cm、径8cm、SP17：残存長18cm、径10cm、SP18：残存長54cm、径15cm、SP22：残存長33cm、径14cmを測り、いずれの底部も平坦に切られている。また、石はSP09：12～14cm大、SP11：30～40cm大、SP16：33～44cm大、SP19：15cm大の平坦なもので、柱の支え石として置かれたものと思われる。

SP07～22は、調査できた範囲が狭いこともあり、これらによって構成される建物跡などを見出すことはできなかったが、数棟の建物がこの範囲に存在していたものと推測される。

遺物は、SP07の埋土から中世の土師器の皿片、青磁の碗片、SP08の埋土から中世の白磁の碗片、SP09の埋土から中世の土師器の小片、SP10の埋土から中世の土師器の皿片、SP11の埋土から中世



第19図 SP07～22 土層断面実測図

の須恵器の表片、土師器の环片・皿片、陶器の擂鉢片、白磁の碗片・小环片、青磁の盤片、SP12の埋土から中世の陶器の擂鉢片、SP13の埋土から中世の須恵器の环片、土師器の皿片、SP14の埋土から中世の土師器の皿片、SP15の埋土から中世の土師器の环片・皿片、SP18の埋土から中世の土師器の环片、SP20の埋土から中世の土师器の环片、陶器の擂鉢片、SP21の埋土から中世の土师器の皿片、陶器の鉢片・擂鉢片、SP16・SP17・SP19・SP22の埋土から中世の土师器小片が出土している。

出土遺物（第20・21図、図版22・23）

45・46はSP07から出土した遺物である。45は体部が内湾する土師器の皿の口縁部から底部で、13～14世紀代のものである。46は中国（龍泉窯）青磁の碗の底部である。見込み中央に陰刻文様（花文か）が施されていると思われるが、欠損のため確認はできていない。外面には被熱を受けた痕跡がみられる。大宰府IIc類、13世紀中頃～13世紀後半のものである。

47はSP08から出土した中国白磁の碗の底部付近である。森田IV類、11世紀後半～12世紀代に相当する。

48はSP10から出土した土師器の皿の口縁部から底部である。扁平な形状で、12～13世紀代に相当しよう。

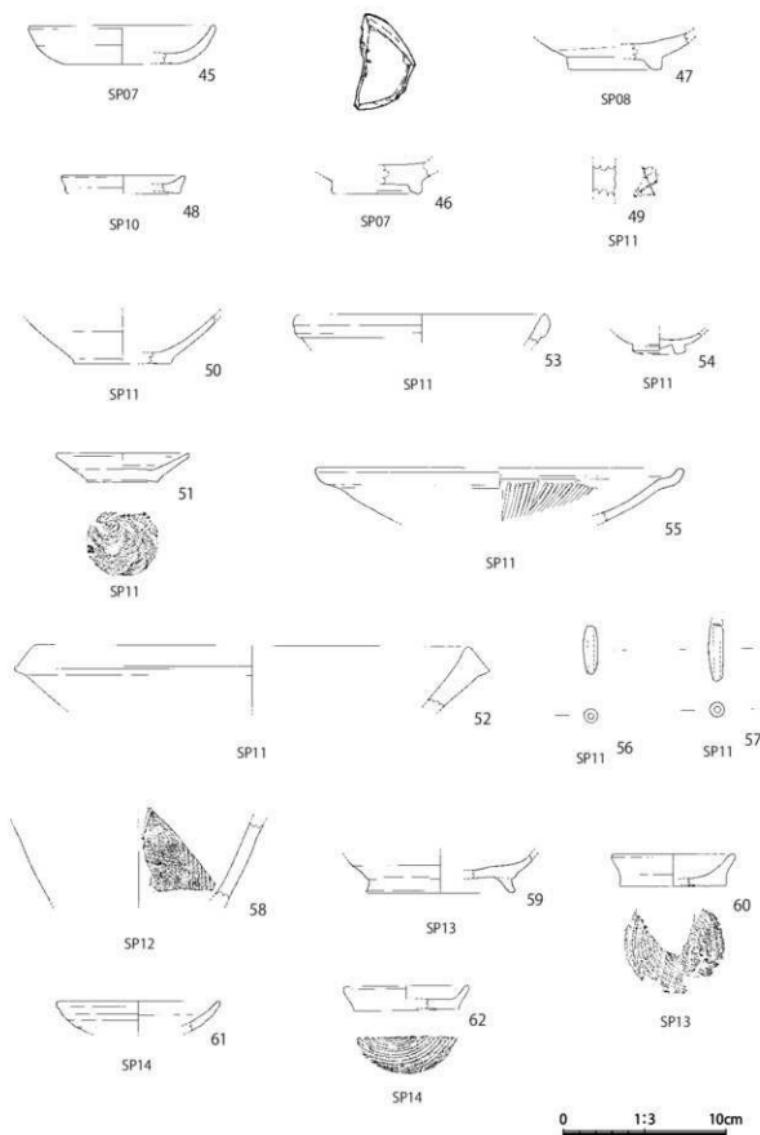
49～57はSP11から出土した遺物である。49は龜山系須恵器の表の胴部である。軟質で、外面は粗い格子目叩き、内面はナデ調整される。鎌倉～室町時代に相当する。50・51は土師器である。50は环の体部から底部で、体部が逆ハの字状に開く。15～16世紀に相当する。51は皿で、底部には回転糸切痕がみられる。体部は直線的に開き、見込みには回転ナデの強い指跡が残る。14～15世紀代に相当する。52は備前前の擂鉢の口縁部付近で、口縁端部には面が作られている。14世紀代のものである。53・54は中国白磁である。53は玉縁状口縁の碗の口縁部付近で、森田IV類、11世紀後半～12世紀代に相当する。54は小环の底部付近で、削り調整された底の中央が尖る。14世紀後半～15世紀代のものである。55は中国（龍泉窯）青磁の盤の口縁部から体部である。弱く屈曲した口縁の端部を摘み上げ、内面には櫛状工具による縦線が施される。15～16世紀代に相当する。56・57は紡錘形の土鍤である。

58はSP12から出土した中世の備前擂鉢の体部である。6本以上の摺目が付けられている。

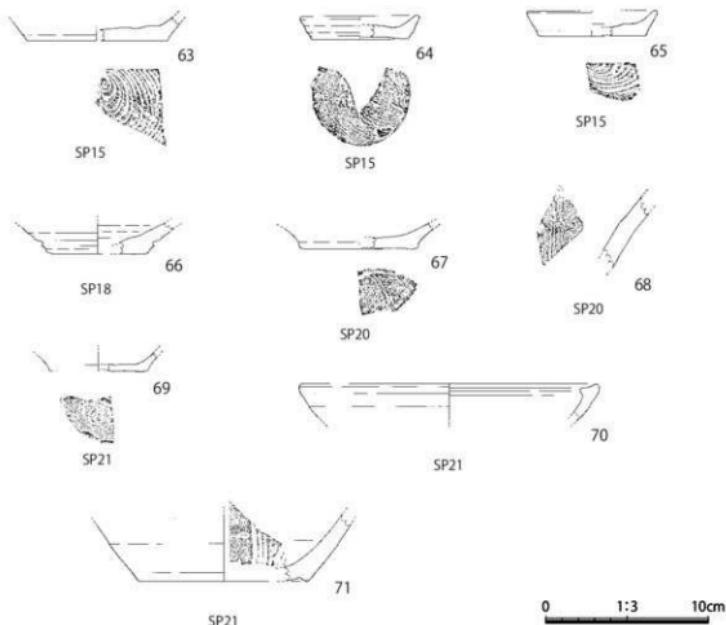
59・60はSP13から出土した遺物である。59は須恵器の高台付环の底部付近で、出雲国府第2型式、7世紀後葉～8世紀第1四半期に相当する。60は土師器の皿である。扁平で外反気味に立ち上がる体部の形状は、成型時の指の当て具合によるものと考えられる。また、底部には回転糸切痕がみられる。13～14世紀代に相当しよう。

61・62はSP14から出土した土師器の皿である。61は皿の口縁部から体部で、体部は内湾している。12～13世紀代に相当する。62は扁平な形状をし、底部は厚い。また、底部には回転糸切痕がみられる。13世紀後半～14世紀代のものであろう。

63～65はSP15から出土した土師器で、63は环、64・65は扁平な形状の皿である。いずれも、見込みに回転ナデの強い指跡が残り、底部には回転糸切痕がみられる。12～13世紀代に相当する。



第20図 SP07～14出土遺物実測図



第21図 SP15～21出土遺物実測図

66はSP18から出土した土師器の壺の底部付近で、体部が直線的に開くタイプのものである。内外面には回転ナデの指跡が残る。12世紀代に相当しよう。

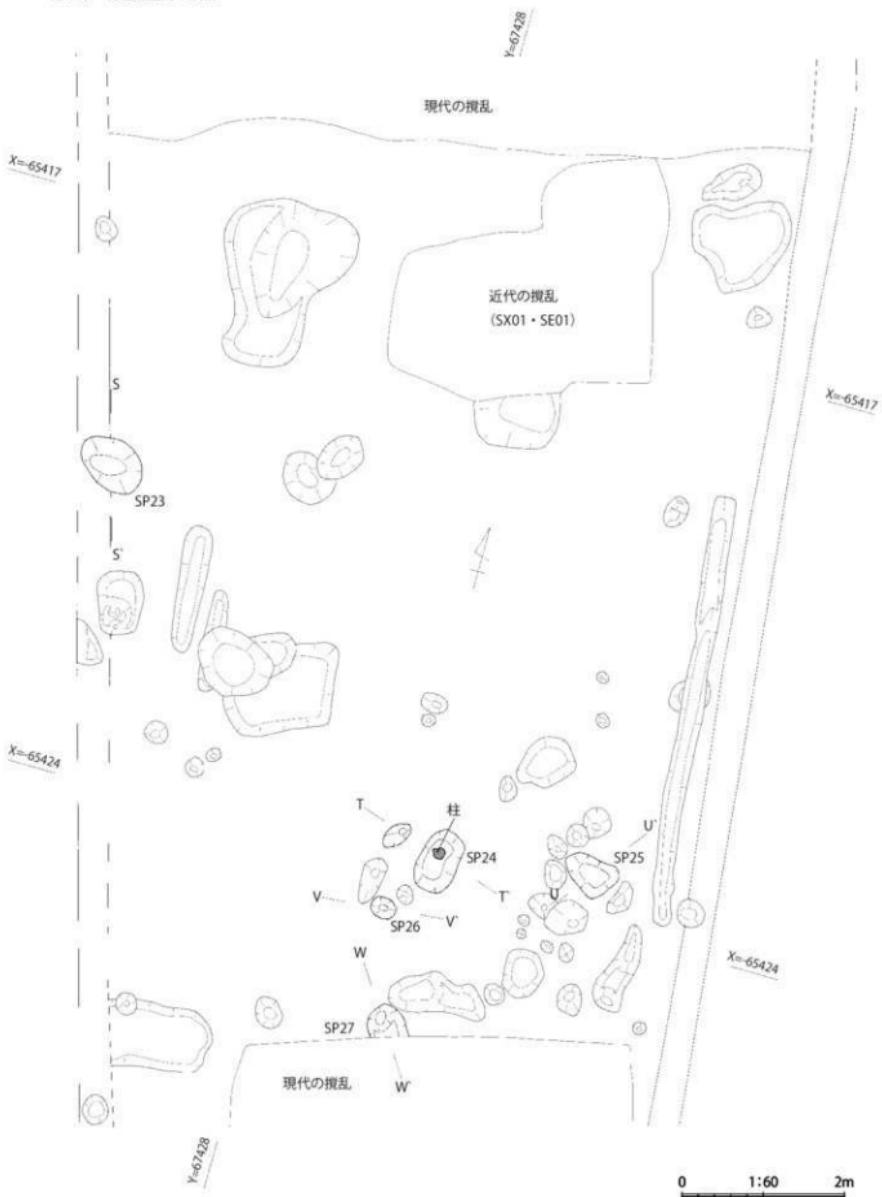
67・68はSP20から出土した遺物である。67は土師器の壺の底部で、底部には回転糸切痕がみられる。15～16世紀代に相当する。68は備前の擂鉢の体部で、5本または5本以上の摺目が付けられる。15世紀代のものであろうか。

69～71はSP21から出土した遺物である。69は土師器の皿の底部付近で、体部は直線的に開くタイプのものか。底部には回転糸切痕がみられる。13～14世紀代に相当する。70は古瀬戸の鉢の口縁部付近である。室町時代、14世紀後半～15世紀代のものであろう。71は中世の備前擂鉢の体部から底部付近で、6本以上の摺目が付けられている。

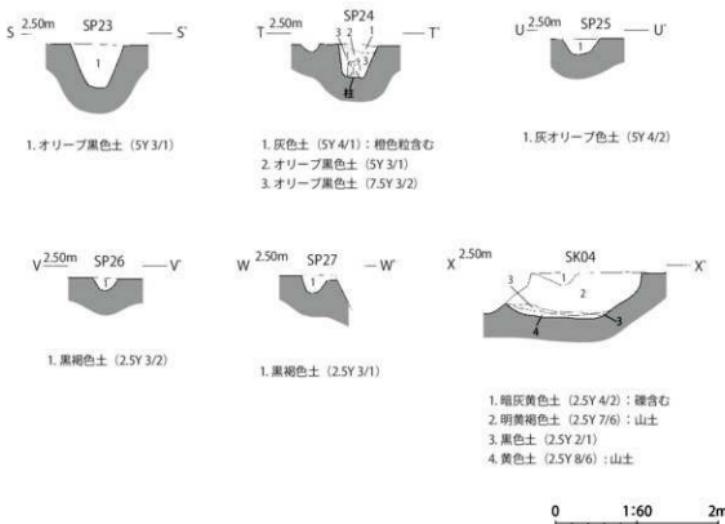
SP23～27（第22・23図、図版11）

SP23～27は、調査区の中央付近、B3、B4、C4グリッドに位置する柱穴である。

位置に規則性はなくランダムに存在しており、上面径25～32cmを測るSP26を除いた他の柱穴は、上面径45～86cmと比較的、大形なものが多い。



第22図 第2面調査区中央 平面実測図（中世）



第23図 SP23～27・SK04 土層断面実測図

平面形は、多くが楕円形を呈し、SP27では2回の掘り直しが行われたことが分かっている。

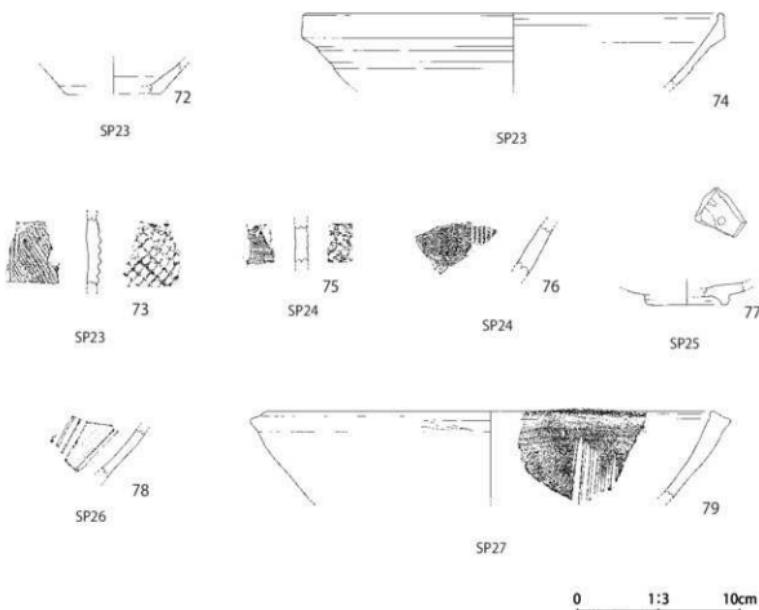
柱穴内の埋土は、SP23がオリーブ黒色土、SP25が灰オリーブ色土、SP26・SP27が黒褐色土の單層で、SP24は灰色土、オリーブ黒色土の堆積がみられる。また、SP24からは、底面に接し直立する柱を検出している。柱は、残存長24cm、径15cmを測り、底部は平坦に切られている。

SP23～27は、その位置関係に規則性はなくランダムに点在することから、これで構成される建物跡などを見出すことはできなかった。ただ、この周辺には時期が不特定な溝や柱穴などが存在していることから、この範囲においても建物などが存在していた可能性も考えられる。

遺物は、SP23の埋土から中世の土師器の片断、須恵器の甕片・鉢片、SP24の埋土から中世の須恵器の甕片、陶器の擂鉢片、SP25の埋土から中世の陶器の皿片、SP26・SP27の埋土から中世の土器の擂鉢片が出土している。

出土遺物（第24図、図版23）

72～74はSP23から出土した遺物である。72は土師器の杯の体部から底部で、13～14世紀に相当する。73・74は中世須恵器である。73は甕と考えられる胴部で、外面に施された粗い格子目叩き痕から、亀山系の可能性が高いと思われる。鎌倉～室町時代に相当する。74は東播系もしくは亀山系の鉢の口縁部から体部で、口縁端部がやや内向きに屈曲している。また、重ね焼きのため口縁外



第24図 SP23～27出土遺物実測図

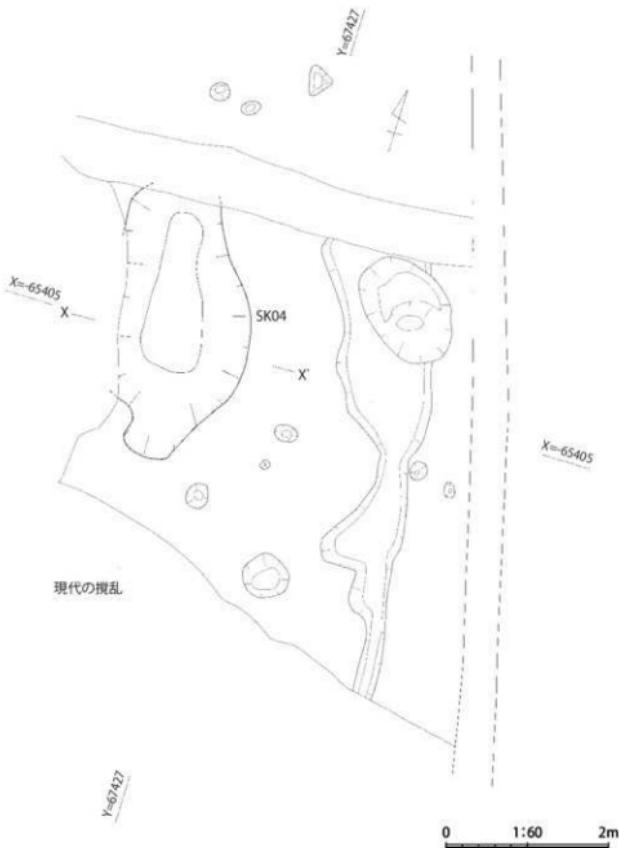
周は黒色を呈している。13世紀代のものであろう。

75・76はSP24から出土した遺物である。75は中世須恵器の龜山系の甕と考えられる胴部である。外面の調整は粗い格子目叩きであるが、やや浅く、内面は横ハケメ調整が成されている。鎌倉～室町時代に相当しよう。76は中世の備前擂鉢の体部で、5本以上の摺目が付けられている。

77はSP25から出土した李氏朝鮮陶器（粉青沙器）の皿の底部付近である。灰オリーブ色を呈し、底面に放射状の削り鉋痕、見込みと高台に止目痕がある。15～16世紀に相当する。

78はSP26から出土した中世の擂鉢の体部で、3本以上の摺目が付けられている。土師質で産地は特定できないが、在地の可能性も考えられる。

79はSP27から出土した擂鉢の口縁部から体部である。口径は27cmを測り、口縁端部にナデによる平坦面をつくる。体部には6本の摺目が施され、軟質で産地の特定はできていない。備前の擂鉢を模したその形態から推定すると、14世紀代あたりのものであろうか。



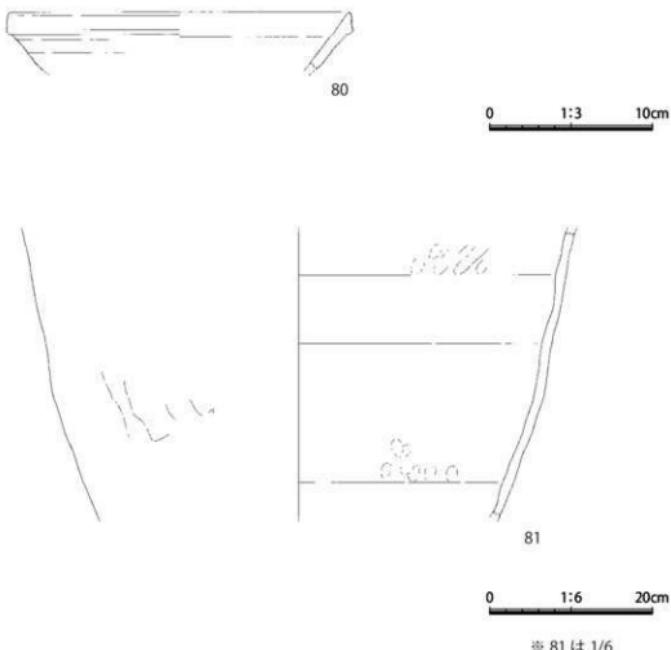
第25図 第2面調査区北西側 平面実測図（中世）

SK04（第23・25図、図版12）

調査区の北東側、B2グリッドに位置する大形の土坑である。

南北方向に長い楕円形を呈し、南側の上面が南側へやや突出する。平面規模は、上面径162～324cm、深さは49～63cmを測る。

土坑内の埋土は、上層が暗灰黄色土、上層～中層が明黄褐色土の山土、下層が黒色土、最下層が黄色土の山土で、大部分は上層～中層の明黄褐色土の山土が占める。



第26図 SK04出土遺物実測図

調査区北側に位置するSK04は、周辺に当該期に属す遺構が見あたらず、単独で存在している。

遺物は、埋土層下層から中世の須恵器の鉢片、陶器の甕片が出土している。

出土遺物（第26図、図版24）

80は中世須恵器の鉢の口縁部から体部である。口縁はやや外に肥厚し、重ね焼きのため外周が暗灰色を呈す。東播系と考えられ、13世紀代に相当する。81は越前焼の大型甕の胴部である。胴部破片が折り重なって出土し、接合できた破片から図化した。復元した胴部径は最大で68cmを測る。内面には成型時の指ナデ痕が残る。鎌倉時代～南北朝時代に相当する。

表2 中世の柱穴・土坑 計測表

遺構名	グリッド	上面長軸	上面短軸	下面長軸	下面短軸	深さ	備考
SP02	C5	145cm	115cm	117cm 15cm	52cm 15cm	20~22cm 40~46cm	石あり
SP03	B5	109cm	94cm	53cm 64cm	27cm 40cm	34~41cm 25~26cm	石あり
SP04	B5, C5	176cm	113cm	75cm 36cm	64cm 27cm	31~44cm 9~12cm	
SP05	C5	136cm	78cm	53cm 21cm	48cm 20cm	57~66cm 36~40cm	
SP06	C6	156cm	81cm	24cm 61cm 38cm	17cm 31cm 21cm	40~42cm 34~35cm 32~33cm	
SP07	C5	117cm	54cm	80cm	31cm	50~62cm	
SP08	B5, C5	42cm	30cm	11cm	10cm	29~31cm	
SP09	C5	109cm	49cm	58cm 28cm	14cm 17cm	18~19cm 43~44cm	石・柱あり
SP10	C5	83cm	65cm	19cm	15cm	31~33cm	
SP11	C5	93cm	61cm	72cm	34cm	33~36cm	石あり
SP12	C5	71cm以上	85cm	38cm 52cm以上	29cm 17cm	35~44cm 15~19cm	柱あり
SP13	C6	45cm以上	68cm	21cm以上	27cm	36~44cm	
SP14	C5, C6	76cm	48cm	52cm	42cm	46~50cm	
SP15	C6	125cm	105cm	74cm	55cm	29~33cm	
SP16	C5, C6	110cm	68cm	37cm 38cm	35cm 17cm	32~38cm 17~19cm	石あり
SP17	C6	73cm	62cm	41cm	32cm	35~37cm	柱あり
SP18	C6	94cm	75cm	60cm	41cm	62~68cm	柱あり
SP19	C6	66cm	47cm	37cm	23cm	34~39cm	石あり
SP20	C6	94cm	68cm	55cm 16cm	17cm 10cm	43~50cm 21~25cm	
SP21	C6	80cm以上	103cm	30cm以上	54cm	40~53cm	
SP22	C6	158cm	62cm以上	73cm 36cm以上	32cm 25cm	44~51cm 46~49cm	柱あり
SP23	B3, B4	86cm	59cm	48cm	23cm	52~54cm	
SP24	B4	80cm	47cm	51cm	24cm	25~37cm	柱あり
SP25	C4	66cm	45cm	36cm	23cm	17~21cm	
SP26	B4	32cm	25cm	13cm	7cm	13~15cm	
SP27	B4	47cm	40cm	17cm 29cm	13cm 8cm以上	20~21cm 6~8cm	
SK04	B2	324cm	162cm	194cm	65cm	49~63cm	
SE02(掘方)	B5, C5	261cm以上	288cm	101cm	78cm	47~69cm	

古代

古代の遺構として検出したものは、柱穴2基(SP28・29)、土坑4基(SK05～08)である。このうち、柱穴2基は調査区南側、土坑3基(SK05～07)は調査区中央付近、土坑1基(SK08)は調査区北東側で検出しており、先述の中世の遺構が多数存在した南側においては、遺構の数が減少する傾向がみられる。

SP28・29（第27・29図、図版14）

SP28は調査区の南側、C5グリッド、SP29はC6グリッドに位置する柱穴である。

SP28の平面形状は、東西にやや長い楕円形を呈し、上面径は23～31cm、深さは17～19cmを測る。また、SP29の平面形状においては、隅丸三角形を呈し、上面径は49～66cm、深さは41～46cmを測る。

柱穴内の埋土は、SP28が黒褐色土、SP29がオリーブ黒色土の単層である。

SP28・29を検出した周辺からは、当該期の遺構がこの2基以外確認できていないことから、どのような性格をもつ柱穴であったのか、明確にはできていない。

遺物は、SP28の埋土から古代の土師器の环片、SP29の埋土から古代の須恵器の蓋片が出土している。

出土遺物（第30図、図版24）

82はSP28から出土した須恵器の环の口縁部から体部である。体部が直線的に聞くタイプで、高台付か無高台かは底部がないため分からず。出雲国府第9型式、11世紀後半～12世紀前半に相当する。

83はSP29から出土した須恵器の蓋の口縁部付近である。口縁端部は、「く」の字に折れ曲がる特徴をもつ。出雲国府第2型式、7世紀後葉～8世紀第1四半期のものである。

SK05（第28・29図、図版14）

調査区の中央付近、B3グリッドに位置する大形の土坑である。

平面形状は、南北方向に長い楕円形を呈し、東側の上面が東側へやや突出している。平面規模は、上面径166～207cm、深さは40～53cmを測る。

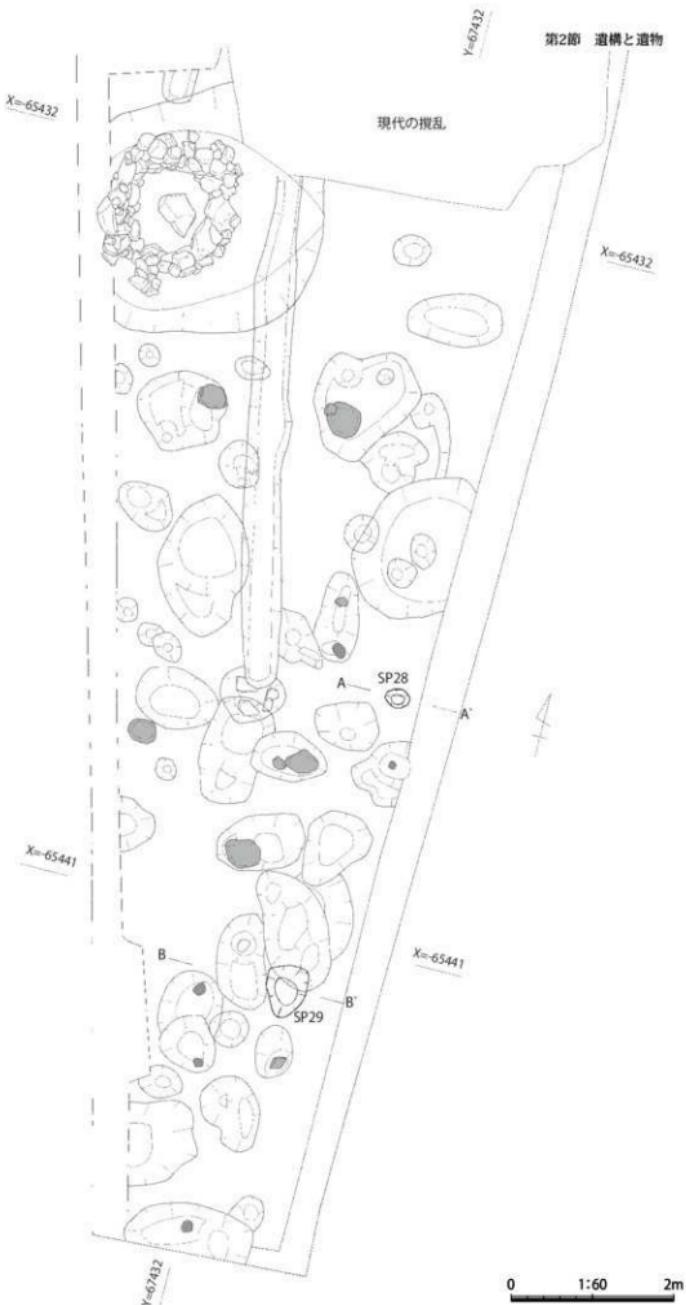
土坑内の埋土は、上層が暗灰黄色土、中層が黄色土の山土、下層が暗オリーブ褐色砂質土で、それぞれがレンズ状に堆積している。

遺構の明確な性格については、不明であるが、この下位には後述する古墳時代の土坑(SK09)が存在している。

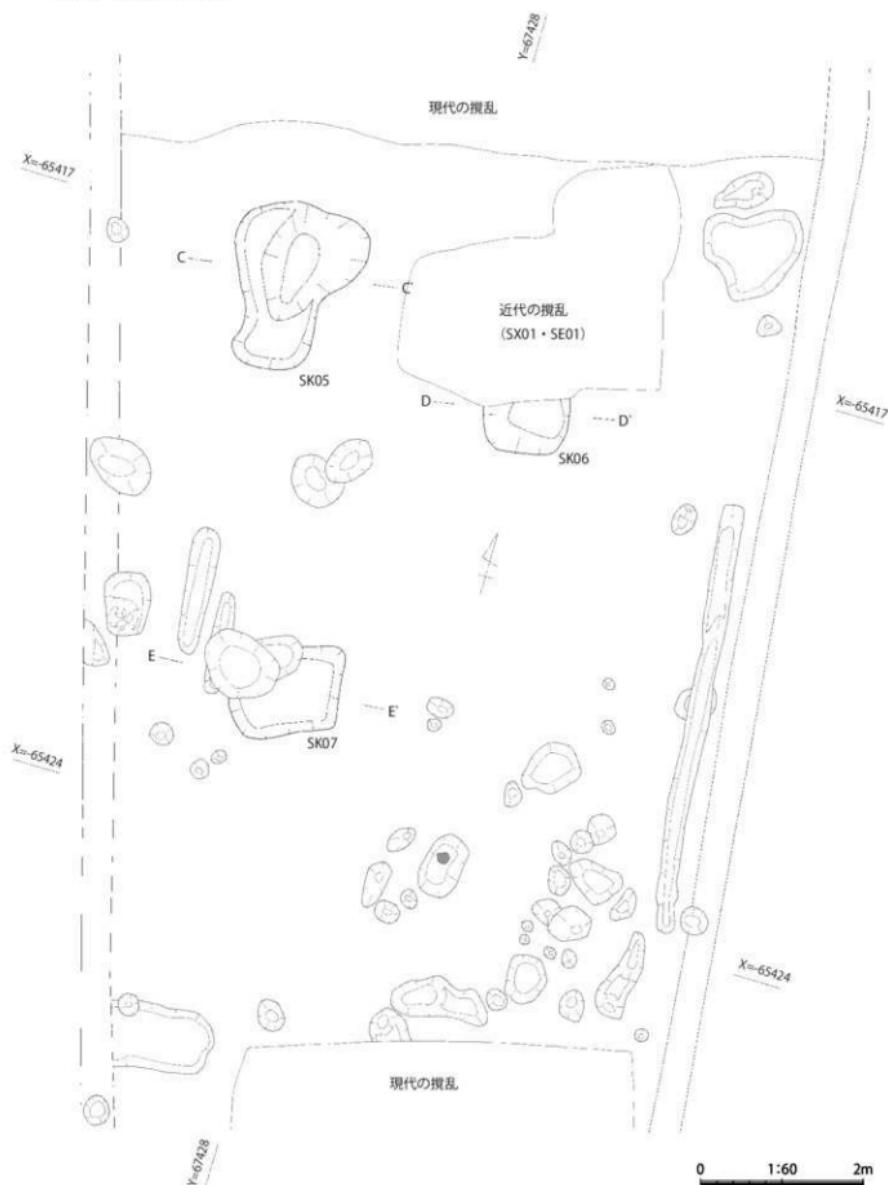
遺物は、埋土層中層から古代の須恵器の蓋片・甕片と砥石が出土している。

出土遺物（第30図、図版24）

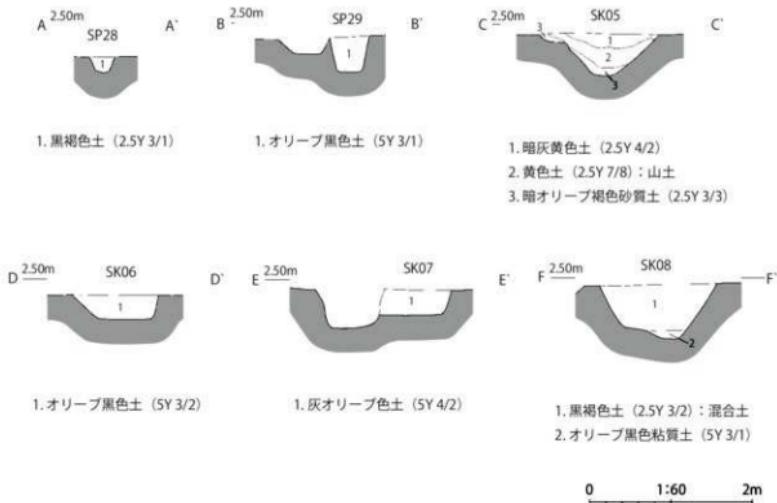
84・85は須恵器である。84は輪状つまみと、「く」の字状のかえりをもつ蓋で、出雲国府第1型式、7世紀後葉に相当する。85は甕の肩部で、外面は平行叩き調整、内面は円形の当て具痕がみられる。また、外面には自然軸の付着が認められる。古墳時代～古代に相当する。86は厚さ0.4cmの扁平な砥石で、平坦面の両面と側面1ヶ所の3面に砥面がみられる。



第27図 第2面 調査区南側 平面実測図（古代）



第28図 第2面 調査区中央 平面実測図（古代）



第29図 SP28・29・SK05～08 土層断面実測図

SK06（第28・29図、図版15）

調査区の中央付近、B3 グリッドに位置する土坑である。

東西が長い隅丸方形状を呈し、北側は近代の SX01 によって切られている。

平面規模は、上面径 64～105cm、深さは 26～30cm を測る。

土坑内の埋土は、オリーブ黒色土の単層である。

遺物は、埋土層から古代の土師器の甕片・壺片、時期不明の土師器の把手の他、鉄滓が出土している。

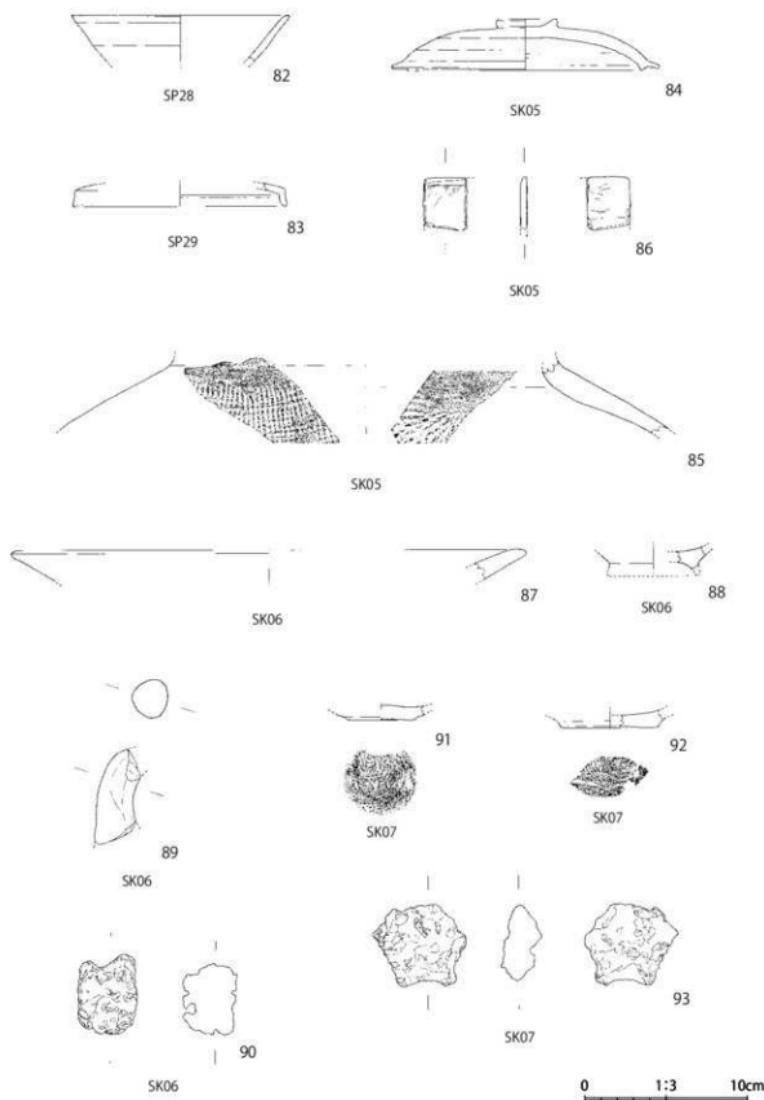
出土遺物（第30図、図版24）

87～89は土師器である。87は甕の口縁部で、復元径 31cm を測る比較的大きなものである。飛鳥～平安時代のものであろうか。88は高台付环の底部付近である。高台端部は欠損しているが、高台部はハの字状に開くタイプと思われる。出雲国府第6～7型式、9世紀中葉～10世紀前半に相当する。89は器種を特定するのが難しいが、おそらく甕か壺の把手部分である。90は鉄滓である。外面に多数の小穴が確認される。

SK07（第28・29図、図版15）

調査区の中央付近、B4 グリッドに位置する土坑である。

平面形状は、東西がやや長い方形状を呈したもので、北西隅は時期不明の土坑によって切られてい る。平面規模は、上面径 107～136cm、深さは 29～36cm を測る。



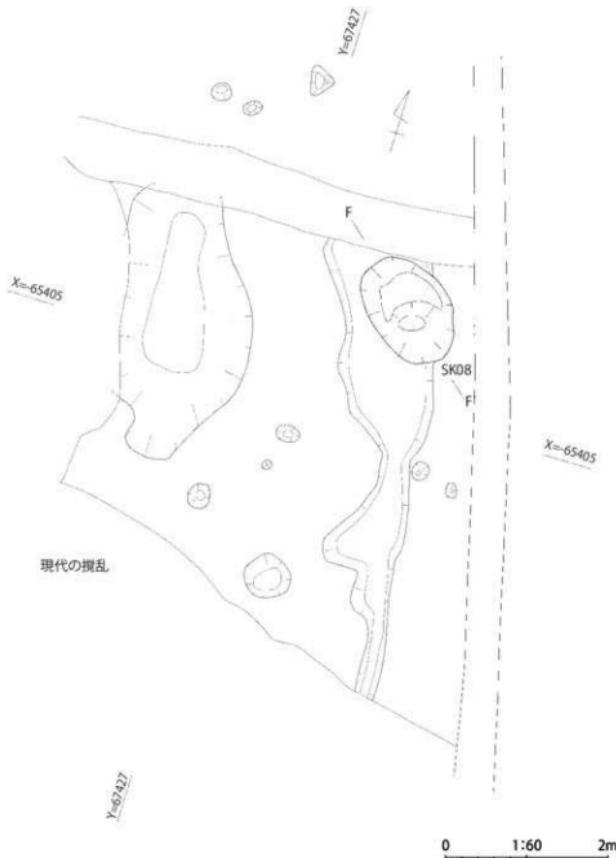
第30図 SP28・29・SK05～07出土遺物実測図

土坑内の埋土は、灰オリーブ色土の単層である。

遺物は、埋土層から古代の土師器の坏片の他、SK06 と同様な鉄滓が出土している。

出土遺物（第 30 図、図版 25）

91・92 は土師器の坏の底部付近である。いずれも見込みに回転ナデの指痕が残り、底面には回転系切痕がみられる。91 は 11～12 世紀代、92 は古代の範疇に入るものであろう。93 は鉄滓である。外面に多数の小穴が確認される。



第 31 図 第 2 面 調査区北西側 平面実測図（古代）

SK08（第29・31図、図版15）

調査区の北東側、B2グリッドに位置する土坑である。

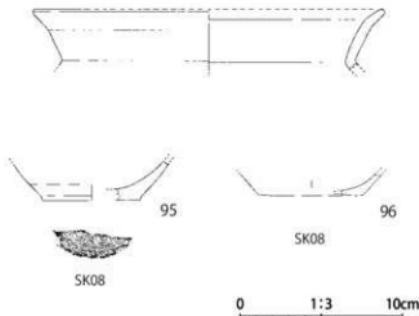
平面形状は、北東から南西方向が長い橢円形状を呈したもので、平面規模は上面径96～143cm、深さは56～60cmを測る。

土坑内の埋土は、ほぼ黒褐色土の単層であるが、一部窪んだ底面にオリーブ黒色粘質土が堆積している。

遺物は、埋土層から古墳時代の土師器の甕片、古代の土師器の壺片・皿片が出土している。

出土遺物（第32図、図版25）

94は土師器の甕の口縁部付近である。口縁は「く」の字状の単純口縁で、胴部は張るタイプのものであろう。古墳時代中期後半～後期前半に相当する。95は土師器の無高台壺の体部から底部で、底部には回転糸切痕がみられる。出雲国府第9型式、11世紀後半～12世紀前半のものである。96は土師器の皿の底部付近で、12世紀代のものであろう。



第32図 SK08出土遺物実測図

表3 古代の柱穴・土坑 計測表

遺構名	グリッド	上面長軸	上面短軸	下面長軸	下面短軸	深さ	備考
SP28	C5	31cm	23cm	16cm	12cm	17～19cm	
SP29	C6	66cm	49cm	32cm	27cm	41～46cm	
SK05	B3	207cm	166cm	89cm	38cm	40～53cm	
SK06	B3	105cm	64cm	68cm	40cm	26～30cm	
SK07	B4	136cm	107cm	109cm	80cm	29～36cm	
SK08	B2	143cm	96cm	33cm 70cm	17cm 36cm	53～56cm 56～60cm	

遺構面、遺物包含層（第6図、図版1・2）

第2面の基盤層は、一部他の土層が入る場所もあるが、基本的に黒褐色砂質土となっている。これまで述べてきたとおり、この面からは古代～近世までの遺構を検出しておらず、遺構面上においてもこれを示す時期の遺物の出土が認められる。

また、第2面上に堆積する第1～2面間層からは、古墳時代～近世までの遺物が混在する形で出土しており、近世頃に埋められた造成土であった可能性が考えられる。

以下、第2面上と第1～2面間の遺物包含層から出土した遺物の詳細を述べる。

※近世の出土遺物は、肥前磁器、布志名碗などがみられたが、小片であることから図化していない。

第2面出土遺物（第33図、図版25・26）

97～102は土師器である。97は瓶の把手として図化したが、土製支脚の突起の可能性もある。古墳時代後期頃のものであろうか。98は高台付环の体部から底部で、高台が短く聞くタイプである。出雲国府第6型式、9世紀中葉～後葉に相当する。99は無高台环の体部から底部で、底部の中心に向かって薄くなる。出雲国府第9型式、11世紀後半～12世紀前半のものである。100・101は皿の口縁部から底部付近で、体部は短く立ち上がる扁平なものである。101の底部には回転糸切痕がみられる。100・101ともに13世紀前後のものであろうか。102は鉢の口縁部から体部付近で、肥厚した口縁の端部が上方へ延びている。中世の範疇に入るものであろう。

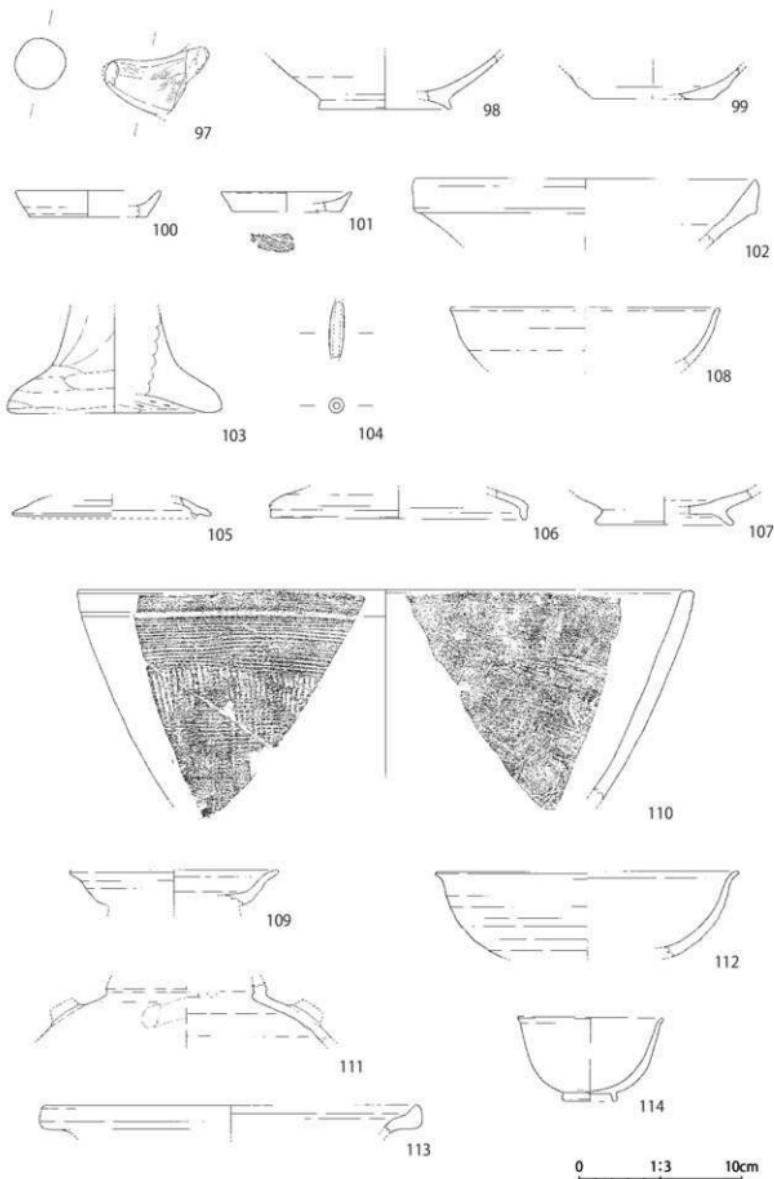
103は土製支脚で、底部は削り込まれている。古墳時代に相当する。104は紡錘形の土鍤である。

105～110は須恵器である。105・106は蓋の口縁部付近で、105は受部があるタイプ、106は口縁部が「く」の字状に屈曲するタイプである。105は出雲国府第1型式、7世紀後半、106は出雲国府第2型式、7世紀末～8世紀第1四半期に相当する。107は高台付环の体部から底部で、高台は「ハ」の字状に聞く。また、底部は静止糸切痕がみられる。出雲国府第1型式、7世紀後葉のものである。108は环の口縁部から体部で、口縁部付近はやや押し窪められている。出雲国府第2型式、7世紀後葉～8世紀第1四半期に相当する。109は高台付皿の口縁部から底部付近で、口縁部は外反し聞く。出雲国府第4～5型式、8世紀第3四半期～9世紀前葉のものである。110は口径37cmを測る大型の鉢で、外面の口縁部下に1条の沈線が廻る。外面は平行叩き、内面は同心円当具による調整であるが、外面の口縁部下半は横ハケメとナデによって消されている。8～9世紀代のものであろうか。

111～113は中国磁器である。111は白磁の四耳壺の頸部から肩部で、耳部は欠損している。大宰府III類C期、11世紀後半～12世紀前半に相当する。112は白磁の碗の口縁部から体部下付近で、内湾する体部に口縁部が小さく外反する。14世紀代のものであろう。113は青磁の盤の口縁部付近で、口縁端部は肥厚する。また、内外面ともに被熱がみられる。15～16世紀代に相当する。114は陶器の碗である。京都・信楽系、18世紀代のものである。

遺物包含層（第1～2面間層）出土遺物（第34図、図版26）

115～122は須恵器である。115は壺あるいは堤瓶の頸部である。出雲5か6期、7世紀前半から中頃に相当する。116は大型壺の口縁部で、外面は沈線による区画内に刷毛状工具による波状文が廻る。古墳時代後半のものであろうか。117は壺の口縁部から頸部付近と思われるもので、古代の範

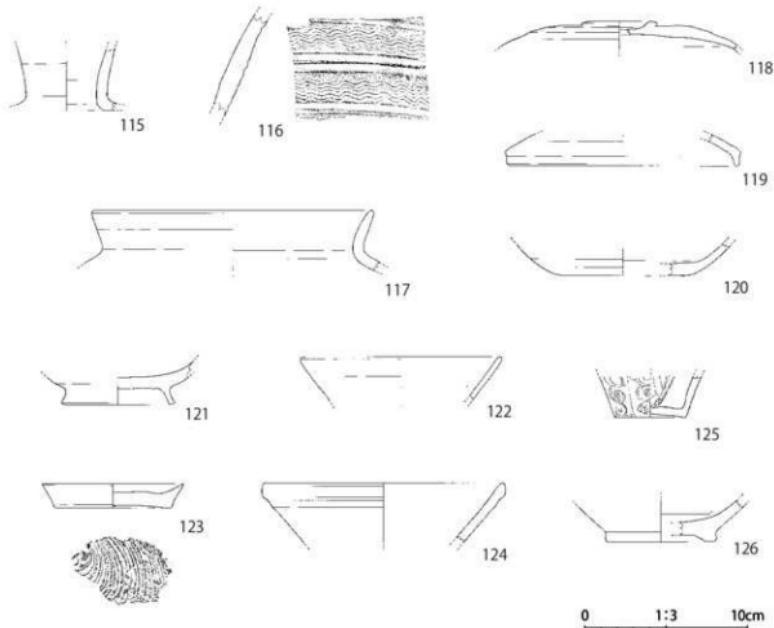


第33図 第2面出土遺物実測図

輪に入るものの、118は蓋の天井部から肩部付近で、低い輪状摘みが付くものである。119は蓋の口縁部付近で、口縁部は屈曲するタイプである。118・119は出雲国府第2型式、7世紀後葉～8世紀第1四半期に相当する。120～122は坏で、120は体部下から底部付近の無高台で、体部が内湾して立ち上がるるもの、121は高台が付く底部付近で、高台が「ハ」の字状に開くもの、122は口縁部から体部で、体部が直線的に開くものである。このうち120・121は出雲国府第2型式、7世紀後葉～8世紀第1四半期、122は出雲国府第5・6形式、9世紀代に相当する。

123は扁平な土師器の皿で、口縁端部は尖り、底部には回転糸切痕がみられる。12～13世紀代に相当する。

124～126は中国磁器である。124は玉縁状の口縁を成す白磁の碗の口縁部から体部で、森田IV 1a類、11世紀後半～12世紀代のものである。125は青白磁の水注の体部下から底部である。八角形の型押し成形で、内面には接合痕がみえる。また、外面には陽刻の唐草文様が施されている。13～14世紀代に相当する。126は龍泉窯系の青磁碗の体部下から底部で、見込み円周に1本の沈線が施されている。大宰府IV類、14世紀代に相当する。



第34図 遺物包含層（第1～2面間層）出土遺物実測図

3. 第3面（第35図、図版13）

第2面から20～30cmほど掘削して検出した面である。基盤層は、標高2.1～2.2mを測る無遺物層の黄褐色砂土（2.5Y 5/4）で、この層以下は地山となる。また、地形の形状は、ほぼ平坦であるが調査区中央がやや低い。

第3面からは、古墳時代の土坑を9基（SK09～17）と弥生時代の土坑1基（SK18）を検出している。

なお、第3面は、水の流出が多く土坑の掘削時などはすぐ水が溜まり、砂土で形成された遺構上面が時間を経たず崩れるといった状況で、遺構自体の形状が保てないものであった。このような状況と検出した土坑の浅さから、第3面で検出した土坑は、軟弱なこの面から掘られたものではなく、この上位である第2～3面の間から掘られたものと推測される。

以下、各遺構の詳細と遺物包含層について述べる。

古墳時代

古墳時代の遺構は前述のとおり、すべて土坑であり、区域に偏りなく分散する形で検出している。土坑の規模は、大小さまざまなもので、それぞれの遺構の明確な性格は分かっていないが、甕が1個体入れられたものもみつかっている。また、後述するSK10～13・SK15～17については、土坑内からの出土遺物がみられなかったことから正確な時期については不明と言わざるを得ないものであったが、土坑を検出した面がこの第3面であったことを積極的に捉え、他の土坑と同様な時期としている。

SK09（第35・37図、図版16）

調査区の中央やや北東寄りのB3グリッドに位置する大形土坑で、北西側にはSK10が近接している。

平面形状は、南北方向に長い円形を呈し、底面には浅い円形の窪みが2ヶ所みられる。平面規模は、上面径155～211cm、深さは16～26cmを測る。

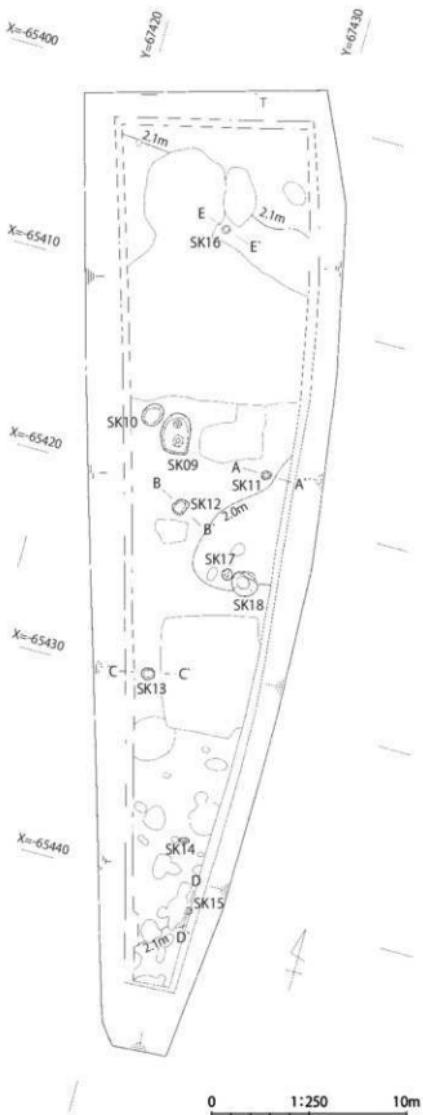
土坑内の埋土は、上層が黒褐色土、下層が黑色土の2層である。

土坑内からは、1個体分が潰れた土師器の甕、別個体の土師器の甕の口縁部が数片、甕の把手付近が2個、18～23cm大の石が底面からやや浮いた状態（第2層中）で出土している。なお、ほぼ1個体分で出土した甕は、胴部下に直径8cmほどの穴が開いており、意図的に開けられたものと思われる。また、他に出土した甕の把手と甕の口縁部は、それぞれ単独の個体となるものであったが、他部位は土坑内からみつかっていない。

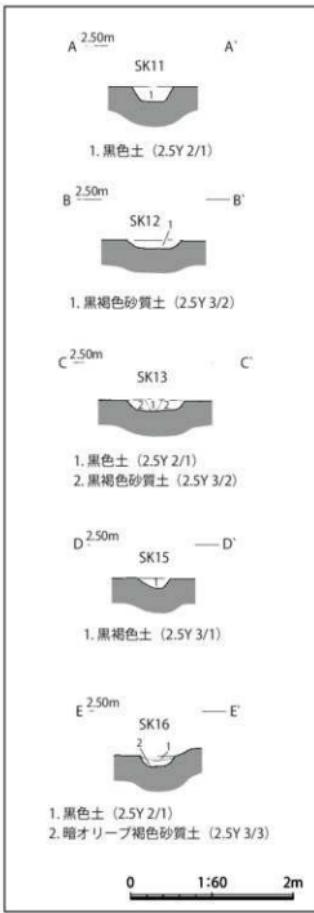
このSK09からは、円形状に穿孔された甕1個体と甕の口縁部、甕の把手2個、石が人為的に入れられたことが推測できることから、ここで祭祀的な行為が行われた可能性が考えられる。ただ、それが土坑を使用しなくなった時に行われたものなのか、祭祀的要素を当初からもっていた土坑であったのかは推測の域をでない。

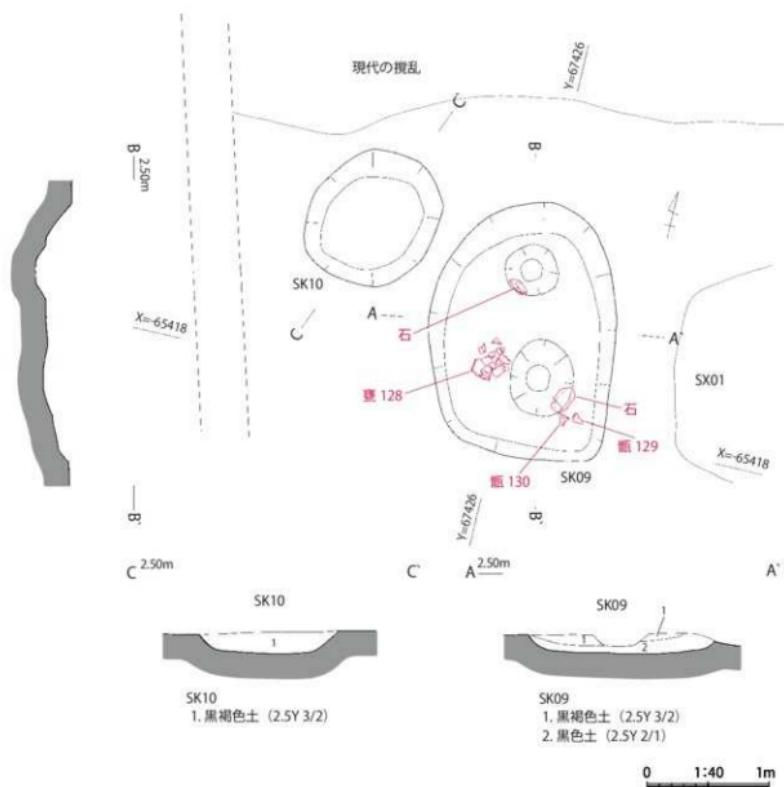
出土遺物（第38図、図版27）

127・128は「く」の字状の口縁を成す土師器の甕である。127は口縁部のみであるが、128は底部を欠損するもののほぼ完形に復元できた。口縁部は緩く外反し、球形に近い胴部の中位に最大径を



第35図 第3面平面実測図(弥生・古墳時代)

第36図 SK11・12・13・15・16
土層断面実測図



第37図 SK09・10平面・土層断面実測図

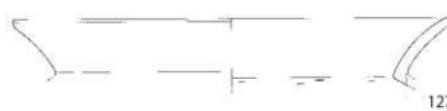
もつ。調整は、内面が横方向の削り、外側が縦または斜め方向のハケメである。胴部下半には、直径8cmほどの円形の穿孔が確認できる。127・128共に古墳時代後期の前半頃に相当する。129・130は土師器の甌の把手部分である。把手は板状工具による成形が成され、130は復元すると径30cmほどの中部となる。いずれも、古墳時代後期のものである。

SK10（第35・37図、図版17）

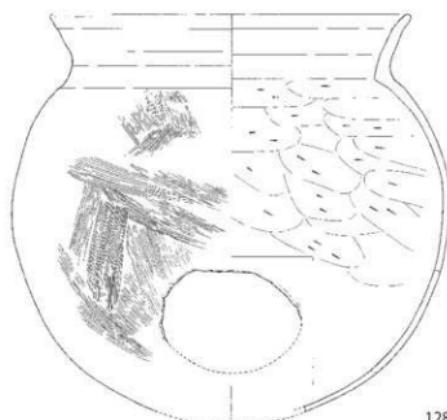
調査区の中央やや北東寄りのB3グリッドに位置する大形土坑で、南東側にはSK09が近接している。

平面形状は、ほぼ円形を呈し、平面規模は上面径112～115cm、深さは11～16cmを測る。

土坑内の埋土は、黒褐色土の単層で、埋土中からの出土遺物はみられなかった。



127



128



129

0 1:3 10cm



130

0 1:6 20cm

※ 130は1/6

第38図 SK09出土遺物実測図

SK11（第35・36図、図版17）

調査区の中央やや北寄りのC3グリッドに位置する土坑である。

平面形状は、ほぼ円形を呈し、平面規模は上面径42～50cm、深さは16～18cmを測る。

土坑内の埋土は、黒色土の単層で、埋土中からの出土遺物はみられなかった。

SK12（第35・36図、図版17）

調査区のほぼ中央、B4グリッドに位置する土坑である。

平面形状は、南北がやや長い隅丸方形を呈し、平面規模は上面径70～84cm、深さは9～11cmを測る。

土坑内の埋土は、黒褐色砂質土の単層で、埋土中からの出土遺物はみられなかった。

SK13（第35・36図、図版18）

調査区の中央から南寄りのB4グリッドに位置する土坑である。

平面形状は、ほぼ円形を呈し、平面規模は上面径61～71m、深さは10～11cmを測る。

土坑内の埋土は、中央が黒色土、その縁辺が黒褐色砂質土であり、この埋土の状況から柱穴であった可能性も考えられる。

なお、土坑内の埋土中から出土遺物はみられなかつた。

SK14（第35・39図、図版18）

調査区の南側、C5グリッドに位置する土坑である。

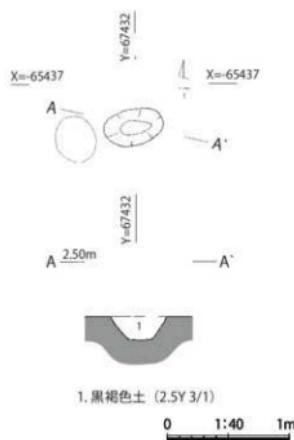
平面形状は、東西に長い楕円形状を呈し、平面規模は上面径29～49cm、深さは16～17cmを測る。

土坑内の埋土は、黒褐色土の単層である。

遺物は、土坑内の埋土から土師器の高環片、須恵器の壺片が出土している。

出土遺物（第40図、図版27）

131は土師器の高環の脚部である。風化が著しいが、外面の一部にハケメが確認できる。古墳時代後期に相当する。132は須恵器の大型壺の頸部である。内面は同



第39図 SK14 平面・土層断面実測図



第40図 SK14 出土遺物実測図

心円当具痕が残るが、頸部直下はナデ消されている。古墳時代後期に相当しよう。

SK15 (第35・36図、図版18)

調査区の南側、C6 グリッドに位置する土坑である。

平面形状は、ほぼ円形を呈し、西側は中世の柱穴によって切られている。平面規模は、上面径 41 ~ 25cm 以上、深さは 10 ~ 12cm を測る。

土坑内の埋土は、黒褐色土の単層で、埋土中からの出土遺物はみられなかった。

SK16 (第35・36図、図版19)

調査区の北側、B2 グリッドに位置する土坑である。

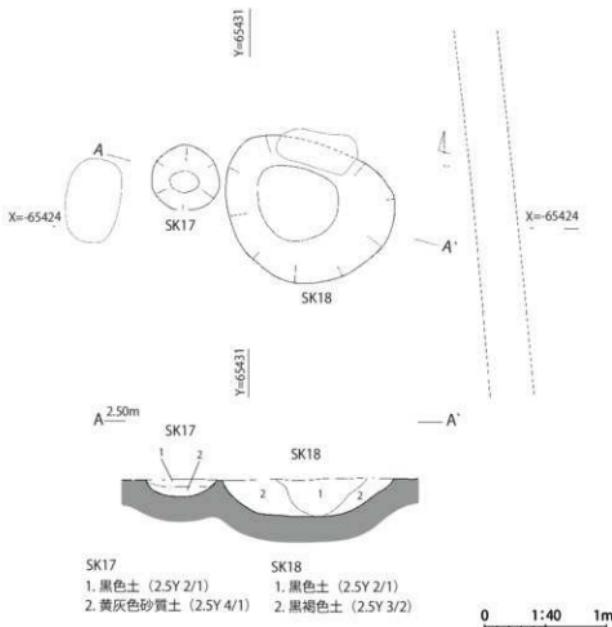
平面形状は、ほぼ円形を呈し、平面規模は上面径 42 ~ 46cm、深さは 11 ~ 13cm を測る。

土坑内の埋土は、上層が黒色土、下層が暗オリーブ褐色砂質土で、ほぼ水平に堆積している。

なお、土坑内の埋土中からの出土遺物はみられなかった。

SK17 (第35・41図、図版19)

調査区のほぼ中央、C4 グリッドに位置する小形土坑で、東側には弥生時代の SK18 が近接している。



第41図 SK17・18 平面・土層断面実測図

平面形状は、ほぼ円形を呈し、平面規模は上面径 53 ~ 56cm、深さは 12 ~ 14cm を測る。

土坑内の埋土は、上層が黒色土、下層が黄灰色砂質土で、それぞれがほぼ水平に堆積している。

なお、土坑内の埋土中からの出土遺物はみられなかった。

弥生時代

弥生時代の遺構は土坑 1 基 (SK18) のみで、調査区の中央付近で検出している。

先述のとおり、土坑が掘られた面は、検出した第 3 面ではなく、第 2 ~ 3 面間の確認できていない面からのものと思われる。また、土坑の時期は弥生時代中期であり、同時期の土器が中世の SP06 と後述する第 2 ~ 3 面間層からも出土している。

SK18 (第 35・41 図、図版 19)

調査区のほぼ中央、C4 グリッドに位置する土坑で、西側には古墳時代の SK17 が近接している。

平面形状は、やや橢円形状を呈し、平面規模は上面径 116 ~ 143cm を測る。なお、土坑の深さは古墳時代の土坑より深く 28 ~ 30cm を測る。

土坑内の埋土は、中央付近が黒色土で、その縁辺は黒褐色土となっている。

遺物は、土坑内の埋土 1 層から弥生土器の甕片が出土している。

出土遺物 (第 42 図、図版 27)

133・134 は弥生土器の甕の胴部最大径付近である。133 は内面がハケメ、外面が縦ハケメ調整で、外面に櫛状工具による刺突列点文を施す。134 は内面が横ミガキ、外面が縦ハケメ調整である。133・134 共にⅢかⅣ様式、弥生時代中期のものである。



第 42 図 SK18 出土遺物実測図

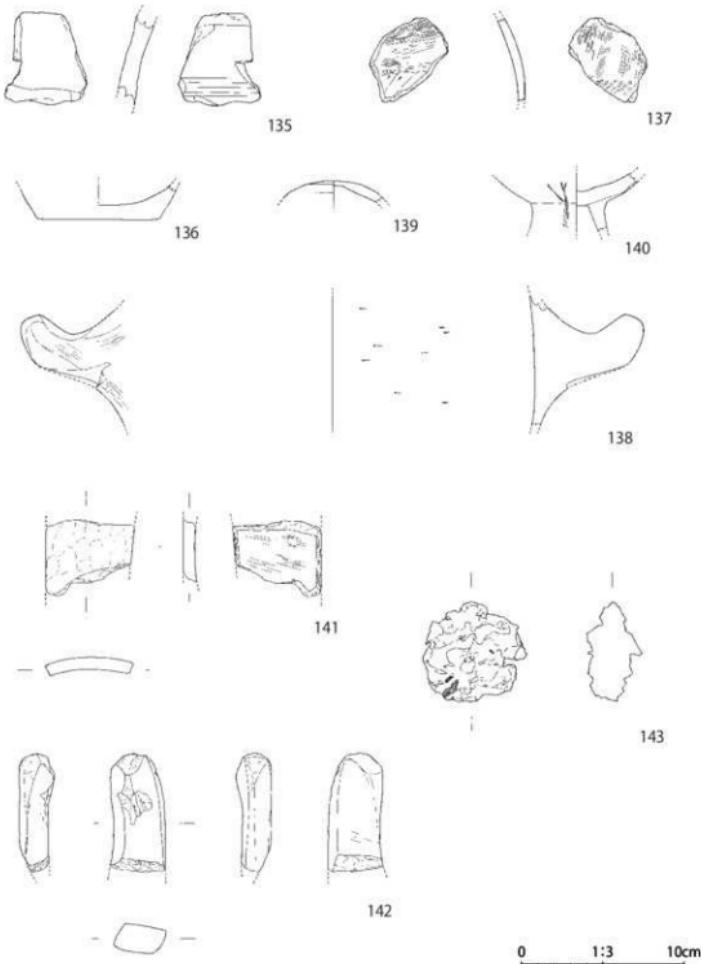
表 4 弥生・古墳時代の土坑 計測表

遺構名	グリッド	上面長軸	上面短軸	下面長軸	下面短軸	深さ	備考
SK09	B3	211cm	155cm	174cm	126cm	4~26cm	
SK10	B3	115cm	112cm	90cm	73cm	11~16cm	
SK11	C3	50cm	42cm	32cm	26cm	16~18cm	
SK12	B4	84cm	70cm	62cm	46cm	9~11cm	
SK13	B4	71cm	61cm	55cm	43cm	10~11cm	
SK14	C5	49cm	29cm	25cm	12cm	16~17cm	
SK15	C6	25cm 以上	41cm	15cm 以上	17cm	10~12cm	
SK16	B2	46cm	42cm	29cm	26cm	11~13cm	
SK17	C4	56cm	53cm	23cm	17cm	12~14cm	
SK18	C4	143cm	116cm	71cm	60cm	28~30cm	

遺物包含層（第6図、図版1・2）

第3面の基盤層は、先述のとおり黄褐色砂土の地山となっており、遺物は包含していない。また、この第3面上からの出土遺物もみられなかった。

一方、第3面上に堆積する第2～3面間層中からは、弥生～飛鳥時代までの土器類や砥石・滑石



第43図 遺物包含層（第2～3面間層）出土遺物実測図

製石鍋（短冊状石製品）などの石製品、滓などが混在して出土している。のことから、第2面基盤層でもある第2～3面間層は、飛鳥時代以降に堆積したものと考えられる（滑石製石鍋については、包含層の最上位から出土したもので、第2面からの混入品と思われる）。

以下、第2～3面間の遺物包含層から出土した遺物の詳細を述べる。

遺物包含層（第2～3面間層）出土遺物（第43図、図版28）

135～137は弥生土器である。135は壺の頸部で、やや外向きに開き、下方の欠損付近には凹線（3本以上）が施される。灰黄色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。風化が著しく、内外面の調整は不明である。IV様式、弥生時代中期後半のもので、29（SP06出土）の大型壺と同形体の壺の可能性がある。136は壺か甕の底部である。内面はナデ、外面の調整はミガキであろうか、風化が著しく判別し難い。137は甕の胴部である。内面は最大径付近から上方が横ハケメ、下半が斜め方向の削り調整である。外面は縦ハケメ調整で、最大径付近に刺突列点文が施される。136・137ともⅢかⅣ様式、弥生時代中期に相当する。

138は土師器の瓶の把手付近である。把手の上面には押さえによる面ができている。古墳時代後期頃のものであろうか。

139・140は須恵器である。139は壺蓋の天井部で、出雲6期、7世紀前半～中頃に相当する。140は高壺の接合部付近で、二方向に切り込みの透かしが入る出雲4か5期、6世紀末～7世紀前半のものである。

141・142は石製品である。141は滑石製石鍋の体部を転用したものである。方形を呈すことから、⁽¹⁰⁾温石の可能性があるが、欠損し、全体の形が不明なことや穿孔もみられないことから、短冊状石製品とした。外面は石鍋成型時の削り痕が残り、使用時の煤が付着している。内面は滑らかで、細かな擦痕がみえる。側面には転用時にできたと考えられる線状痕が認められる。なお、滑石製石鍋の出土は、穴道町内では能登堀遺跡・深坪遺跡に次ぎ、3例目である。142は棒状の砥石である。片側は大きく欠損しているが、3面を砥面として使用したことが分かる。

143は滓である。表面は凹凸が顕著にみられ、炭化物を含んでいる。大きさに比して軽い印象を受けることから、鉄滓ではない他の滓の可能性も考えられる。

註

- (1) 中国陶磁器の年代観については、『大宰府条坊跡XV』太宰府市教育委員会 2000 のほか、「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究 No.2』森田勉 日本貿易陶磁研究会 1982、「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究 No.2』上田秀夫 日本貿易陶磁研究会 1982 を参考とした（以下すべて）。
- (2) いずれの層も調査区土層断面ラインにかかった遺構及び擾乱埋土層を含む。
- (3) 生糸の縫糸には煮織分業式と煮織兼業式があるが、本品は煮織兼業式に用いられた鍋と考えられる。
「日本製糸業における発展要因の再考—比較技術史の視点から—」『経済研究』57巻1号 清川雪彦 岩波書店 2006
- (4) 『二渡船渡ノ上遺跡 山崎野町跡 A』鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011 の記載による。
- (5) 岡谷蚕糸博物館蔵の鍋は、「諷訪式」と言われている。
- (6) 中世土器の年代観については、次の資料を参考とした（以下すべて）。
 - ・「出雲平野における中世土器の様相」『山陰中世土器研究 1－西尾克己さん還暦記念論集－』高橋 周
山陰中世土器検討会 2013
 - ・「中世須恵器の生産と流通 一山陰地方を中心として」『第3回 山陰中世土器検討会 資料集』山陰中世土器検討会 2003
 - ・「山陰における中世前期の諸様相 一伯耆・出雲を中心として」『第5回 山陰中世土器検討会 資料集』山陰中世土器検討会 2006
 - ・「山陰における中世の調理具」『第6回 山陰中世土器検討会 資料集』山陰中世土器検討会 2007
 - ・「山陰における中世後期の貿易陶磁」『第8回 山陰中世土器検討会 資料集』山陰中世土器検討会 2009
- (7) 備前焼の年代観については、「備前焼の編年について」『第7回 山陰中世土器検討会資料集 山陰地方における備前焼』乗岡実 山陰中世土器検討会 2008 を参考とした（以下すべて）。
- (8) 亀山系須恵器に関しては、「別所遺跡」「薊沢A遺跡 薊沢B遺跡 別所遺跡」松江市教育委員会 1988 を参考とした（以下すべて）。
- (9) 東播系須恵器に関しては、「山陰地方における東播系須恵器」山陰中世土器検討会 2013 を参考とした。
- (10) 「觀世音寺出土の滑石製石鍋」「觀世音寺—考察編—」杉原敏之 九州歴史資料館 2007 を参考とした。
- (11) 「能登掘遺跡発掘調査報告書」松江市教育委員会 2009
- (12) 「深坪遺跡」「庄遺跡・深坪遺跡」島根県教育委員会 2010

参考文献

- ・『尼子氏の特質と興亡史に関する比較研究』島根県古代文化センター 2013
- ・『出雲国の形成と国府成立の研究 一古代山陰地域の土器様相と領域性ー』島根県古代文化センター 2010
- ・『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書V』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1996
- ・『国家形成期の考古学 大阪大学考古学研究室10周年記念論集ー』大阪大学考古学研究室 1999
- ・『山陰地方における瀬戸・美濃陶器』『第9回 山陰中世土器検討会 資料集』山陰中世土器検討会 2010

- ・「山陰における中世土器の変遷について 一供膳具・煮炊具を中心としてー」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』
八峰 興 日本中世土器研究会 1998
- ・『中世今市船着場跡文化財調査報告書』益田市教育委員会 2000
- ・『七尾城跡・三宅御上居跡』益田市教育委員会 1998
- ・『浜田・古市遺跡における中世前半の土器について』『松江考古』第9号 柳原博英 松江考古学談話会 2001
- ・『平安時代前期の土器様相 ー中国地方を中心にー』『第4回山陰中世土器検討会 資料集』山陰中世土器検討会
2005
- ・『平成5年度市民歴史講座講演記録集 須恵器でみる古代の日本』枚方市教育委員会 1996

第4章 総括

本報告書においては、第3章で森屋敷遺跡の調査について述べてきた。本章では、文献に載る字名から森屋敷遺跡とその周辺を概観したうえで、調査成果を踏まえた時期別の様相と特筆する遺物を記し総括したい。

1. 字名からみる森屋敷遺跡とその周辺（第44図）

森屋敷遺跡は穴道湖沿岸部にあり、穴道町の中心地であるJR穴道駅の北側に所在する。近代以降の開発により、町の様相に変化はみられるが、本遺跡周辺は近世以来の街区をよく留めているようである。

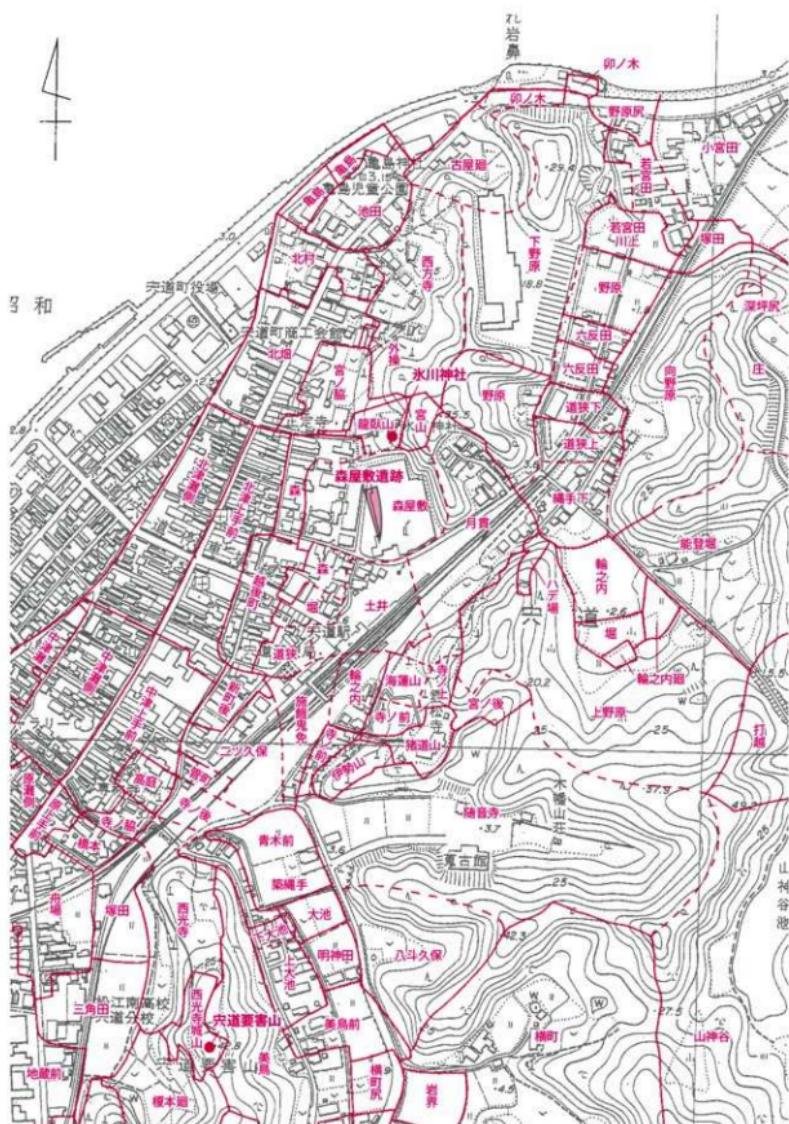
ここでは、現代に残る町内の字名を現在の地形図にあて嵌め、字名からみえる中世を中心とした遺跡周辺の姿について考えてみる。

本遺跡の字名「森屋敷」の「森」は、鎮守の森のように神を祀る場所の意味があり、社⁽¹⁾の字をあてるとされることから、社⁽²⁾との関係が考えられている。これについては、本遺跡北東の小丘陵に鎮座する氷川神社⁽³⁾の存在が何らかの意味を成すのではないかと考える。「屋敷」についての由来は定かではないが、「御蔵屋敷」（海部城跡周り）、「中屋敷」（舞屋城跡周り）、「トガ屋敷」・「古屋敷」（佐々布要害山城跡周り）などのように、中世の山城周辺に「屋敷」の付く字名がよくみられることから、城主および有力者層との関連が推察される。また、「屋敷」という言葉を現代用語として端的に捉えると、家屋と敷地を合わせたものが想像できる。

本遺跡周辺を見廻すと、300m南西にある丘陵に中世穴道氏の主要山城のひとつである穴道要害山城跡が築かれている。この山城跡から本遺跡に向う途中のJR山陰線の南側に小丘陵（字名は「猪道山」）がある。現在、雲松寺境内となっているこの小丘陵の北側には「土井」（土井は土居と同義語であり、居館〔居屋敷〕の意味をもつ）・「堀」・「輪之内」（輪は曲輪の意=郭）・「馬場屋敷」の字名が、東側には「縄手下」・「輪之内」・「堀」の字名が残っている。これらの字名は城館に関連する用語にあたることから、小丘陵の北麓（JR穴道駅付近）に中世の居館が存在していた可能性が考えられる。

以上のことから、「森屋敷」の字名をもつ本遺跡及び、その周辺には中世の居館が存在した可能性を字名から読み取ることができよう。

その他、本遺跡から南西方向、佐々布川の河口右岸の街区には、「北津灘」・「中津灘」・「原灘」・「舟場」などの字名がみえる。「津」は港に関連する地名で、「舟場」は船着き場の意味ともとれる。穴道要害山の北西に残る「舟場」～「原灘」にかけての水田標高は1.2～1.8 mしかなく、上記の字名と合わせ、かつてはこの辺りまで穴道湖が湾入していたものと考えられる。この付近は、時代は下るが近世には「津出し場」・「渡海場」⁽⁷⁾と呼ばれていたことから、ここに港と港津集落の存在が推定されている。⁽⁸⁾また、穴道における古代山陰道については、近世山陰道と同様、森屋敷遺跡の南西に形成される街区を北東～南西方向に向かい、佐々布川河口付近を通って穴道駅に続くルートが推定されている。本遺跡は古代山陰道のルート周辺にあたることから、古代より交通と物流の要衝地となっていたことが窺える。



第44図 森屋敷遺跡周辺の字名 1:5000

2. 森屋敷遺跡における各時代の様相

弥生時代（弥生時代中期・後期）（第45図）

弥生時代の穴道町内では、これまで白石大谷I遺跡で中期後半の土器が、三成遺跡で中期末頃の土器が出土しており、白石大谷I遺跡では集落の存在が指摘されている⁽¹⁰⁾。後期になると山守免遺跡や上野遺跡など、丘陵部で高地性集落がみられるようになる。

本遺跡において、最も古い段階の遺構は、第3面の調査区中央付近で検出した土坑（SK18）1基である。この土坑内埋土中からは、弥生時代中期の甕が出土している。なお、土坑が存在していた（掘られた）面は、「第3章3. 第3面」の項で述べたとおり、検出面（第3面：地山砂層）ではなく、本来は砂地（砂質土）であったため検出することができなかった第2～3面間にあったものと考えられる。その他、当該期を示すものとしては、遺物包含層（第2～3面間層）から出土した中期の壺と甕（第43図135、136、137）、試掘調査（T4）で出土した後期の甕（第4図1）の他、混入品として中世の柱穴（SP06）から出土した中期後葉の大型広口壺（第16図29）がみられる。

当該期の本遺跡は、確認できた遺構が土坑（SK18）1基のみであり、他に同時期の遺構がみられないことから、その様相については想定し難いものである。ただ、少なくとも弥生時代中期・後期段階には、この地に生活の営みが認められ、その人々の生活基盤である集落は本遺跡周辺の小丘陵などに存在していた可能性が考えられる。

古墳時代（古墳時代中期・後期）（第45図）

本遺跡の古墳時代の遺構は、第3面で検出した調査区内に分散する土坑9基（SK09～17）である。なお、これら土坑が存在していた（掘られた）面については、前述の弥生時代の遺構と同様、本来は第2～3面間にあったものと考えている。当該期の土坑のうち、SK09からは、古墳時代中期後半～後期前半の土師器の甕1個体（第38図128）と同様な時期の土師器の甕の口縁部1片（第38図127）、土師器の甕の把手部分2片（第38図129・130）が土坑埋土中から出土しており、甕1個体（128）においては、胴部下半が穿孔されているものであった。これらから土坑（SK09）は土坑を埋める際に、穿孔した甕・甕の口縁・甕の把手を用いた何らかの祭祀儀礼が行われたものと考えられる。

古墳時代の本遺跡は、土坑9基が調査区内に点在する形で存在し、SK09以外の土坑は、その用途・性格について不明なものであった。このような状況であることから、当該期の様相について明確なことは言えないが、前述の弥生時代よりも遺構数が幾分か増加することから、当地の人々の動きは弥生時代に比べ多くなっていたものと思われる。また、約300m東の丘陵谷部に位置する能登堀遺跡で後期の溝と遺物が確認されている事例から、このような場所に当該期の集落などの生活基盤が築かれていたものと考えられる。

古代（飛鳥～平安時代）（第46図）

本遺跡の古代の遺構は、第2面から検出している。この遺構検出面である第2面においては、後述する中世・近世の遺構も同一面で混在する形でみつかっているが、本来の生活面は各々違う面であった可能性も考えられる（中世・近世時の削平などにより）。また、この第2面の遺構面基盤層（第2～3面層）は、弥生時代～飛鳥時代の土器等を包含することから、飛鳥時代以降に堆積したものと

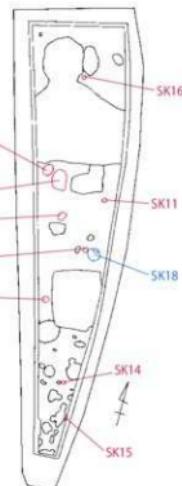
思われる。

当該期の遺構は、調査区南側で確認した柱穴2基(SP28・29)、調査区中央と北側で確認した土坑4基(SK05～08)である。確認した遺構は、古墳時代の遺構同様、調査区内に点在する形でみつかっている。遺構内からの出土遺物は少なく、遺構の性格も不明であるため、遺跡の様相について明確には述べ難いが、SK06・07内より鐵滓(第30図90・93)が、試掘調査(T5)の第2面付近で縁の羽口破片(第4図4)が出土していることは注目され、当該期の本遺跡付近で鍛冶が行われていた可能性が考えられる。

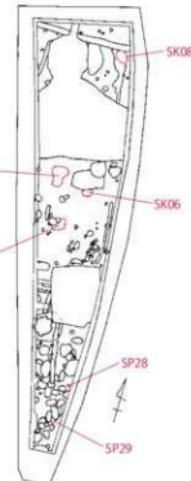
古代の本遺跡は、出土遺物からではあるが、鍛冶などが行われた形跡が認められることなどから、前時期の古墳時代に比べ生活基盤である集落の中心がより近くなっていたものと思われる。また、前述の能登堀遺跡においては、古代末～中世にかけての遺物が出土する包含層が確認されていることから、前時期同様、能登堀遺跡周辺と当地とは関連性をもっていたと考えられる。

中世（鎌倉～安土桃山時代）（第47図）

当該期の遺構は、第2面の調査区南半で掘立建物跡1棟(SB01)、井戸1基(SE02)、柱穴21基(SP07～27、※SB01を構成する柱穴SP02～06は数に入れていない)、調査区北側で土坑1基(SK04)を確認している。単純に時期別の遺構数を比較した場合、森屋敷遺跡の主体を成す時期は当該期にあたると思われる。また、遺構の検出状況を見ると、調査区中央より南側に集中しており、調査区外の南側周辺に遺構の広がりが推定できるようである。なお、唯一の建物跡として確認した掘立柱建物跡(SB01)は、3間(約6.0m)×2間(約4.0m)以上の規模をもつもので、建物を構成する柱穴は上面径80～170cmを測る大型のものであった。調査区外の東側に続くことから全体像は不明であるが、柱穴規模の大きさから母屋のような建物であったと考えられる。また、この掘立柱建物跡(SB01)を構成する柱穴と同様な大きさをもつ柱穴や柱が残存する柱穴が建物跡の周辺で多く見つかっていることから、他に掘立柱建物跡が存在していた、または、掘立柱建物跡(SB01)の建て替えが行われた可能性が考えられる。その他、掘立柱建物跡(SB01)の北側で井戸(SE02)を確認しているが、この井戸は掘立柱建物跡(SB01)の北西隅



第45図 弥生・古墳時代 1:500



第46図 古代 1:500

に近接する位置にあることから、掘立柱建物跡（SB01）と併存したものと解釈している。なお、この井戸（SE01）については、祭祀儀礼が行われた形跡がみられることから、若干、詳細を述べる。

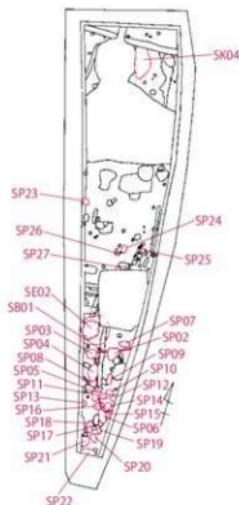
井戸（SE02）では、廃絶時に1個の大石を井戸内に埋めるという、畿内でよくみられる埋井法と類似する形跡が認められる⁽¹⁰⁾ことから、埋井に伴う祭祀儀礼が行われた可能性が考えられる。

SE02は、内径約100cmを測る円形の石組井戸で、3~4段に組み上げられている。そのほぼ真ん中に、30×33×55cmを測る長方形の大石が1個、井戸廃絶時に堆積した下層に下端を接して埋まっており（井戸の下層部で、底面から約20cm浮いた位置にあたる）、大石の上には井戸を埋めた土が堆積する状況であった（第17図）。なお、大石上の埋土層からは中国磁器や中世須恵器、在地土師器、箸などが出土している。検出した大石は、上端と下端に平坦面をもち、下端が井戸堆積土下層に接することから、廃絶時に意図的に置かれた可能性が高いと考えられる。このような、井戸内に大石が1個埋まっている状況は、久世氏のI b類に相当するものと考えられる。類例としては、京都府長岡宮217次SE21724（長岡京期）や京都府平安京左京七条三坊十五町SE2（室町時代）などが報告されている。

石による埋井は、全国的に見れば、弥生時代から行われているようだが、本例のような井戸内に大石を1個埋める埋井法は、畿内では中世において主流として行われていたものと考えられて⁽¹¹⁾いる。

森屋敷遺跡で検出した井戸（SE02）が、このような埋井法で行われたものであるとすれば、当時の文化的・経済的中心地であった畿内と共に通する信仰や祭祀の在り方が窺え、当地域との関係性を示す貴重な資料となるものである。

なお、当該期に属す特筆すべき遺物としては、試掘調査（T2）で出土した中国青磁碗（第4図2）がある。この碗は、12世紀代の初期龍泉窯あるいは同安窯系のものであり、当時としては高級品として流通していたものである。このような中世の中国磁器（白磁・青磁）は、掘立柱建物跡（SB01）を構成する柱穴（SP04）や、柱穴（SP07）・（SP08）・（SP11）からの出土も見られる。また、李氏朝鮮陶器（粉青沙器）の皿が柱穴（SP25）から出土している。



第47図 中世 1:500



第48図 近世 1:500

その他、当地域では出土が稀なものとして、土坑（SK04）から越前焼の甕（第 26 図 81）が、中世遺構面の基盤層（第 2 ~ 3 面間層※基盤層の最上位からの出土で、第 2 面からの混入品と思われる）から滑石製石鍋〔短冊状石製品〕（第 43 図 141）がみられる。なお、この越前焼の甕と滑石製石鍋〔短冊状石製品〕については別項を設けて後述する。

中世の本遺跡は、掘立柱建物跡や井戸、また多くの柱穴が存在する状況が示すように、当地の活用を比すると、最盛期とも言える時期である。これは、先述の「1. 字名からみる森屋敷遺跡とその周辺」の項で述べたとおり、当地周辺に中世の館などが想定できることと合致する結果となっている。東側の丘陵谷部に立地する能登堀遺跡などでも中世の遺物が散見されることを考慮すると、能登堀遺跡付近から JR 宍道駅周辺に中世の居住域が広がっていたと考えられる。

近世（江戸時代）（第 48 図）

当該期の遺構としては、第 2 面の調査区南側で、柱穴 1 基（SP01）、土坑 3 基（SK01 ~ 03）、溝 1 条（SD03）を確認している。遺構の数は少なく、当該期の出土遺物も中世に比べるとかなり減少している。確認できた遺構のうち、SP01 からは炉壁と考えられる破片が、SK01 からは火打石の出土が見られ、SP01 においては、残存する柱を確認しているが、これに伴う建物跡を特定するには至っていない。他の溝、土坑についても、遺構の用途・性格が分からぬものであったが、少なからずこれら遺構が確認できたことより、中世から引き続き当地が利用されていたことが分かる。第 2 面上の出土遺物も合わせ考察すると、その時期は 16 ~ 18 世紀代と考えられよう。

なお、遺構を検出した第 2 面上に堆積する遺物包含層（第 1 ~ 2 面間層）からは、古墳時代～江戸時代までの遺物が出土していることから、この堆積土は江戸時代に埋められたと考えている。

3. 越前焼の甕について

本遺跡から出土した越前焼の甕（第 26 図 81）について、若干の考察を述べる。

越前焼は、12 世紀後半に東海地方の瓷器系の技術を導入して越前（現：福井県越前町）で始まり、中世から近世を通じて生産された瓷器系陶器である。甕・壺・鉢などの器種が主に生産され、中世後期には北海道から島根県までの日本海沿岸地域を中心に広く流通していたことが知られている。^[15] 中世における西日本海沿岸地域への流通をみると、山陰では、中世後期以降に確認されるようで、鳥取県の秋里遺跡（鳥取市）、倉谷西中田遺跡（西伯郡大山町）、久米第 1 遺跡・米子城跡遺跡（米子市）、田住桶川・田住第 8 遺跡（西伯郡会見町）などで出土がみられる。島根県下では本遺跡の他、澄水寺跡（松江市福原町）、北台遺跡^[16]（松江市八雲町）、青木遺跡・矢野遺跡（出雲市）で出土を見るが、石見地域ではほとんどみられない。

本遺跡出土の越前焼は、第 2 面で検出した楕円形状の土坑（SK04）から出土したものである。遺構の性格は不明であるが、土坑内で胴部の破片が折り重なって検出されたもので、廃棄されたものと考えられる。出土した甕は胴部破片のみで全形を窺い知ることはできないが、復元胴部径は最大 68 cm を測る大型甕であったと考えられる。遺構の時期は、下層から出土した東播系の須恵器鉢の年代から 13 世紀代と考えられることから、この甕も同年代のものと思われる。なお、越前焼の出土は宍道

町では初現となる。

ここで、この越前焼の甕が本遺跡にもたらされた流通経路を考えてみたい。中世における物資の大量輸送は水運（海運・内陸水運）が主で、当時の西日本海地域には北陸（若狭小浜）一山陰（出雲美保関）、山陰（出雲美保関）一山陽（周防）および九州（筑紫）などの廻船ルートがあり、広域的な地域経済圏が形成されていた。⁽¹⁸⁾ 越前で生産された大甕も、この廻船ルートによって出雲地方に運ばれたものと考えられる。⁽¹⁹⁾

当時の外海航路の主要港である美保関から中海を経た大橋川沿岸には、港湾を意味する「潟」（白潟）の地名が残っている。中国明代の書『籌海図編』（明の嘉靖 41 年：1562 年）にある、「白潟」は、出雲地方の港湾の一つとして日本海から宍道湖内奥部に至る水運ルートの重要な港湾であったと考えられている。⁽²⁰⁾ また、時代は遡るが、『出雲国風土記』秋鹿郡の条にある「大野津社」（宍道湖の北岸にある現在の大野津神社）からは、古代の港である「津」の存在が窺え、宍道湖沿岸に港（「津」）の存在が予想されている。⁽²¹⁾ 戦国時代には、宍道要害山城や対岸の満願寺城などの宍道湖沿岸にある城が舞台となり、宍道は湖上水運の重要な拠点となっていた。以上のように、宍道湖では古来より水運が展開していたことがみてとれる。宍道町内での中世の港がどこにあったかは明確でないが、「1. 字名からみる森屋敷遺跡とその周辺」の項で前述した佐々布川の河口部に残る字名から当地に港が存在していた可能性が考えられる。

本遺跡で出土した越前焼からは、外海港美保関～宍道湖沿岸部へと繋がる水運の存在が指摘でき、宍道は物資の経由地および集散地として位置していたであろう。⁽²²⁾

4. 滑石製石鍋の破片について（表 5）

本遺跡では、試掘調査（T4）と遺物包含層（第 2 ～ 3 面間層、最上位）からそれぞれ 1 点ずつ滑石製石鍋の破片が出土している（このうち、試掘トレンチ T4 出土の破片は実測に耐えない小片であったため、非掲載としている）。

包含層から出土した破片（第 43 図 141）については、加工痕から石鍋からの転用品と考えた。方形を成し、温石の可能性が考えられるが、穿孔がみられないため本報告では短冊状石製品としている。⁽²³⁾

島根県下の滑石製石鍋については、川原和人氏によって集成が行われているが、近年の調査によって検出例が増えたため、川原氏の集成に若干の加筆をして報告する（表 5）。⁽²⁴⁾

滑石製石鍋は、古代から中世にかけて見られる石製品の煮沸容器で、寺院を中心に居館、官衙、国府などの遺跡や流通の拠点となる集落跡から出土する傾向が強いと言われている。西日本では長崎県西彼杵半島や山口県防長地域が主な生産地として知られ、九州・瀬戸内・近畿地方を中心として全国的に広く流通している。また、石鍋の流通には、海運の発達が関係していることが指摘されており、12 ～ 15 世紀に盛んに生産され流通していた石鍋は、鉄鍋の普及と符合するように、16 世紀代には消滅してゆく。⁽²⁵⁾

島根県下では本遺跡を含め、現在、26 遺跡 50 点の出土例が確認される。石鍋が出土する遺跡の多くは、上記で指摘されるような各地域における主要な遺跡となっている。また、その分布を見ると、

ほとんどが日本海沿岸部に位置しており、船運による流通を裏付けるものと言える。一部、三田谷Ⅰ遺跡（出雲市）や大蔵遺跡（鹿足郡津和野町）など内陸部の遺跡でも出土をみるが、それらの遺跡の多くは港のある沿岸部から河川を遡った上流にあり、河川水運によって運ばれたものと考えられる。

宍道町内では、本遺跡の他、深坪遺跡、能登堀遺跡でも石鍋破片が出土しており、越前焼の窯の流通で述べたように外海航路～宍道湖につながる水運経路が関係しているものと思われる。

表5 島根県における石鍋出土遺跡一覧表

遺跡名	所在地	出土位置	個数	部位	時期
1 森屋敷遺跡	松江市宍道町宍道	包含層(第2～3面) 試掘14	1 1	短冊状石製品(転用品) 小破片(非掲載)	
2 深坪遺跡	松江市宍道町宍道	包含層	1	口縁部	14世紀代か
3 能登堀遺跡	松江市宍道町宍道	包含層	1	鉗部破片(非掲載)	
4 柳遺跡	安来市荒島町・久白町	池状遺構	1	鉗部 口縁部	12世紀 14世紀
5 夫敷遺跡	松江市東出雲町宇出雲郷	水田跡	1	鉗部	
6 四王寺遺跡	松江市山代町144-3	地山加工段寄り	1	口縁部	14世紀代
7 出雲国府跡	松江市大草町	包含層	1 2	口縁部 体部破片(非掲載)	16世紀代か
8 神納遺跡	松江市八雲町日吉台	表探	1	鉗部	
9 三田谷Ⅰ遺跡	出雲市上塙治町半分		2	破片(非掲載)	
10 大井谷Ⅱ遺跡	出雲市上塙治町大井谷	A区大溝04I層	1	体部破片	
11 古志本郷遺跡	出雲市吉志町	K区SE03-04	1	小破片(非掲載)	
12 大槻古墳	出雲市吉志町		1		
13 青木遺跡	出雲市東林木町	Ⅱ区P607 Ⅲ区包含層	1 1	口縁部 底部(転用品の可能性あり)	12世紀後半～13世紀前半
14 菅原Ⅰ遺跡	出雲市船津町		1	口縁部	12世紀
15 神原Ⅱ遺跡	雲南市領原町	Ⅲ区E7-I杭	1	口縁部	13世紀後半
16 高津遺跡	江津市都治町	SB01	1	温石(転用品)	
17 鉢石遺跡	浜田市治和町相田	包含層	1	口縁部	
18 下府庚寺跡	浜田市下府町	第10調査区・包含層	1	口縁部	12世紀
19 横路遺跡	浜田市下府町	原井ヶ市地区・CP189	1	口縁部	16世紀代か
20 古市遺跡	浜田市下府町	包含層・その他の遺物	2	口縁部	13世紀
21 大姉遺跡	益田市久々茂町伊690-2他	Ⅲ区耕作土	1	小破片	12世紀後半～13世紀前半
22 大畠遺跡	益田市横田町	包含層	1	口縁部	14世紀
		9区P787	1	口縁部	14世紀
		包含層	1	口縁部	12世紀
		包含層	2	口縁部	
		井戸1	1	口縁部	13世紀
		建物跡40-3-P1429	1	体部	14世紀(造横から)
		溝状遺構3	1	口縁部	14世紀代
		溝状遺構3	1	体部	
		2-P591	1	温石(石鍋転用品)	
		2-P684	1	口縁部	13世紀
		包含層	4	口縁部、体部、底部	14世紀
23 冲手遺跡	益田市久城町		50		
24 野広遺跡	鹿足郡津和野町	1区・包含層	1	口縁部	12世紀後半～13世紀前半
25 大屋遺跡	鹿足郡津和野町	2区SX1	2	口縁部、底部	12世紀以降
26 九郎原Ⅱ遺跡	鹿足郡六日市町	第3次包含層	1	口縁～体部	14世紀後半～15世紀
計			1	口縁部	14世紀

* 石鍋の年代観については、川藤氏による分類(註24文献)及び、杉原氏の分類(註23文献)を参考とした。

5. まとめ

森屋敷遺跡の今回の調査では、弥生時代中期・古墳時代後期・飛鳥時代～江戸時代の遺構を確認し、各時代の様相を大まかであるが知ることができた。このうち、各地域の主要な遺跡でみられる弥生土器の大型広口壺が本遺跡で出土したことは、弥生時代中期の穴道地域の集落像を考えるうえで貴重な資料となり得るものであった。また、本遺跡の主要な時期となる中世については、畿内の埋井法が成された井戸の祭祀儀礼がみられたことや、1棟のみではあるが、中世の居館とも考えられる建物跡を確認できることは、穴道氏が榮華を誇った中世の穴道を垣間みることができる良資料となったと考える。その他、中世の中国磁器（青磁・白磁）や越前焼の甕、滑石製石鍋などの出土遺物からは、穴道湖を仲立ちとして外海とつながった広域的交易圏における水運の発展が窺え、水上交通の要衝地として栄えていた中世穴道の領主層あるいは有力者層の存在が想起される。

このように、今回の調査は各時代に渡り、穴道地域に新たな歴史資料を提示できた大変有意義なものであったと思われる。

発掘調査の最大の成果は、このような新たな地域の歴史を解明することである。今後も事業者や関係者の理解のもと、地道な発掘調査が行われ、地域の歴史が明らかにされていくことに期待したい。

島根県下出土の石鍋文献一覧

- 1 本報告書
- 2 『庄遺跡・深坪遺跡』島根県教育委員会 2010
- 3 『能登堀遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興財团 2009 (遺物は非掲載)
- 4 『塩津山丘陵遺跡群(塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡・附龜ノ尾古墳)』島根県教育委員会 1998
- 5 『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書—IV—』島根県教育委員会 1983
- 6 『風土記の丘地内遺跡発掘調査概報IV—島根県松江市山代町所在・四王寺—』島根県教育委員会 1985
- 7 『史跡出雲國府跡3』島根県教育委員会 2005
- 8 『八雲村の遺跡 八雲村埋蔵文化財分布調査報告書』八雲村教育委員会 1978
- 9 『三田谷I遺跡(Vol.3)』島根県教育委員会 2000 (遺物は非掲載)
- 10 『斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書III』出雲市教育委員会 2001
- 11 『古志本郷遺跡VI－K区の調査－』島根県教育委員会 2004 (遺物は非掲載)
- 12 『出雲市古志町大根古墳調査報告』山本清 1955
- 13 『青木遺跡(中近世編)』島根県教育委員会 2004
- 14 『畠ノ前遺跡・菅原I遺跡・クボ山遺跡・菅原II遺跡・菅原III遺跡・廻田V遺跡・保知石遺跡・浅柄II遺跡・柳ノ内遺跡』島根県教育委員会 2005
- 15 『神原II遺跡(3)』島根県教育委員会 2003
- 16 『高津遺跡』江津市教育委員会 2005
- 17 『浜田市鰐石遺跡出土遺物—弥生前期土器を中心として—』『古代文化研究No.13』柳原博英 島根県古代文化センター 2005
- 18 『下府庵寺跡－平成元年度～平成4年度市内遺跡発掘調査概報－』浜田市教育委員会 1990
- 19 『横路遺跡(原井ヶ市地区)浜田東中学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』浜田市教育委員会 1998
- 20 『伊甘土地区画整理事業に伴う古市遺跡発掘調査概報』浜田市教育委員会 1995
- 21 『上久々茂土居跡・大蛇遺跡 一般国道191号改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会 1994
- 22 『益田養護学校建設に伴う大畑遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会 1999
- 23 『沖手遺跡・久城東遺跡』益田市教育委員会 2010
- 23 『沖手遺跡』益田市教育委員会 2010
- 23 『沖手遺跡－1区の調査－』島根県教育委員会 2006
- 23 『沖手遺跡・専光寺遺跡』島根県教育委員会 2008
- 24 『野広遺跡』島根県教育厅埋蔵文化財調査センター 2012
- 25 『大蔭遺跡第1・2・4・6・7・8次発掘調査報告書』津和野町教育委員会 2010
- 25 『大蔭遺跡第3・5・8次発掘調査報告書』津和野町教育委員会 2012
- 26 『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会 1980

註

- (1) 図の作成にあたっては、『穴道町歴史資料集（地名編）』穴道町教育委員会 2001 を参考とした。
※参考にした『穴道町歴史資料集（地名編）』中の図は、江戸時代から残る小字名を明治 22 年に当時の地籍図に記載されたものをもとに、小字の範囲を現在の 5000 分の 1 地形図に書き込んだものである。そのため、土地の形状や地番が改变されているところがあり、推定で範囲を示した部分もある。
- (2) 註(1)『穴道町歴史資料集（地名編）』穴道町教育委員会 2001 より。
- (3) 三崎神社とも称される。主祭神は素戔鳴尊である。由緒の詳細は不明だが、江戸時代には現在地にあったようである。三崎神社は、もとは雲松寺山（字名「猪道山」）にあり、明治 40 年代の山陰線開通時に鉄道地内に在った雲松寺が雲松寺山に移ったために水川神社に合祀された。一説によると、『出雲國風土記』にある穴道社がこの三崎神社であるといわれている。『穴道町ふるさと文庫 11 女夫岩遺跡を考える』穴道町教育委員会 1996 より。
- (4) 註(1)『穴道町歴史資料集（地名編）』穴道町教育委員会 2001 より。
- (5) 山根正明氏は、これらの城館用語の地名配置から、雲松寺山の小丘陵に城を配し、その北麓に土居や堀をめぐらした領主の居館の存在を推定している。「地名配置から見た佐々布川河口部の居館と山城」『穴道町歴史叢書 8』山根正明 穴道町教育委員会 2003 より。
- (6) 註(5)より。
- (7) 「近世往還 一穴道ある記一」『穴道町歴史叢書 2』石富寅芳 穴道町教育委員会 1998 より。
- (8) 「穴道町の中世」『穴道町史（通史編上巻）』井上寛司 穴道町史編纂委員会 2001 より。
- (9) 『穴道町史（資料編）』穴道町史編纂委員会 1999 より。
- (10) 久世康弘氏は、井戸内に埋まっている石について、軟弱になった地盤の補強対策のほか、井戸に蓋をする意味とともに何らかの祭祀儀礼と関係があることを提示している。「石はどうして埋められたのか（石を入れる）」『考古学論集』第 5 集 久世康弘 考古学を学ぶ会 2001 より。
- (11) 註(10)による。
- (12) 『向日市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 25 集 向日市教育委員会 1989
- (13) 『平安京左京七条三坊十五町』平安京跡研究調査報告第 12 輯 財團法人古代学協会 1984
- (14) 註(10)による。
- (15) 「中世日本海域の土器・陶磁器流通一観・壺・鉢を中心の一」『石川県埋蔵文化財情報第 15 号』徳永貞紹、柳原博英、岩田隆、大安尚寿、宮田進一、鶴巻康志、山口博之 財團法人石川県埋蔵文化財センター 2006 より。
- (16) 「松江市・澄水寺跡出土の陶磁器」『松江考古 第 8 号』岡崎雄二郎 松江考古学談話会 1992
※上記の報告では、常滑の大甕として紹介されているが、福井県 地域産業・技術振興課 参事（陶芸）田中照久、常滑市民俗資料館 館長 中野晴久の両氏による遺物調査において、越前焼の甕であることが指摘されている。
- (17) 『北台遺跡発掘調査報告書』八雲村教育委員会 1998
※上記の報告書では、常滑系の甕として報告されているが、福井県 地域産業・技術振興課 参事（陶芸）田中照久、常滑市民俗資料館 館長 中野晴久の両氏による遺物調査において、越前焼の甕であることが指摘され

ている。

- (18)『能州三崎浦専念寺文書からの海域史』泉雅博 跡見学園女子大学文化学会 2000 年、「中世西日本における流通と海運」『中世西日本の流通と交通』市村高男 橋本久和・市村高男編 高志書院 2004 より。
- (19)『玄達灘から発見された越前焼』『福井考古学会誌 第 5 号』田中照久 福井考古学会 1987 より。
- (20)『中世のプレ松江』『松江藩の時代』岡宏三山陰中央新報 2009 より。
- (21)『古代出雲の水上交通と交流』『石川県埋蔵文化財情報第 13 号 環日本海交流史研究集会の記録「古代日本海域の港と交流」』森田喜久男 財団法人石川県埋蔵文化財センター 2005 より。
- (22)註(8)前掲書より。
- (23)『觀世音寺出土の滑石製石鍋』『觀世音寺 一考察編一』杉原敏之 九州歴史資料館 2007 より。
- (24)『菅原 I 遺跡』『畠ノ前遺跡・菅原 I 遺跡・クボ山遺跡・菅原 II 遺跡・菅原 III 遺跡・迴田 V 遺跡・保知石遺跡・浅柄 II 遺跡・柳ノ内遺跡』川原和人 島根県教育委員会 2005 より。
- (25)『岡山大学 埋蔵文化財調査センター報 第 20 号』岡山大学埋蔵文化財調査センター 1998 より。
- (26)川原氏の集成時には、島根県下の石鍋はそのほとんどが長崎産とされている。註(24)より。
- (27)『滑石製石鍋のたどった道』『東アジアの古代文化 130 号』鈴木康之 大和書房 2007 より。
- (28)基本的に報告書に掲載された遺物をカウントし、非掲載遺物も把握できたものは含めた。ただし、集計したもの以外にも出土している可能性があることをお断りしておく。

参考文献

- ・『秋里遺跡』鳥取県文化財団 1990
- ・『朝日百科 日本の歴史別冊 歴史を読みなおす 7 中世の館と都市』朝日新聞社 1994
- ・『倉谷西中田遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター 2011
- ・『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』宇野隆夫 真陽社 1989
- ・『小町石橋ノ上遺跡・朝金第 2 遺跡・田住桶川遺跡・田住第 8 遺跡』鳥取県教育文化財団 1997
- ・『穴道町ふるさと文庫 7 穴道の街並みスケッチ』石富寅芳 穴道町教育委員会 1995
- ・『鳥取県米子市久米町久米第 1 遺跡』米子市教育委員会 1989
- ・『矢野遺跡』出雲市教育委員会 2010
- ・『米子城跡 21 遺跡』鳥取県教育文化財団 1998

遺物觀察表

土器

標題 番号	グリッド	出土位置	種類	器種	寸法(cm)			調整・手法の特徴	色調	残存	備考	
					口径	底径	高さ					
1	試掘 T4	弥生土器	甕	陶器	29.2	18.5	—	10.3	外 崩玉式・斜片切込・網突列点文 内 横溝または斜片切込	外 黄褐色～灰黃褐色 内 黄褐色～灰黃褐色	部部破片	V様式 弥生時代後期
2	試掘 T2	青磁	瓶	陶器	—	—	4.7	外 斜輪、片切込の複合による網突 内 斜輪、網突の底による網突文	外 オーブー色 内 オーブー色	部部破片	中国(若狭熊野郡)・網突文系 縄文時代前半(12世紀紀)	
3	JB1 T2	白磁	瓶	陶器	15.4	—	2.9	外 斜輪 内 斜輪	外 に・豆・青色 内 に・豆・青色	口部部10%	中国、透明で、いき 日本、透明で、いき	
5	C6	SP01	土師器	土師器皿	10.7	4.4	2.1	外 口縁・ナゲ、柄下半:回転直 内 ナゲ	外 黄褐色～灰色 内 黄褐色～灰色	15%	京都系土師器、手づな 16世紀後半	
6	C6	SP01	陶器	瓶	21.8	—	2.9	外 斜輪 内 斜輪	外 黄リーフ色 内 黄褐色	口縁部20%	肥前 17世紀代	
8	C5	SK01	土師器	环	—	7.4	1.4	外 回転ナゲ、回転直切底 内 回転ナゲ、見込み・回転ナゲ回転	外 淡黄褐色～淡黄色 内 淡黄褐色～淡黄色	底部20%	中世	
9	C5	SK01	土師器	环	—	8.0	2.0	外 回転ナゲ、回転直切底 内 回転ナゲ、回転直切底	外 に・豆・青色 内 に・豆・青色	底部20%	中世 15~16世紀代	
10	C5	SK01	土師器	盖	8.4	7.3	1.7	外 回転ナゲ、回転直切底 内 回転ナゲ、回転直切底	外 に・豆・青色 内 に・豆・青色	20%	中世 13世紀後半	
11	C5	SK01	土師器	盖	7.6	7.2	1.4	外 回転ナゲ、回転直切底 内 回転ナゲ、回転直切底	外 白色 内 白色	10%	中世か	
12	C5	SK01	土師器	土師器皿	12.0	3.4	2.4	外 口縁・斜片切込、柄下半:指圧直 内 回転ナゲ、見込み・回転ナゲ回転	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	20%	京都系土師器、手づな 16世紀後半	
13	C5	SK01	瓦質土器	灰炉小	—	—	3.5	外 唐草のタブン文 内 ナゲ	外 灰褐色 内 灰褐色	口縁部40%	中世 14~15世紀	
14	C5	SK01	陶器	甕	—	—	6.7	外 回転ナゲ、厚底した口部に網突帯 内 回転ナゲ	外 灰褐色～赤褐色 内 灰褐色～赤褐色	口縁部40%	肥前、糸田町 16世紀後半	
15	C5	SK01	磁器	合子 (高)	5.8	—	1.5	外 口縁:雷文の陰刻、天井部:青色で 花びら模様 内 斜輪	外 白色・青色 内 白色	15%	肥前、伊賀郡 17世紀後半	
18	B5,C5	SK02	土師器	土師器皿	10.7	—	2.4	外 回転ナゲ、柄下半:指圧直 内 回転ナゲ	外 黄褐色 内 黄褐色	口縁部15%	手づな 16世紀後半	
19	B5,C5	SK02	土器	(青化)	盛合	11.8	—	1.6	外 甕付 内 斜輪	外 淡オーブ色 内 淡オーブ色	口縁部20%	中国(若狭) 16世紀後半 鉢形ではない。手製
20	C5	SK03	土師器	土師器皿	7.6	6.2	1.2	外 回転ナゲ、回転直切底 内 回転ナゲ	外 灰褐色～に・豆・青色 内 灰褐色～に・豆・青色	10%	江戸時代	
21	B5	SP03	土師器	环	12.8	—	2.2	外 回転ナゲ 内 回転ナゲ	外 白色 内 白色	口縁部15%	中世 13世紀代	
22	B5,C5	SP04	土師器	环合	—	4.6	1.9	外 回転ナゲ 内 回転ナゲ	外 に・豆・青褐色 内 に・豆・青褐色	底部20%	中世 15~16世紀代	
23	B5,C5	SP04	土師器	盖	9.0	7.6	1.4	外 回転ナゲ、回転直切底 内 回転ナゲ	外 白色 内 白色	10%	中世 13世紀代	
24	B5,C5	SP04	青磁	楕円盒	10.2	—	2.0	外 斜輪 内 斜輪	外 明灰色 内 明灰色	口縁部10%	中国 中世	
25	B5,C5	SP04	白磁	小环	8.0	—	2.1	外 斜輪 内 斜輪	外 白色 内 白色	口縁部10%	中国 14世紀後半～15世紀	
26	B5,C5	SP04	白磁	盖	9.0	—	1.8	外 斜輪 内 斜輪	外 白色 内 白色	口縁部10%	中国 15世紀代	
27	C5	SP05	土師器	环	—	7.3	1.9	外 回転ナゲ、回転直切板 内 回転ナゲ、回転直切板	外 に・豆・青褐色 内 に・豆・青褐色	底部15%	内面に褐色物付着 13~14世紀	
28	C5	SP05	土師器	盖	9.0	8.0	1.5	外 回転ナゲ、回転直切板 内 回転ナゲ、回転直切板	外 白色 内 白色	15%	中世 13世紀代	
29	C6	SP06	弥生土器	蓋	31.8	—	3.1	外 回転ナゲ、口縁上面に2条の内側 内 回転ナゲ	外 に・豆・青色 内 に・豆・青色	口縁部20%	中国(三重県)、四・五種 14世紀後半 生糸付で中間部変更	
30	C6	SP06	漆器蓋	环	15.6	—	3.2	外 回転ナゲ 内 回転ナゲ	外 白色 内 に・豆・青色	口縁部20%	中国(南京)第3・4式 9世紀後半～10世紀前半	
31	C6	SP06	土師器	土師器皿	10.5	—	1.5	外 口縁:回転ナゲ、柄下半:指圧直 内 回転ナゲ	外 に・豆・青褐色 内 に・豆・青褐色	10%	京都系土師器、手づな 16世紀後半	
32	B5,C5	SP07	土師器	内筒埴輪付 実筒型	—	5.6	—	外 黑化したため不明 内 黑化したため不明	外 に・豆・青褐色 内 に・豆・青褐色	突唇部削除 古墳時代	中国(近畿)など多くの块状の 筒化	
33	B5,C5	SP07	土師器	环	11.2	6.4	3.1	外 回転ナゲ、回転直切底 内 回転ナゲ	外 白色 内 白色	20%	中世 13世紀後半	
34	B5,C5	SP07	土師器	环	12.6	8.0	2.3	外 回転ナゲ、回転直切底 内 回転ナゲ、回転直切底	外 に・豆・青褐色 内 に・豆・青褐色	底部10%	中世	
35	B5,C5	SP07	土師器	盖	8.5	5.9	2.4	外 回転ナゲ、回転直切底 内 回転ナゲ	外 に・豆・青褐色 内 白色	20%	中世 13~14世紀代	
36	B5,C5	SP07	土師器	盖	10.2	—	2.3	外 回転ナゲ、柄下半:ナゲ 内 ナゲ	外 に・豆・青褐色 内 に・豆・青褐色	口縁部15%	中世	
37	B5,C5	SP07	土師器	盖	9.4	5.2	1.4	外 回転ナゲ、回転直切底 内 回転ナゲ、見込み・同心丸ナゲ回転	外 白色 内 白色	20%	中世 13~14世紀	
38	B5,C5	SP07	土師器	盖	8.4	7.3	1.5	外 回転ナゲ、回転直切底 内 回転ナゲ	外 白色 内 白色	20%	中世 13世紀後半	
39	B5,C5	SP07	土師器	盛合	—	6.0	0.9	外 回転直切底 内 ナゲ	外 に・豆・青褐色 内 に・豆・青褐色	底部20%	中世	
40	B5,C5	SP07	漆器蓋	甕	—	—	2.9	外 回転ナゲ、口沿部分 内 ナゲ	外 反・灰白色 内 反・灰白色	部部破片	中国(瀬戸窓(龜山系S)) 漆器・宝町時代	
41	B5,C5	SP07	陶器	甕	—	30.1	4.7	外 ナゲ、桔伏工具直底 内 回転ナゲ(見込み・ナゲ)	外 に・豆・青褐色 内 に・豆・青褐色	底部20%	中國 中世	
42	B5,C5	SP07	白磁	画	12.6	—	2.0	外 斜輪 内 斜輪	外 白色 内 白色	口縁部20%	中国、森田V瓶 12世紀	
43	B5,C5	SP07	青磁	画	14.2	—	2.9	外 斜輪 内 斜輪	外 細灰褐色 内 細灰褐色	口縁部10%	中国(龍泉窓)、上三田D型 15世紀C	
45	C5	SP07	土師器	盖	11.3	7.0	2.4	外 回転ナゲ、回転直切底 内 ナゲ	外 浅黄色 内 淡黄色	20%	中世 13~14世紀代	
46	C5	SP07	青磁	画	—	5.2	2.1	外 斜輪 内 斜輪	外 淡オーブ色 内 淡オーブ色	底部10%	中国、奈良N型 13世紀後半～14世紀前半	
47	B5,C5	SP08	白磁	画	—	5.8	2.3	外 斜輪(高台:黒釉) 内 ナゲ	外 白色 内 白色	底部10%	中国、森田V瓶 11世紀後半～12世紀前半	
48	C5	SP10	土師器	盖	7.5	6.6	1.2	外 回転ナゲ、回転直切底 内 回転ナゲ	外 淡青褐色 内 淡青褐色	10%	12~13世紀代	
49	C5	SP11	漆器蓋	甕	—	—	2.3	外 扁球子目叩き 内 ナゲ	外 淡青褐色 内 淡青褐色	部部破片	中国(瀬戸窓(龜山系)) 漆器・宝町時代	

遺物觀察表

標題 番号	グリッド	出土位置	種類	器種	法量(cm)			調整・手作の特徴	色調	既存	備考
					口径	底径	高さ				
50	C5	SP11	土師器	壺	—	5.9	3.0	外:円筒ナダ、内:輪郭切削、内:輪郭ナダ	外:灰~黄褐色 内:灰~黄褐色	底部30%	中世 15~16世紀
51	C5	SP11	土師器	壺	8.1	4.4	1.8	外:円筒ナダ、内:輪郭切削、内:輪郭ナダ、見込み:手動ナダ切削	外:灰~黄褐色 内:灰~黄褐色	60%	中世 14~15世紀後
52	C5	SP11	陶器	擂鉢小	26.6	—	3.9	外:円筒ナダ	外:黒褐色 内:黒褐色	口縁部2%	14世紀後
53	C5	SP11	白磁	碗	15.2	—	1.9	外:施釉 内:施釉	外:灰白色 内:灰白色	口縁部5%	中国、南宋IV期、玉隆伏口縫 11世紀後半~12世紀後
54	C5	SP11	白磁	小坪	—	2.9	1.4	外:加厚、削り窓台	外:灰白色 内:灰白色	底部25%	中国 14世紀後半~15世紀後
55	C5	SP11	青磁	盤	22.4	—	3.3	外:施釉 内:施釉、鋸状工具による削除	外:オーリーフ色 内:オーリーフ色	10%	中国(磁州) 15~16世紀後
56	C5	SP12	陶器	擂鉢	—	—	4.9	外:円筒ナダ、内:輪郭切削、6mm以上の幅目	外:灰黃褐色 内:灰黃褐色	体部破片	前 唐宋
59	C6	SP13	須恵器	高台付坪	—	9.0	2.4	外:円筒ナダ、内:輪郭切削、内:ナダ	外:灰褐色 内:灰褐色	底部15%	出雲國府第1型式 7世紀後~8世紀前半
60	C6	SP13	土師器	壺	7.4	6.4	2.0	外:円筒ナダ、内:輪郭切削	外:灰~黃褐色 内:灰~黃褐色	20%	中世 13~14世紀後
61	C5,C6	SP14	土師器	壺	9.9	—	1.9	外:円筒ナダ 内:円筒ナダ	外:褐色 内:褐色	口縁部15%	中世 12~13世紀後
62	C5,C6	SP14	土師器	壺	7.7	6.5	1.5	外:円筒ナダ、内:輪郭切削、内:輪郭ナダ、見込み:ナダ	外:明赤褐色 内:明赤褐色	90%	中世 13世紀後半~14世紀後
63	C6	SP15	土師器	壺	—	8.6	1.5	外:円筒ナダ、内:輪郭切削、内:輪郭ナダ、見込み:手動ナダ切削	外:暗褐色 内:暗褐色	底部20%	12~13世紀後
64	C6	SP15	土師器	壺	6.7	5.9	1.5	外:円筒ナダ、内:輪郭切削、内:輪郭ナダ、見込み:手動ナダ切削	外:淡黃褐色~灰黃褐色 内:淡黃褐色~灰黃褐色	70%	中世
65	C6	SP15	土師器	壺	7.6	6.5	1.6	外:円筒ナダ、内:輪郭切削、内:輪郭ナダ、見込み:手動ナダ切削	外:淡黃色 内:淡黃色	20%	中世
66	C6	SP18	土師器	壺	—	6.2	1.9	外:円筒ナダ、内:輪郭切削、内:8mm以上の幅目	外:黄褐色~暗灰黃褐色 内:黄褐色~暗灰黃褐色	底部10%	中世 12世紀後
67	C6	SP28	土師器	壺	—	6.6	1.6	外:円筒ナダ 内:ナダ	外:褐色 内:褐色	底部15%	15~16世紀後
68	C6	SP28	陶器	擂鉢	—	—	4.5	外:円筒ナダ 内:ナダ、5mm以上の幅目	外:赤褐色 内:赤褐色	体部破片	前 15世紀後
69	C6	SP21	土師器	壺	—	6.0	1.2	外:円筒ナダ、内:輪郭切削	外:灰~褐色 内:灰~褐色	底部30%	13~14世紀
70	C6	SP21	陶器	鉢	17.7	—	2.3	外:施釉 内:施釉	外:白~米色 内:白~米色	口縁部5%	古瀬川 14世紀後半~15世紀
71	C6	SP21	陶器	擂鉢	—	10.2	4.2	外:円筒ナダ 内:8mm以上の幅目	外:灰~赤褐色 内:灰~赤褐色	底部10%	中世
72	E3,B4	SP23	土師器	壺	—	5.6	2.0	外:円筒ナダ 内:ナダ	外:灰~黃褐色 内:灰~黃褐色	底部10%	13~14世紀
73	E3,B4	SP23	須恵器	甕	7.6	6.5	1.8	外:和・勝子日叩印 内:椎葉文はねのくへ	外:灰褐色 内:灰褐色	体部破片	中世須恵器(亀山系と思われる) 鎌倉・室町時代
74	E3,B4	SP23	須恵器	鉢	25.6	—	4.5	外:円筒ナダ、口縁に重ね巻き模様 内:ナダ	外:灰褐色 内:灰褐色	口縁部5%	中世須恵器(亀山系)
75	B4	SP24	須恵器	甕	—	—	2.5	外:和・勝子日叩印 内:椎葉文	外:淡黃褐色 内:淡黃褐色	側~体部 底部破片	中世須恵器(亀山系) 室町時代
76	B4	SP24	陶器	擂鉢	—	—	3.3	外:円筒ナダ 内:ナダ、5mm以上の幅目	外:灰褐色 内:灰褐色	体部破片	前 中世
77	C4	SP25	陶器	壺	—	5.0	1.4	外:施釉、呑口付止目瓶、近:削鉋状の 内:施釉、見込み:止目瓶	外:暗褐色~暗褐色 内:暗褐色~暗褐色	底部5%	李光祖時代、粉青沙器 15~16世紀
78	B4	SP26	土器	擂鉢	—	—	3.9	外:ナダ 内:ナダ、3mm以上の幅目	外:灰~黃褐色 内:灰~黃褐色	体部破片	庵原不明(在地)
79	B4	SP27	土器	擂鉢	27.4	—	5.1	外:山形・円筒ナダ、口縫下:ナダ 内:輪郭切削、6mmの幅目	外:灰~黃褐色 内:灰~黃褐色	口縁部7%	庵原不明、前縫を複数したものだった 14世紀後
80	B2	SK04	須恵器	鉢	21.1	—	3.2	外:円筒ナダ、口縫に重ね巻き模様 内:横ナダ、粗直溝	外:灰褐色 内:灰褐色	粗直溝 13世紀	中世須恵器(東張系)
81	B2	SK04	陶器	擂鉢	—	—	38.4	外:横ナダ 内:横ナダ、粗直溝	外:黃褐色 内:黃褐色	体部30%	鎌倉~南北朝時代
82	C5	SP28	土師器	壺	13.2	—	2.9	外:円筒ナダ 内:ナダ	外:褐色 内:褐色	10%	出雲國府第1型式 11世紀後半~12世紀前半
83	C6	SP29	須恵器	甕	23.0	—	1.9	外:円筒ナダ 内:ナダ	外:灰褐色 内:灰褐色	口縁部5%	中世須恵器(東張系) 7世紀後~8世紀前半
84	B3	SK05	須恵器	蓋	14.4	3.5	2.3	外:円筒ナダ 内:ナダ、2.5mm以上の幅目	外:灰~黃褐色 内:灰~黃褐色	底部10%	李光祖時代、粉青沙器 15~16世紀
85	B3	SK05	須恵器	甕	—	—	4.3	外:平行引き、縦縫:横ナダ 内:心字形当具耳	外:灰褐色 内:灰褐色	体部破片	古墳時代~古代
87	B3	SK06	土師器	甕	31.2	—	1.9	外:横ナダ 内:ナダ	外:黄褐色 内:黄褐色	口縁部5%	古代
88	B3	SK06	土師器	高台付坪	—	5.6	1.3	外:円筒ナダ、高台:ナダ 内:ナダ	外:灰白色 内:灰白色	10%	出雲國府第4~7型式 9世紀中葉~10世紀前半
89	B3	SK06	土師器	把手	5.9	2.3	—	風化のため調整不明	外:淡黃褐色	10%	鶴林不明 時期不明
90	B4	SK07	土師器	甕	—	—	4.2	外:円筒ナダ 内:ナダ	外:灰~黃褐色 内:灰~黃褐色	底部40%	11~12世紀後
91	B4	SK07	土師器	甕	—	—	6.0	外:円筒ナダ 内:ナダ	外:灰~黃褐色 内:灰~黃褐色	底部30%	古代?
92	B4	SK08	土師器	甕	21.5	—	3.8	外:円筒ナダ 内:ナダ	外:灰~黃褐色 内:灰~黃褐色	口縁部5%	「の」字山跡 古墳時代中期後半~後圓筒手
93	B2	SK08	土師器	無高台甕	—	6.0	2.5	外:円筒ナダ、内:輪郭切削	外:明赤褐色~褐色 内:明赤褐色~褐色	底部30%	出雲國府第1型式 11世紀後半~12世紀前半
96	B2	SK08	土師器	甕	—	6.5	1.1	外:風化のため調整不明 内:風化のため調整不明	外:灰~褐色 内:灰~褐色	底部10%	12世紀後
97	B5,C5	第2面	土師器	把手	—	3.0	4.1	外:把手 内:把手	外:灰~褐色 内:灰~褐色	5%	土製把手の突起の可塑性あり 古墳時代後期。
98	C6	第2面	土師器	高台付坪	—	8.0	3.4	外:円筒ナダ 内:ナダ	外:淡黃褐色 内:淡黃褐色	底部15%	出雲國府第1型式 9世紀中期~9世紀後

標題 番号	グリッド	出土位置	種類	器種	法量(cm)			調整・手法の特徴	色調	残存	備考	
					口径	底径	高さ					
99	E2	第5面	土師器	無蓋台坪	—	7.4	2.0	外 回転ナダ、内側:各切頭 内 回転ナダ	淡黄褐色 内 淡黄褐色	底部10%	出雲國府第9式 1世紀後半～12世紀前半	
100	C6	第5面	土師器	皿	7.8	7.1	1.7	外 回転ナダ、内側:各切頭 内 回転ナダ	淡黄褐色 内 淡黄褐色	10%	13世紀後	
101	C6	第5面	土師器	皿	7.9	6.4	1.3	外 回転ナダ、内側:各切頭 内 回転ナダ	淡黄褐色 内 淡黄褐色	10%	中世 13世紀後	
102	E2	第2面	土師器	鉢	20.9	—	4.0	外 回転ナダ 内 回転ナダ	外 反白～淡黄褐色 内 反白～淡黄褐色	口縁25% 中世		
105	B3,4 C3,4	第2面	埴造器	蓋	10.0 推定	—	1.2	外 回転ナダ 内 回転ナダ	外 黄褐色 内 黄褐色	口縁25% 出雲國府第1式 7世紀後半～8世紀初頭		
106	B3,4 C3,4	第2面	埴造器	蓋	15.6	—	1.8	外 回転ナダ 内 回転ナダ	外 塗灰～暗灰色 内 塗灰～暗灰色	口縁25% 出雲國府第2式 7世紀後半～8世紀初頭		
107	E2	第5面	埴造器	高台付环	—	8.2	2.2	外 回転ナダ、脚止め切頭 内 回転ナダ、足込み:横ナダ	外 反白 内 反白	底部10%	出雲國府第1式 7世紀後半～8世紀初頭	
108	E2	第5面	埴造器	环	16.4	—	3.7	外 回転ナダ 内 回転ナダ	外 反白 内 反白	口縁25% 7世紀後半～8世紀初頭		
109	B6	第5面	埴造器	高台付皿	12.7	—	2.3	外 回転ナダ 内 回転ナダ	外 塗灰～暗灰色 内 塗灰～暗灰色	10%	出雲國府第4～6式 8世紀後半～9世紀前半	
110	B3	第5面	埴造器	鉢	37.6	—	13.0	外 口縁:横ナダ、体部:平行印刷 内 口縁:横ナダ、体部:同心円当具頭 内 横ナダ	外 反白 内 反白	15%	口縁下:1の沈黙 8～9世紀代	
111	E2	第5面	白磁	四耳釜	—	—	3.8	外 布白色 内 布白色	外 布白色 内 布白色	周全体 中国、大朝の青白磁 8世紀後半～12世紀前半		
112	B6	第5面	白磁	皿	18.4	—	5.3	外 布白色 内 布白色	外 反白 内 反白	15%	中国 14世紀前半	
113	E2	第5面	青磁	盤	22.9	—	1.8	外 布白色 内 布白色	外 塗オーライズ 内 塗オーライズ	口縁25% 中国、被覆している 15～16世紀代		
114	B4	第2面	陶器	瓶	7.9	3.2	5.2	外 布施 内 布施	外 布白色 内 布白色	30%	京都～奈良系 18世紀代	
115	E2	第1～2面	埴造器	蓋小夜張	—	5.0	3.5	外 回転ナダ 内 回転ナダ	外 反白 内 反白	出雲國府 7世紀後半～平成		
116	E2	第1～2面	埴造器	便	—	—	6.1	外 2本沈溝～横脚 工型による波状文 内 横ナダ	外 オーライズ黒色 内 反白	口縁25% 古墳時代後半～		
117	B4	第1～2面	埴造器	甕	17.2	—	3.8	外 回転ナダ 内 回転ナダ	外 反白 内 反白	口縁部10% 古代		
118	E2	第1～2面	埴造器	蓋	—	4.6 つまみ紐	1.8	外 回転ナダ、天井部:回転的削 内 ナラ:回転ナダ	外 反白 内 反白	20%	輪状つまみ、出雲國府第2式 7世紀末～8世紀初頭	
119	E2	第1～2面	埴造器	高台付环	14.2	—	2.0	外 回転ナダ 内 回転ナダ	外 反白 内 反白	口縁25% 出雲國府第2式 7世紀後半～8世紀初頭		
120	E2	第1～2面	埴造器	無蓋台坪	—	7.6	2.1	外 口縁:横ナダ、底:ナダ(凹頭?不明) 内 回転ナダ 内 横ナダ	外 反白 内 反白	底部10%	出雲國府第2式 7世紀後半～8世紀初頭	
121	E2	第1～2面	埴造器	高台付环	—	6.3	2.7	外 回転ナダ、底:横ナダ 内 回転ナダ、足込み:横ナダ	外 反白 内 反白	底部10% 出雲國府第2式 7世紀後半～8世紀初頭		
122	E2	第1～2面	埴造器	环	12.2	—	2.8	外 回転ナダ 内 回転ナダ	外 反白 内 反白	口縁25% 9世紀代		
123	B3,C5	第1～2面	土師器	皿	8.6	7.0	1.5	外 回転ナダ、脚止め切頭 内 回転ナダ、足込み:横ナダ	外 ぶじ・黒色 内 ぶじ・黒色	20%	出雲國府第2式 7世紀後半～8世紀初頭	
124	C6	第1～2面	白磁	瓶	14.7	—	3.7	外 布施 内 布施	外 布白色 内 布白色	10%	中国、森田玉山館 11世紀前半～12世紀代	
125	B3	第1～2面	青白磁	水注	—	4.3	2.7	外 布施、底:無施、陽輪、陽輪の草支文 内 布施、底:無施、陽輪形成の痕あり	外 青白磁 内 青白磁	底部20%	中国、八角舟4足 13～14世紀代	
126	E2	第1～2面	青磁	皿	—	6.6	2.6	外 無施 内 布施、見込み:火薬	外 反白 内 塗オーライズ	底部10% 中國(窯場未定)、大字府Y型 14世紀代		
127	B3	S09	土師器	甕	27.0	—	4.2	外 横ナダ 内 横ナダ	外 布白色 内 塗オーライズ	口縁25% 古墳時代後期前半		
128	B3	S09	土師器	甕	21.9	—	28.6	外 口縁:横ナダ、体部:縦・横のハケ 内 横ナダ、体部:縦・横のハケ	外 淡黄～淡灰黄色 内 淡黄～淡灰黄色	90%	体部下手に円形の穿孔あり 古墳時代後期前半	
129	B3	S09	(把子)	—	2.9	8.0	外 断面径 内 指子長	外 ぶじ・黒色 内 ぶじ・黒色	3%	古墳時代後期		
130	B3	S09	(把子)	脚断面径	29.0	3.9	6.7	外 ハンドル、把手:板状工具による成形 内 脱化した把手:板状工具による成形	外 ぶじ・黒色 内 ぶじ・黒色	10%	古墳時代後期	
131	C5	S014	土師器	瓶(押)	—	9.8	2.8	外 ハンドル、把手:板状工具による成形 内 ナダ	外 ぶじ・黒色 内 ぶじ・黒色	15%	古墳時代～後期	
132	C5	S014	埴造器	甕	29.4	脚断面径	—	1.8	外 横ナダ 内 横ナダ、瓶下:同心円当具頭	外 反白 内 反白	脚部破片	古墳時代後期
133	C4	S018	生糞土器	甕	—	—	3.2	外 瓶ハヌメ、利突円点文 内 ハケナ	外 塗灰黄～墨褐色 内 塗灰黄～墨褐色	脚部破片	墨小野模様 生糞土器中型	
134	C4	S018	生糞土器	甕	—	—	3.7	外 横ナダ 内 横ナダ	外 淡黄色 内 淡黄色	体部破片	墨小野模様 生糞土器中型	
135	B3,C5	第2～3面	生糞土器	甕	—	—	5.7	外 瓶化のため不明 内 瓶化のため不明	外 反白 内 反白	脚部破片	大堀田と思われる、呪縛式 生糞土器中型	
136	B3,C5	第2～3面	生糞土器	瓶小口	—	7.6	2.2	外 ハケナ 内 ハケナ	外 反白 内 反白	底部10% 墨小野模様 生糞土器中期		
137	B3,C3	第2～3面	生糞土器	甕	—	—	5.5	外 瓶ハヌメ、脚部倒立文 内 瓶ハヌメ、脚部倒立文	外 淡黄色 内 淡黄色	体部破片	墨小野模様 生糞土器中期	
138	B3,C3	第2～3面	土師器	瓶	—	—	8.1	ナダ ナダ	外 塗灰～墨褐色 内 塗灰～墨褐色	5%	古墳時代後期	
139	B3,C3	第2～3面	埴造器	甕	—	—	1.4	外 回転削り後ナダ 内 ナダ	外 反白 内 反白	15%	出雲國府 7世紀前半～中頃	
140	B3,C3	第2～3面	埴造器	(縦合口)	—	—	3.7	外 回転ナダ、2方に三角通孔 内 ナダ	外 塗灰 内 塗灰	20%	出雲國府 6世紀末～7世紀前半	

遺物観察表

土製品

博物 番号	グリッド	出土位置	種類	断面	法量(cm)			重量(g)	備考
					最大長	最大幅	最大厚		
II		試掘 T5	土師質	円筒	9.8	5.4	4.2	146.12	推定外径:12.4cm、推定内径:4.0cm 外面に施物(墨?)、瓶か丸
7	C6	SP01	土師質	切妻口	6.75	7.6	2.9	104.71	3mm以下のみの他、5mm以上の粘土塊、10mm以上の石を含む
56	C5	SP11	土製品	土壺	2.95	0.9(外径)	0.1(内径)	1.74	筋縫形
57	C5	SP11	土製品	土壺	2.35	0.9(外径)	0.1(内径)	2.40	筋縫形
103	B4,C4	第2面	土製品	土製瓦脚	—	13.2(直径)	6.2(既存高)	残存率20% 古墳時代	脚部削り、脚裏面:ケズリ
104	C5	第3面	土製品	土壺	3.4	0.9(外径)	0.1(内径)	2.38	筋縫形

木製品

博物 番号	グリッド	出土位置	種類	法量(cm)			転換重量(g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
44	B5,C5	SF02	等	19.9	0.6	0.5	1.25	

石製品

博物 番号	グリッド	出土位置	種類	法量(cm)			重量(g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
16	C5	SK01	火打石	4.65	2.7	2.35	40.13	馬蹄
17	C5	SK01	火打石	2.6	2.5	1.4	9.79	半馬蹄
80	B3	SK05	砾石	3.3	2.7	0.4	6.61	3面に使用範囲あり
141	B2,C2	第2~3面	短錐状石製品	5.5	4.7	0.7	36.45	滑石製石錐の体部を方形状に切削し軸用したものの、あるいは軸用未成品か
142	B3,C3	第2~3面	砾石	7.3	3.2	1.8	70.36	2面に使用範囲あり 横方向の切削あり

漆

博物 番号	グリッド	出土位置	種類	法量(cm)			重量(g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
90	B3	SK06	漆(壳)	4.95	3.65	3.3	64.28	外面に穴、多岐あり
92	C4	SK07	漆(壳)	5.65	5.8	2.5	62.37	外面に穴、多岐あり
143	B3,C3	第2~3面	漆	6.15	6.41	3.41	48.00	ガラス等の可能性あり 炭化物を含む

写真図版



調査前全景（南から）



調査区内北側堆積土（南から）



調査区内中央堆積土（東から）



調査区内西側堆積土（北東から）



第1面 完掘（北から）



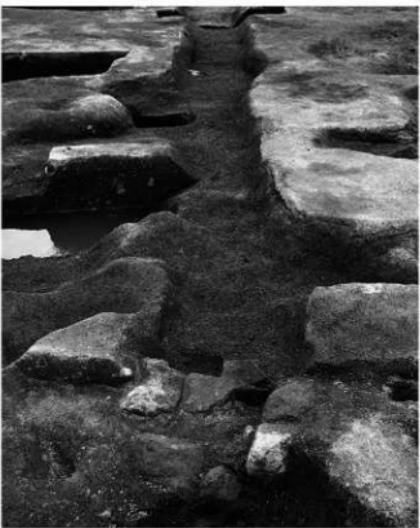
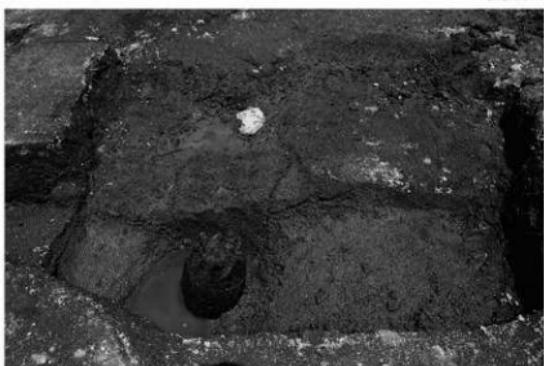
第2面 完掘（南から）



第2面 完掘（北から）



第2面 南側【SB01・SP01～22・SE02・SK01～03・SD03】完掘（東から）





SB01 完掘（南から）



SP02【SB01】完掘（東から）



SP03【SB01】完掘（南から）



SP04【SB01】
土層断面（南から）



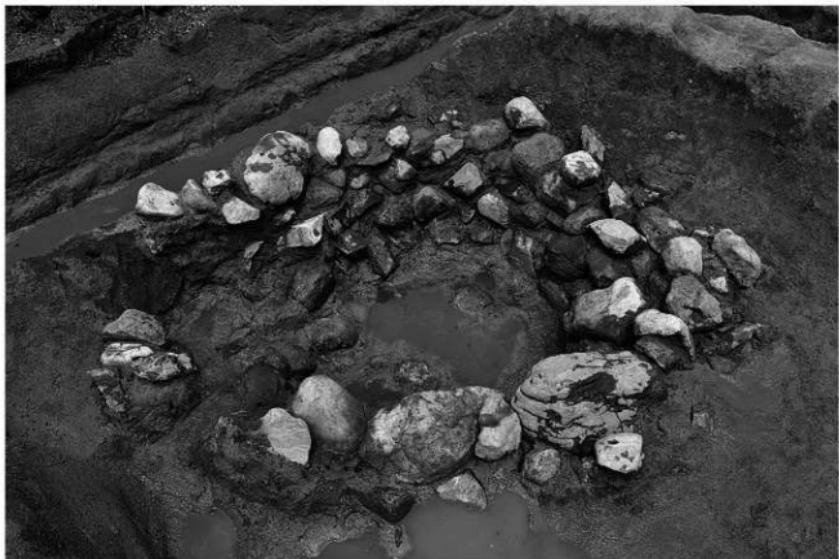
SP05【SB01】
完掘（東から）



SP06【SB01】
完掘(西から)



SE02 大形石検出状況（東から）



SE02 完掘 大形石除去後（東から）



SE02 完掘 石積み上部除去後（西から）



SE02 土層断面（南東から）

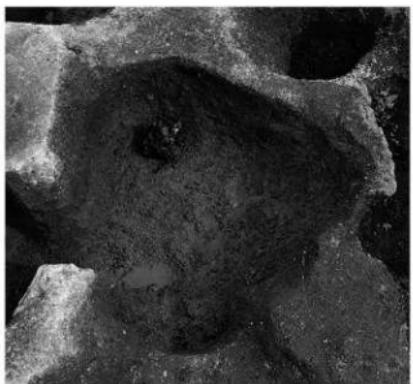
図版 10



SP09 完掘（西から）



SP12 完掘（南から）



SP17 完掘（北から）



SP18 完掘（東から）



SP22 完掘（南から）



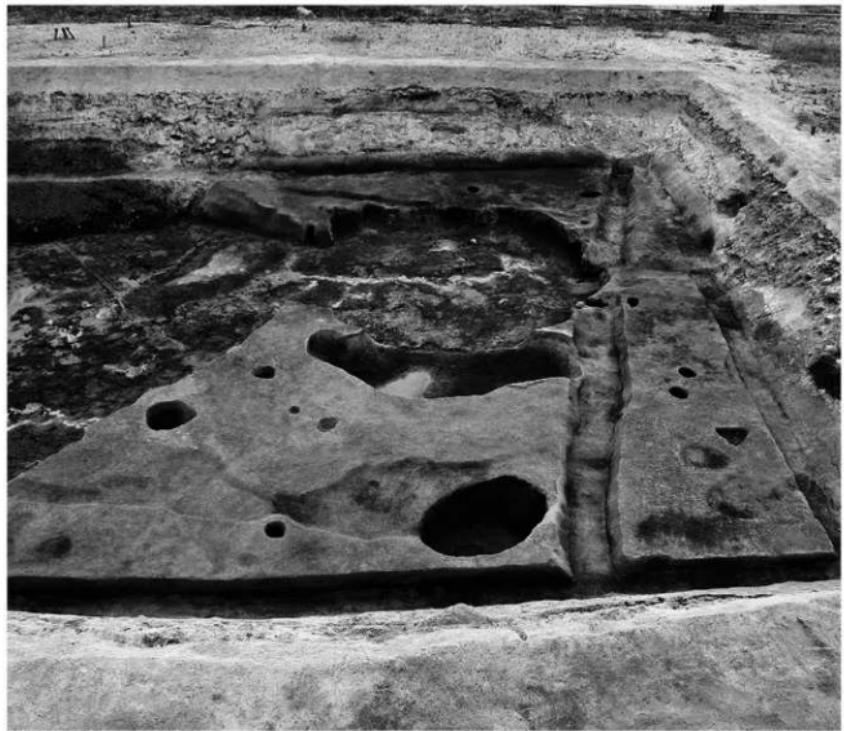
第2面中央【SP23～27】完掘（東から）



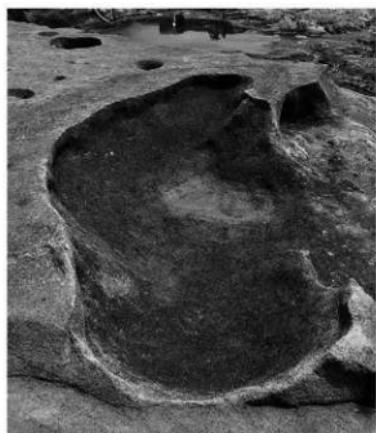
SP24 完掘（東から）



SP25 完掘（南から）



第2面 北側【SK04・08】完掘（東から）



SK04 完掘（北から）



SK04 土層断面（南から）



第3面 完掘（北から）



第3面 中央 完掘（東から）

図版 14



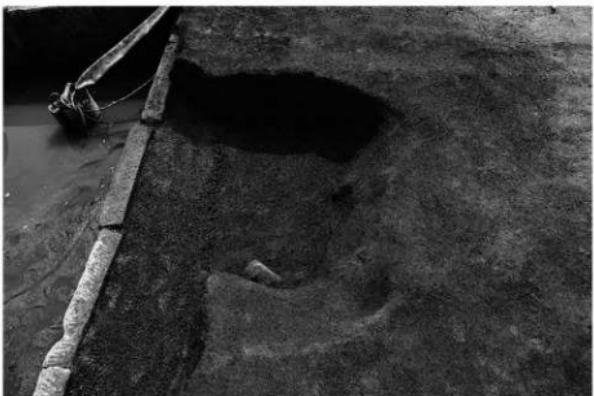
SP28 完掘（西から）



SP29 完掘（西から）



SK05 完掘（北から）



SK06 完掘（西から）



SK07 完掘（南から）



SK08 完掘（南西から）

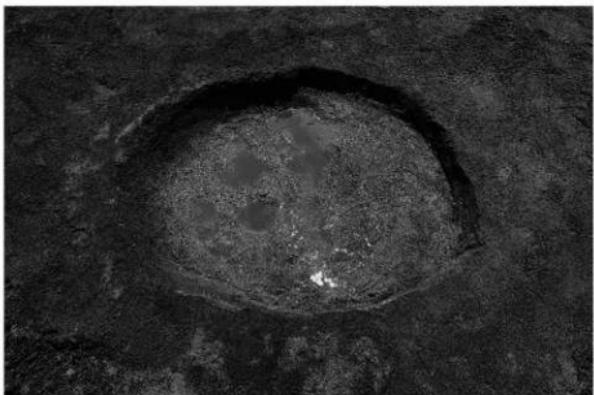
図版 16



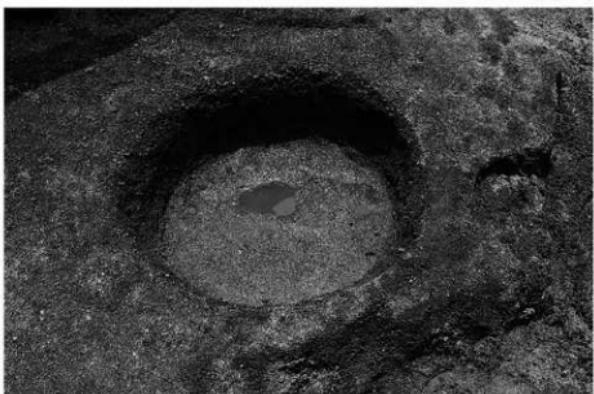
SK09 プラン検出（西から）



SK09 完掘（東から）



SK10 完掘（北から）



SK11 完掘（北から）

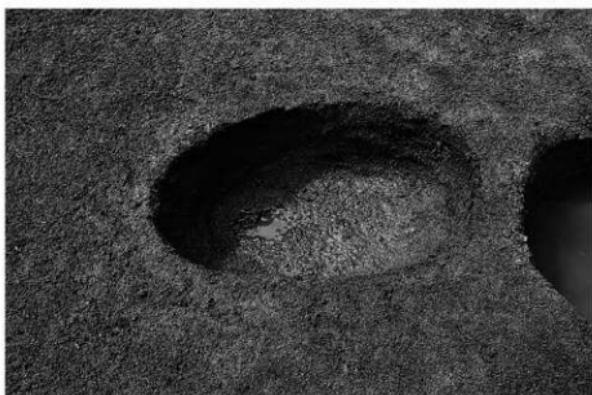


SK12 完掘（西から）

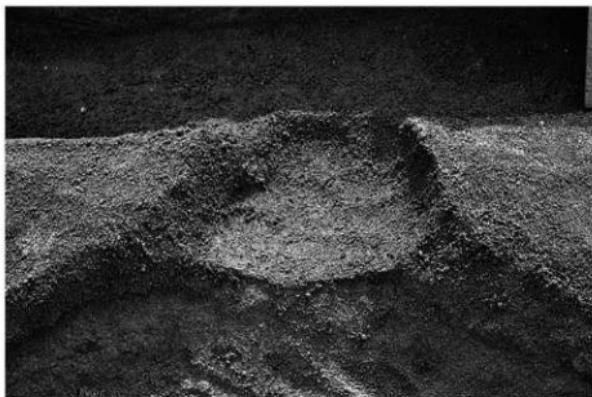
図版 18



SK13 完掘（北から）



SK14 完掘(北から)



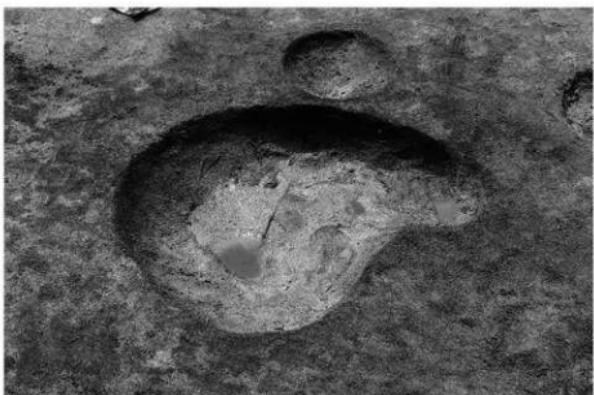
SK15 完掘（西から）



SK16 完掘（西から）

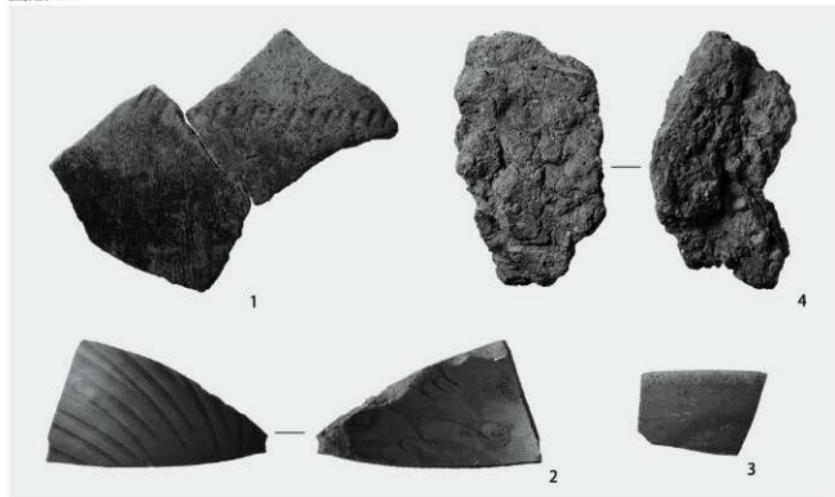


SK17 完掘（西から）

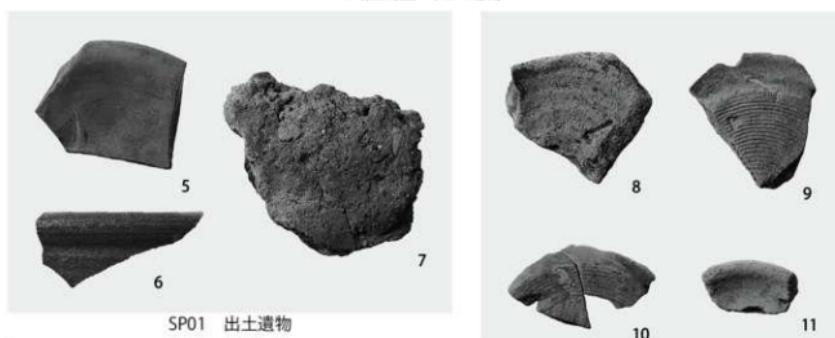


SK18 完掘（東から）

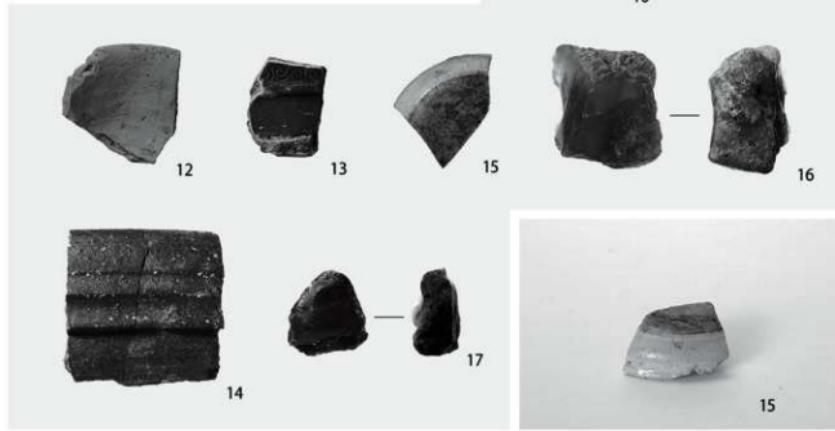
図版 20



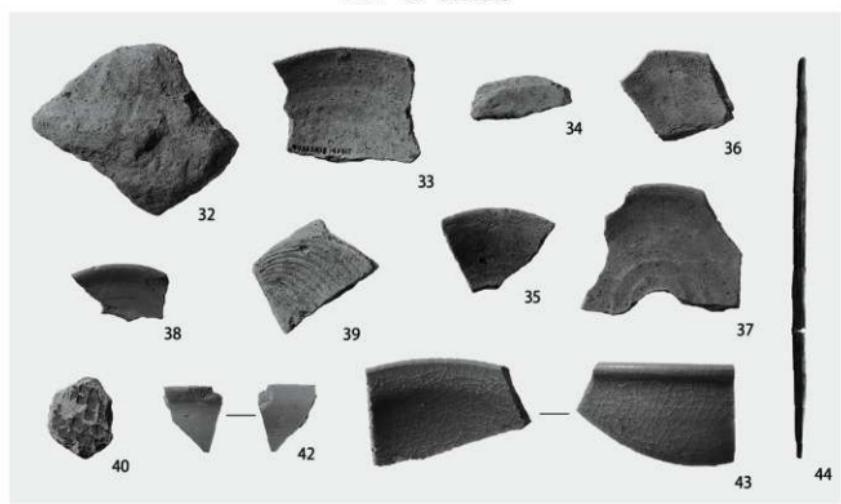
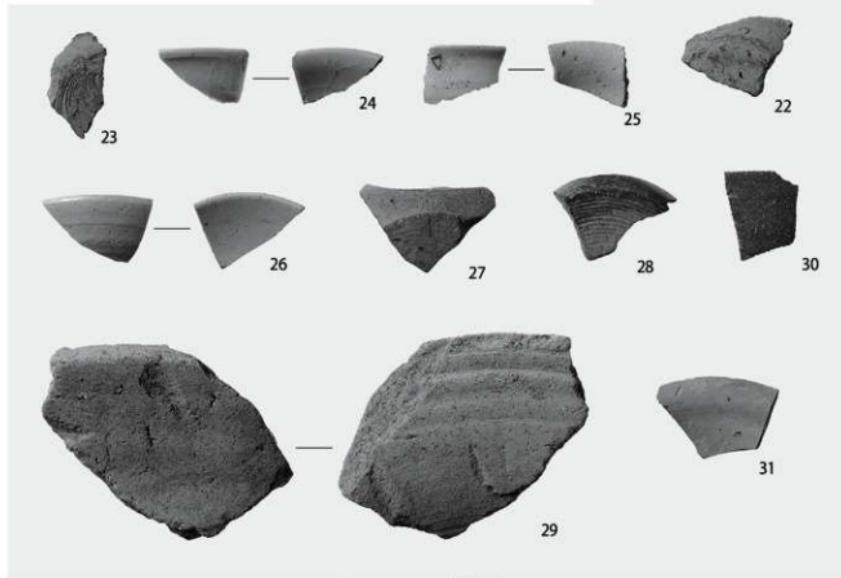
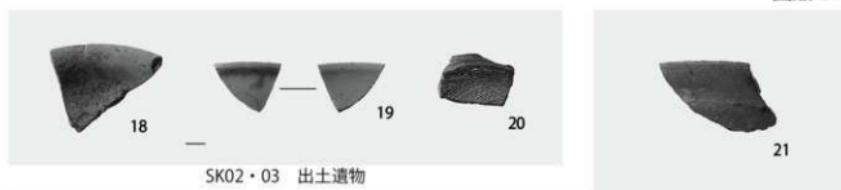
試掘調査 出土遺物

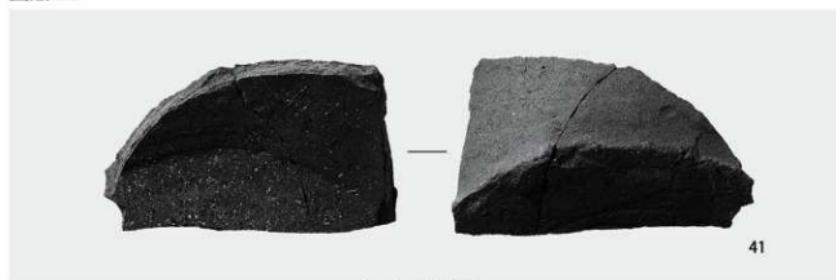


SP01 出土遺物

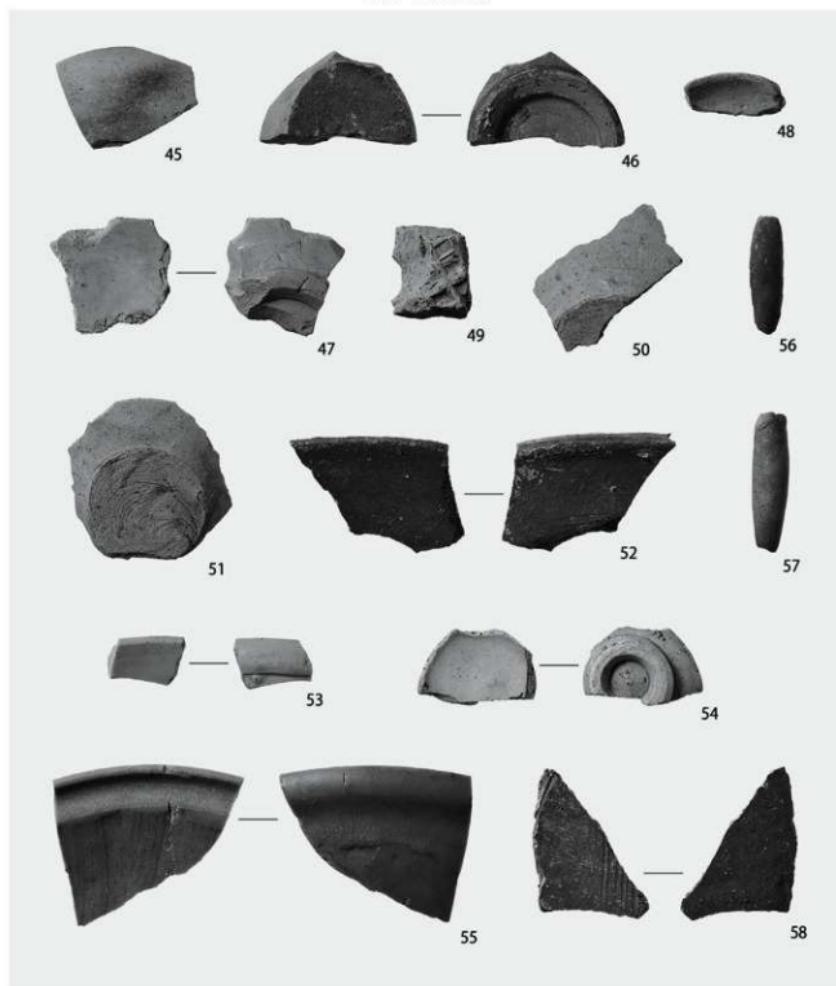


SK01 出土遺物

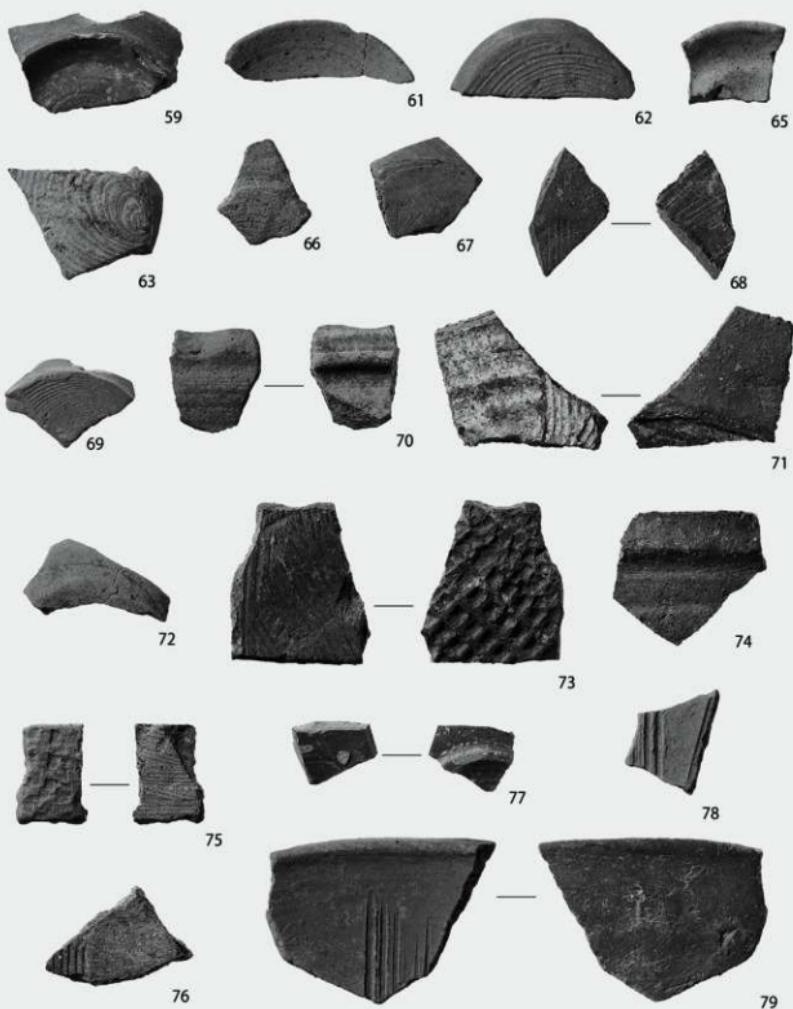




SE02 出土遺物



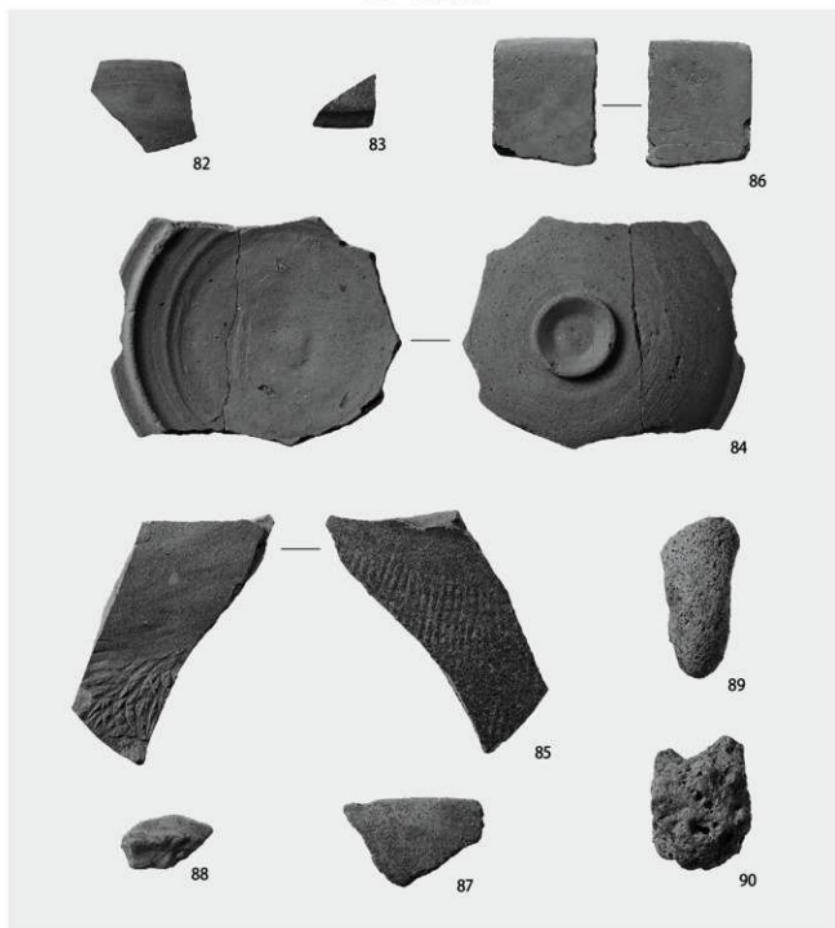
SP07・08・10～12 出土遺物



SP13 ~ 15 • 18 • 20 • 21 • 23 ~ 27 出土遺物



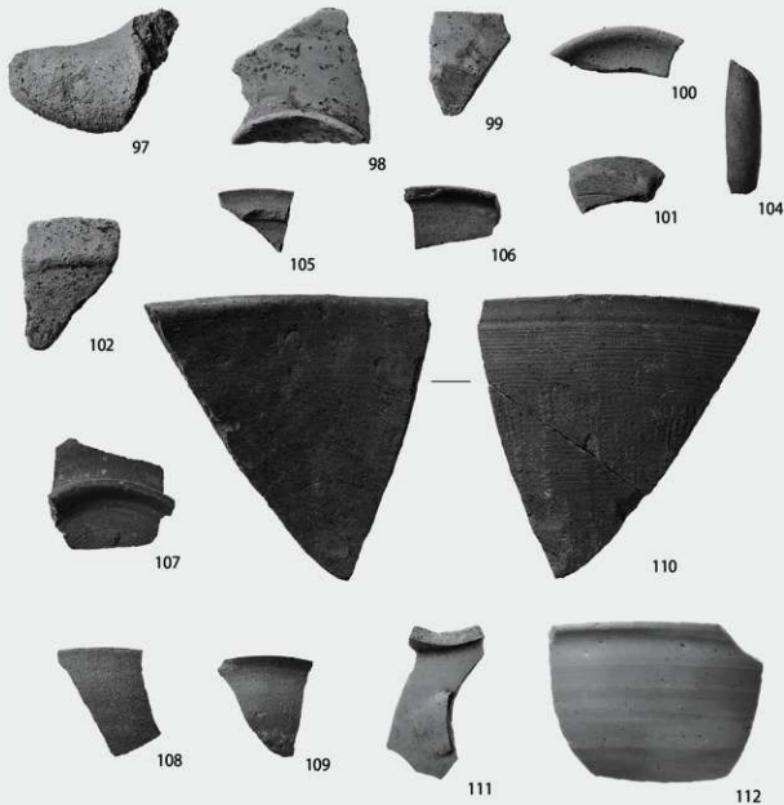
SK04 出土遗物



SP28 • 29 • SK05 • 06 出土遗物



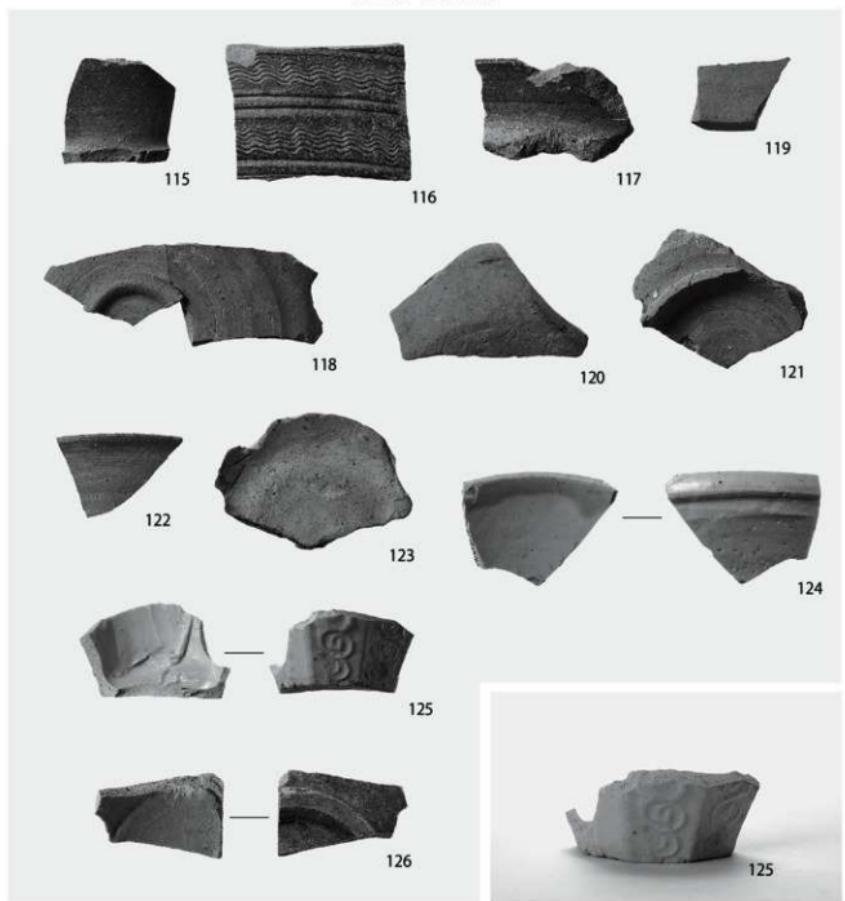
SK07・08 出土遺物



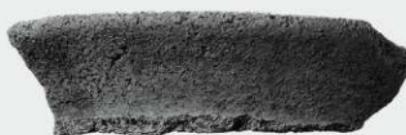
第 2 面 出土遺物



第2面 出土遗物



遗物包含層(第1～2面間層) 出土遺物



127



129



130



133



134



131



132



128



135

137



138



139



140



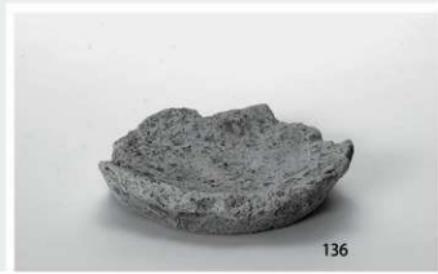
141



142



143



136

遺物包含層(第2～3面間層) 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	もりやしきいせき						
書名	森屋敷遺跡						
副書名	穴道複合施設整備事業に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 162 集						
編著者名	落合昭久、圓山 薫						
編集機関 所在地	島根県松江市教育委員会 (松江市 歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) 〒 690-8540 島根県松江市末次町 86 番地 TEL : 0852-55-5284						
	公益財団法人松江市スポーツ振興財団 (埋蔵文化財課) 〒 690-0401 島根県松江市島根町加賀 1263-1 TEL : 0852-85-9210						
発行年月	2015 年 1 月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
森屋敷遺跡	島根県 松江市 宍道町 宍道 885 番地 3	32201	H-322	35° 24' 28" 132° 54' 32"	20140414 ~ 20130731	503m ²	複合施設建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
森屋敷遺跡	散布地	弥生時代 ~ 近世 (近代)	掘立柱建物跡 井戸 柱穴 土坑 溝		弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 石器	弥生時代中期の土坑と遺物を検出 中世の建物跡・井戸・土坑・柱穴群を検出 越前焼の甕と滑石製石鍋が出土	
要約	弥生時代中期・古墳時代～近世の遺構と近代の製糸工場に伴う遺構が検出された。弥生時代中期の土坑からは甕片が、古墳時代の土坑からは祭祀に用いられたと考えられる甕が、古代の土坑からは鉄滓が出土した。中世では屋敷の一部と考えられる建物跡と井戸および土坑・柱穴群が検出され、中国産磁器・中世須恵器・越前焼・滑石製石鍋が出土した。						

松江市文化財調査報告書 第162集

穴道複合施設整備事業に伴う発掘調査報告書

森屋敷遺跡

平成27(2015)年1月

編集・発行 島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

印 刷 有限会社 高浜印刷
島根県松江市東長江町902-57